近蒐集品目録

株式会社　古美術　瀬　戸

目次

＊目録番号／作家名／作品名／頁数を記載しております。

1 円山応挙　猛虎図 …… 3, 4
2 円山応挙　酔李白図 大幅 …… 5
3 長沢芦雪　蛇図 …… 6
4 長沢芦雪　藤花猿猴図 …… 7
5 長沢芦雪　金時山媼図 …… 8
6 円山応挙　琴棋書画之図 …… 9
7 森狙仙　草苺ニ猿図 …… 9
8 森狙仙　月下枝豆双猿図 …… 10
9 森狙仙　猿猴愛児図 …… 11
10 山口素絢　美人図 …… 12
11 渡辺南岳　美人之図 …… 12
12 円山応岱　幽霊図 …… 13
13 渡辺南岳　群童愛兎図 …… 13
14 原在中　寒山拾得 双幅 …… 14
15 渡辺南岳　美人図 …… 14
16 伊藤若冲　緑毛亀図 …… 15
17 伊藤若冲　親子亀図 …… 16
18 伊藤若演　双鶏見蜻蛉図 …… 16
19 曾我蕭白　池亭山水図 …… 17
20 曾我蕭白　鐘馗図 …… 18
21 曾我蕭白　竹叭々鳥 …… 18
22 池大雅　擬柯九思 郊村晩帰図 …… 19
23 与謝蕪村　竹林幽居図 …… 20
24 片山楊谷画 那波魯堂賛　松下猛虎図 …… 21
25 片山楊谷　小屏風 六曲半双 …… 22
26 岸駒　関羽周倉像 …… 23
27 岸連山　山屋驟雨図 …… 23
28 円山応挙　旭日游亀図 …… 24
29 長沢芦雪　竹石亀図 …… 24
30 山本梅逸　渓山訪友図 …… 25
31 山本梅逸　松樹花鳥図 …… 25
32 中林竹洞　雪中竹双鳥 …… 26
33 紀楳亭　雨中猛虎図 …… 26
34 中林竹渓　楊柳観音像 …… 27
35 谷文晁・酒井抱一画 亀田鵬斎賛　朧月秋草画賛 …… 28
36 山本琴谷　山水双幅 …… 28
37 野呂介石賛 阪上淇澳画　墨竹画賛 …… 29
38 増山雪斎　雪竹図 …… 29
39 谷文晁　瀑布図 …… 30
40 浅井柳塘　松下嘯虎図 …… 30
41 小田海僊　百老図 大幅 …… 31
42 宋紫山　菊花図 …… 32
43 渡辺玄対　唐子遊戯図 …… 32
44 池大雅　富嶽図 大幅 …… 33
45 釈独処賛 狩野探幽画　児持虎画賛 大幅 …… 33
46 諸葛監　花卉翡翠図 …… 34
47 宋紫石　朝顔図 …… 34
48 渡辺崋山　墨蘭明人筆意 …… 34
49 狩野探幽　竹林双虎図 双幅 …… 35
50 狩野探幽　菊芙蓉 双幅 …… 36
51 狩野安信　雲龍図 双幅 …… 36
52 狩野常信　龍虎 双幅 …… 37
53 狩野探信守道　昇鯉図 双幅 …… 37
54 狩野常信　初冬富士図 …… 38
55 狩野養川院　雪月花 三幅対 …… 38
56 酒井抱一　源実朝像 …… 39
57 酒井鶯蒲　布袋 …… 39
58 英一蝶　一本菊図 …… 39
59 英一蝶　雪夜行舟図 大幅 …… 40
60 英一蝶　猿廻之図 …… 40
61 浮田一蕙　旭日群鴉図 大幅 …… 40
62 伝教大師最澄像 …… 41
63 室町期　蓮池阿弥陀像 …… 42
64 江戸中期　琉球吹笛美人図 …… 43
65 横山清暉　追儺図 …… 44
66 皆川淇園　山村春色 …… 44
67 黄檗来鳳画 黄檗大成賛　雪中夜梅図 …… 44
68 広瀬台山画 井岡桜仙賛　秋景山水図 …… 44
69 木下逸雲　紅葉山水図 …… 45
70 江上瓊山　雪中山水図 …… 45
71 宋紫山　虎図 …… 45
72 十時梅厓　高士観瀑図 …… 45
73 日根対山　秋山清詠 …… 46
74 月僊　猛虎図 …… 46
75 木下逸雲　秋景山水図 …… 46
76 木下逸雲　雪中山水図 …… 46
77 橋本雅邦　四季花鳥 四幅対 …… 47
78 菱田春草　梅 …… 48
79 下村観山　五月雨の頃 …… 49
80 伊東深水　雪に暮る …… 50
81 下村観山　梅 …… 51
82 伊東深水　早春 額装 …… 51
83 池田輝方　大師詣 …… 52
84 木村武山　白衣観音 …… 52
85 木村武山　孤月柳鳥図 …… 53
86 木村武山　無花果鶏図 …… 53
87 河鍋暁斎　面壁之図 …… 54
88 河鍋暁斎　墨堤観桜図 …… 55
89 河鍋暁斎　風神雷神図 双幅 …… 55
90 河鍋暁斎　達磨図 …… 56

91 河鍋暁斎 宴席図 …… 56
92 池上秀畝 菊池正観公筑後河奮戦之図 …… 57
93 池上秀畝 寒月猛虎図 …… 57
94 小堀鞆音 豊公陣廻図 …… 58
95 尾竹国観 秀吉破明国書図 …… 58
96 高橋応真 槿花 …… 58
97 矢澤弦月 童女子守図 …… 58
98 大橋翠石 乕児之図 …… 59
99 尾竹竹坡 石榴 …… 59
100 藤井澄湖 盆踊 大幅 …… 60
101 渡辺省亭 桜・紅葉・雪景 三幅対 …… 61
102 田中柏陰 白雲仙館図 …… 62
103 今尾景年 桃林牧童図 …… 63
104 山元春挙 菊童子図 …… 64
105 菊池契月 美人水鏡図 …… 64
106 土田麦僊 清水の春 …… 65
107 山口華楊 清水之秋 …… 65
108 木島桜谷 春野牧牛図 …… 66
109 木島桜谷 双鹿 …… 67
110 小早川秋声 誉之的 …… 67
111 不染鉄 奈良風景 大幅 …… 68
112 石崎光瑤 朧月白鷺 …… 69
113 橋本関雪 夏山避暑図 …… 69
114 橋本関雪 松館訪隠図 …… 70
115 橋本関雪 影妓図 …… 70
116 北野恒富 春 …… 71
117 木谷千種 紅萩 …… 71
118 松林桂月 歳寒盟友 …… 72
119 窠本芳樹 帝釋天図 …… 72
120 加藤英舟 猛虎図 …… 73
121 菊池芳文 映桜花水禽図 …… 73
122 西山翠嶂 山雉 …… 74
123 榊原紫峰 狗児図 …… 74
124 日比野白圭 美人納涼図 …… 74
125 河鍋暁斎 化狸図 …… 75
126 高光一也 天上天下唯我独尊 …… 75
127 菊池契月 陽炎 …… 75
128 小林清親画 鶯亭金升賛 かちかち山画賛 …… 76
129 児玉果亭 松渓載雀・薫風入微・洞門白雲 三幅対 …… 76
130 室町幕府三十一代管領 細川高国 卯月九日付法興寺宛文書 …… 77
131 会津藩初代 保科正之 十二月八日付加々爪直澄宛消息 …… 77
132 江戸幕府八代 徳川吉宗 達磨図 小禽図 双幅 …… 78
133 武蔵忍藩七代 阿部正識 西施調布之図 …… 79
134 箱館奉行 外国奉行 堀利熙 五言古詩五行 …… 79
135 森川許六画 宝井其角賛 墨梅画賛 …… 80
136 与謝蕪村 俳句短冊 …… 80
137 加賀千代尼 蝶画賛 …… 80
138 加賀千代尼 砧画賛 …… 80
139 高遊外 二月廿一日付石川永庵宛消息 …… 81
140 細井平洲 梅花七絶 大幅 …… 81
141 山口素絢 柳に燕 画賛 …… 81
142 江戸幕府十五代 徳川慶喜 七言二句 二行 …… 82
143 会津藩九代 松平容保 夕立 和歌短冊 …… 82
144 西郷南洲 効祥 扁額 …… 83
145 久坂玄瑞 強暴云々詩 …… 83
146 西郷南洲 五言二句 二行 …… 84
147 西郷南洲 吾心如秤不為人作軽重 …… 85
148 武市半平太 墨梅図画賛 …… 85
149 島義勇 五絶二行 …… 86
150 勝海舟 三行書 …… 86
151 勝海舟 二行書 …… 87
152 高橋泥舟 心棒 和歌 …… 87
153 高橋泥舟 徳川家康遺訓 …… 88
154 佐藤一斎 論語一節 …… 88
155 貫名海屋 人見幽居僻吾知善拙尊 一行 …… 89
156 犬養木堂 即心是道主善為師 一行 …… 89
157 犬養木堂 即是為學何處不偶 一行 …… 89
158 渋沢栄一 貿易之大宗 扁額 …… 90
159 熊谷守一 露 額装 …… 90
160 山本五十六 寿 …… 90
161 渋沢栄一 短冊 額装 …… 90
162 平田郷陽 熟柿 …… 91
163 今井景樹 花鳥図 風炉先屏風 二曲一双 …… 91
164 柴原魏象 憩い 屏風 二曲半双 …… 92
165 伝 土佐光茂 平家物語図屏風 六曲一双 …… 93, 94
166 狩野常信 物語図屏風 六曲一双 …… 95, 96
167 江戸中期 源氏物語図屏風 六曲一双中屏風 …… 97, 98
168 岸駒 墨梅墨竹図屏風 六曲一双 …… 99, 100
169 橋本関雪 春秋山水図屏風 六曲一双 …… 101, 102
170 山本光一 四季草花小禽図屏風 六曲一双中屏風 …… 103
171 勝海舟 書屏風 六曲一双中屏風 …… 104
172 小山栄達 屋島合戦図屏風 六曲半双 …… 105
173 武田一路 楠木正成迎後醍醐帝図屏風 六曲半双 …… 106
174 中村春亭 広南従四位白象図 …… 107
175 谷舜媖画 中田粲堂賛 釣舟図 夫婦合作 小品 …… 107
176 酒井忠以 妙法蓮華経観世音菩薩普門品並扉絵 巻物 …… 107
177 藤本鉄石 花火画賛 …… 108
178 浮田一蕙 七草之図 …… 108
179 熊谷守一 浜 額装 …… 109
180 香月泰男 花縮砂 額装 …… 110
181 村上華岳 鷺棲松籟 …… 111
182 入江波光 東天紅 倣法隆寺塑像 …… 111
183 石川大浪 龍虎 双幅 …… 112
作家略歴 …… 113～119

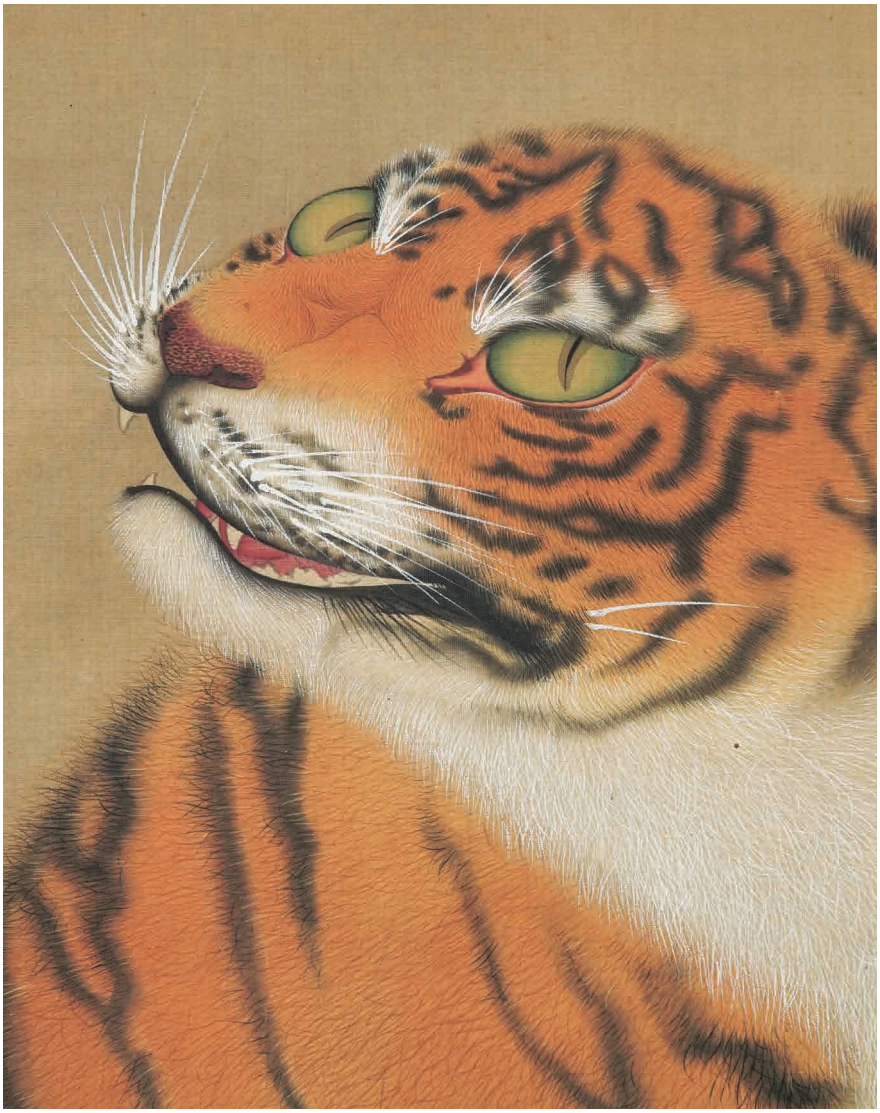
1

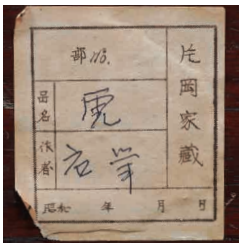
円山応挙　猛虎図

絹本着色　二重箱入　本紙 巾41×竪103　総丈 巾53×竪192.5cm　安永六年（一七七七）四五歳　表具少オレ　本紙微少シミ・微少オレ　**片岡家旧蔵**

お問合せください

円山応挙
一一八頁参照





2

円山応挙　酔李白図 大幅

絹本着色金泥　箱入　本紙 巾68.5×竪37.5　総丈 巾85×竪132.5cm

天明七年（一七八七）五五歳　微少シミ・微少オレ

円山応挙
一一八頁参照

八十五万円
(850,000JPY)

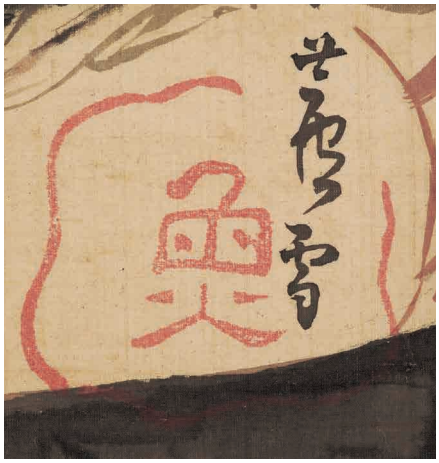
3

長沢芦雪　蛇図

絹本着色　箱入　本紙巾27×竪17.5　総丈巾52×竪118cm

三百万円
(3,000,000JPY)

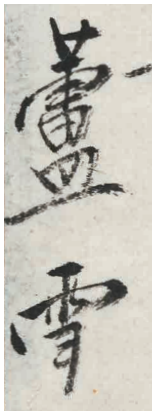
長沢芦雪
一一七頁参照



4

長沢芦雪　藤花猿猴図

紙本水墨淡彩　箱入　本紙 巾25.5×竪102.5　総丈 巾37.5×竪165cm　『長沢蘆雪「かわいい」を描く筆』（東京美術二〇二三年）所載



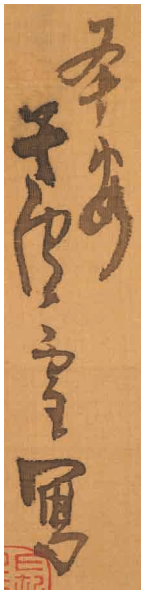
百八十万円
（1,800,000JPY）

5

長沢芦雪　金時山媼図

絹本着色　箱入　本紙 巾56×竪116　総丈 巾72×竪210.5cm　本紙修復痕

五十五万円
(550,000JPY)



長沢芦雪
一一七頁参照

6 **円　山　応　挙　　琴棋書画之図**

紙本水墨　箱入　本紙 巾28.5×竪24　総丈 巾42×竪113.5cm
少オレ・少傷ミ　円山応震紙中極

二 十 五 万 円
(250,000JPY)

円山応挙　118頁参照　**円山応震**　118頁参照

7 **森　　狙　　仙　　草苺ニ猿図**

絹本着色　箱入
本紙 巾51×竪37.5　総丈 巾66×竪135cm
少シミ　**太巻**

七 十 五 万 円
(750,000JPY)

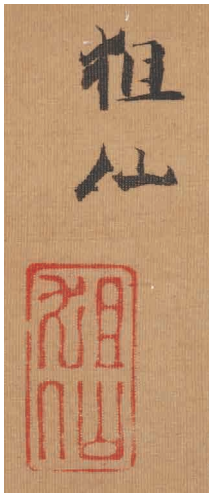
8

森　狙　仙　月下枝豆双猿図

絹本着色　川端茂章箱書　本紙 巾33.5×竪102.5　総丈 巾47.5×竪182.5cm　本紙微少傷ミ

九十五万円
(950,000JPY)

森狙仙
一一九頁参照
川端茂章
一一四頁参照

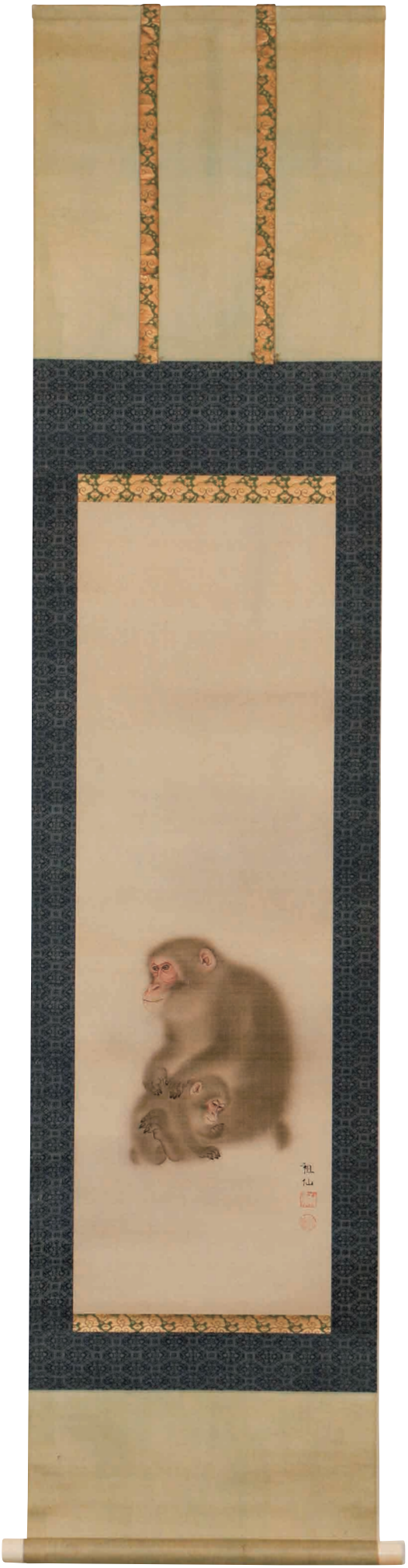


9

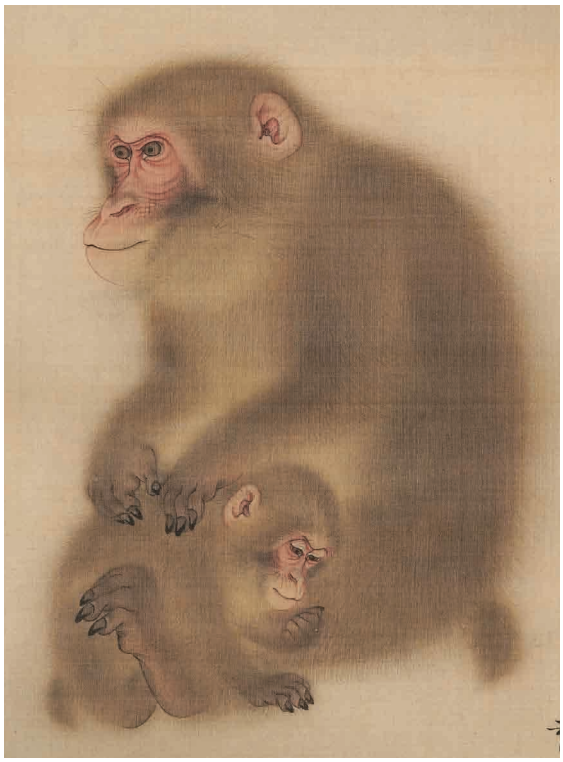
森　狙　仙　猿猴愛児図

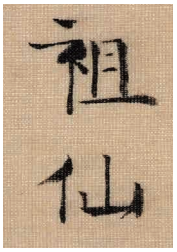
絹本着色　箱入　本紙 巾27.5×竪87.5　総丈 巾38×竪167.5cm　表具微少シミ

七十五万円
(750,000JPY)



森狙仙
一一九頁参照





10

山口素絢　美人図

絹本着色金泥　箱入　本紙 巾41.5×竪108.5　総丈 巾58×竪202cm　少オレ　本紙微少シミ

三十五万円
(350,000JPY)

山口素絢
一一九頁参照

11

渡辺南岳　美人之図

絹本着色金泥　箱入　本紙 巾34×竪94　総丈 巾46×竪189cm　本紙修復痕

二十五万円
(250,000JPY)

渡辺南岳
一一九頁参照

12

円山応挙　幽霊図

紙本着色　箱入　本紙巾45×竪123　総丈巾57×竪196cm　本紙修復痕

五十五万円
(550,000JPY)

円山応挙
一一八頁参照

13

渡辺南岳　群童愛兎図

絹本着色金泥　箱入　本紙巾40×竪97.5　総丈巾54.5×竪187cm　本紙少シミ

『当市下京鳳菴氏及某家所蔵品入札』目録（昭和八年）並『古画総覧』所載

『当市下京鳳菴氏及某家
所蔵品入札』目録

二十五万円
(250,000JPY)

15

渡辺南岳　美人図

絹本着色金泥　二重箱入　本紙 巾36×竪105.5　総丈 巾49×竪186cm　本紙修復痕　円山応立極

二十五万円
(250,000JPY)

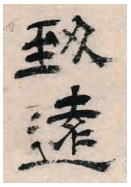
14

原在中　寒山拾得 双幅

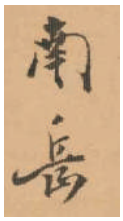
紙本水墨　箱入
本紙 各 巾26.5×竪126.5
総丈 各 巾38×竪194cm
本紙修復痕

二十五万円
(250,000JPY)

原在中
一一八頁参照



渡辺南岳
一一九頁参照
円山応立
一一九頁参照



円山応立極

16

伊藤若冲　緑毛亀図

紙本水墨　箱入　本紙 巾29×竪99　総丈 巾41×竪165cm　本紙微少シミ・修復痕

四百五十万円
（4,500,000JPY）

17

伊藤若冲　親子亀図

紙本水墨　箱入　本紙 巾29×竪95　総丈 巾44×竪192.5cm　本紙微少シミ・微少傷ミ・修復痕

伊藤若冲
一一三頁参照

三百万
(3,000,000JPY)

18

伊藤若演　双鶏見蜻蛉図

紙本水墨　箱入　本紙 巾30.5×竪93　総丈 巾42×竪161cm　本紙少傷ミ・修復痕　**『江戸絵画お絵かき教室』(府中市美術館二〇二三年)出陳並所載図録添付**

伊藤若演
一一三頁参照

『江戸絵画お絵かき教室』

九十五万円
(950,000JPY)

19

曾我蕭白　池亭山水図

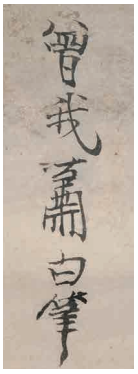
紙本水墨　箱入　本紙 巾54.5×竪126　総丈 巾69×竪213cm　本紙少傷ミ・修復痕

秋野庸彦旧蔵「駿台居士」蔵印有

二百五十万円
(2,500,000JPY)

秋野庸彦
一一三頁参照

「駿台居士」蔵印



20

曾我蕭白　鍾馗図

紙本水墨　箱入　本紙巾32.5×竪120　総丈巾47.5×竪207cm　本紙修復痕

七十五万円
(750,000JPY)

21

曾我蕭白　竹叭々鳥

絹本水墨　箱入　本紙巾30.5×竪62　総丈巾43×竪144.5cm　本紙微少シミ

三十八万円
(380,000JPY)

曾我蕭白
一一六頁参照

22

池　大　雅　擬柯九思 郊村晩帰図

紙本水墨　大雅堂定亮箱書　本紙 巾27.5×竪130.5　総丈 巾40.5×竪189.5cm　微少オレ

六十五万円
(650,000JPY)

池大雅　一一三頁参照　大雅堂定亮　一一六頁参照

23

与謝蕪村　竹林幽居図

紙本着色　箱入　本紙巾52.5×竪119　総丈巾67×竪200cm　本紙修復痕

与謝蕪村
一一九頁参照

二百五十万円
(2,500,000JPY)

24

片山楊谷画 那波魯堂賛　松下猛虎図

絹本着色　箱入　本紙 巾51×竪126　総丈 巾66.5×竪200.5cm　本紙修復痕

八十五万円
(850,000JPY)

那波魯堂
一一七頁参照

七宝為宅孟門
隣擇節未嘗傷
明神落然則
有甚真三無能
亦自請時民

25 **片　山　楊　谷　　小屏風 六曲半双**

紙本水墨淡彩　本紙 各 巾21.5～24×竪51.5　総丈 巾214×竪85cm　八 十 五 万 円
表具微少シミ・微少傷ミ　(850,000JPY)

片山楊谷
114頁参照

26

岸　駒　関羽周倉像

絹本着色金泥　箱入　本紙 巾56.5×竪123.5　総丈 巾65.5×竪196.5cm　表具傷ミ・オレ　本紙少ウキ・微少オレ

岸駒
一一四頁参照

二十五万円
(250,000JPY)

27

岸　連　山　山屋驟雨図

絹本着色　箱入　本紙 巾56×竪125　総丈 巾65.5×竪184cm　微少オレ　箱少傷ミ

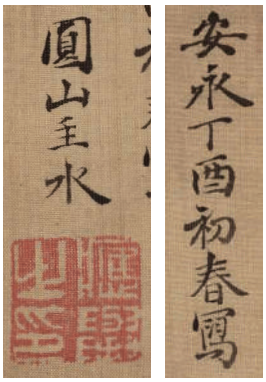
岸連山
一一五頁参照

十二万円
(120,000JPY)

28

円山応挙　旭日游亀図

絹本着色　箱入　本紙巾40.5×竪99.5　総丈巾52.5×竪182cm　安永六年（一七七七）四五歳　本紙微少オレ　箱少傷ミ



八十五万円
（850,000JPY）

円山応挙
一一八頁参照

29

長沢芦雪　竹石亀図

紙本水墨　箱入　本紙巾28.5×竪103　総丈巾41.5×竪194cm　本紙微少オレ

五十五万円
（550,000JPY）

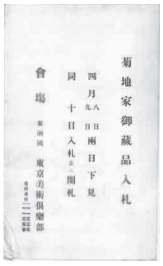
長沢芦雪
一一七頁参照

30

山本梅逸　渓山訪友図

紙本水墨　石河有鄰箱書　本紙 巾47×竪131　総丈 巾61.5×竪217cm　天保九年（一八三八）五六歳　少シミ・微少オレ

『菊地家御藏品入札』目録（大正十一年）所載



『菊地家御藏品入札』目録

四十五万円
（450,000JPY）

石河有鄰
一一三頁参照

31

山本梅逸　松樹花鳥図

絹本着色　箱入　本紙 巾41.5×竪123　総丈 巾55.5×竪192cm　嘉永四年（一八五一）六九歳　微少シミ・微少虫穴　箱少傷ミ

三十八万円
（380,000JPY）

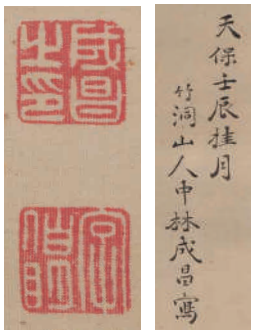
山本梅逸
一一九頁参照

32

中林竹洞　雪中竹双鳥

絹本水墨　箱入　本紙 巾40.5×竪107　総丈 巾57×竪192cm　天保三年（一八三二）五七歳　本紙少シミ・少ヤケ

中林竹洞
一一七頁参照



二十五万円
(250,000JPY)

33

紀　楳　亭　雨中猛虎図

絹本水墨　二重箱入　本紙 巾39.5×竪113.5　総丈 巾54.5×竪201cm　本紙少シミ・微少傷ミ

紀楳亭
一一五頁参照

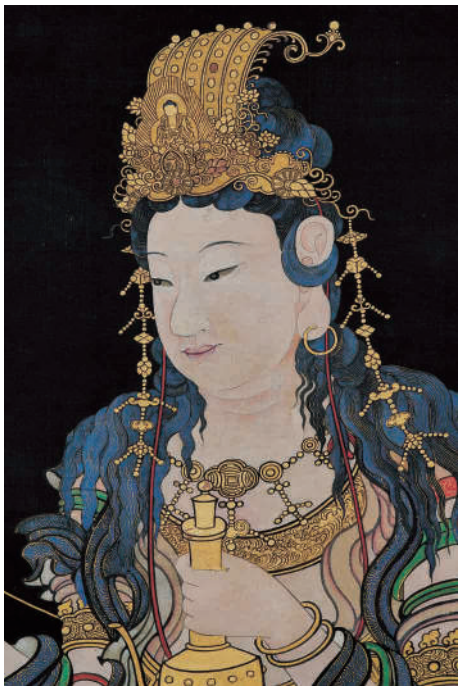
二十五万円
(250,000JPY)

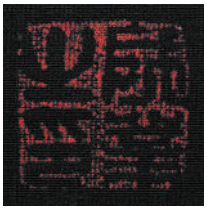
34

中林竹渓　楊柳観音像

絹本着色金泥　二重箱入　本紙 巾56×竪126　総丈 巾69×竪216cm　本紙少シミ　微少剥落　**佳品**　**蓮池蒔絵軸先**　**金落款**

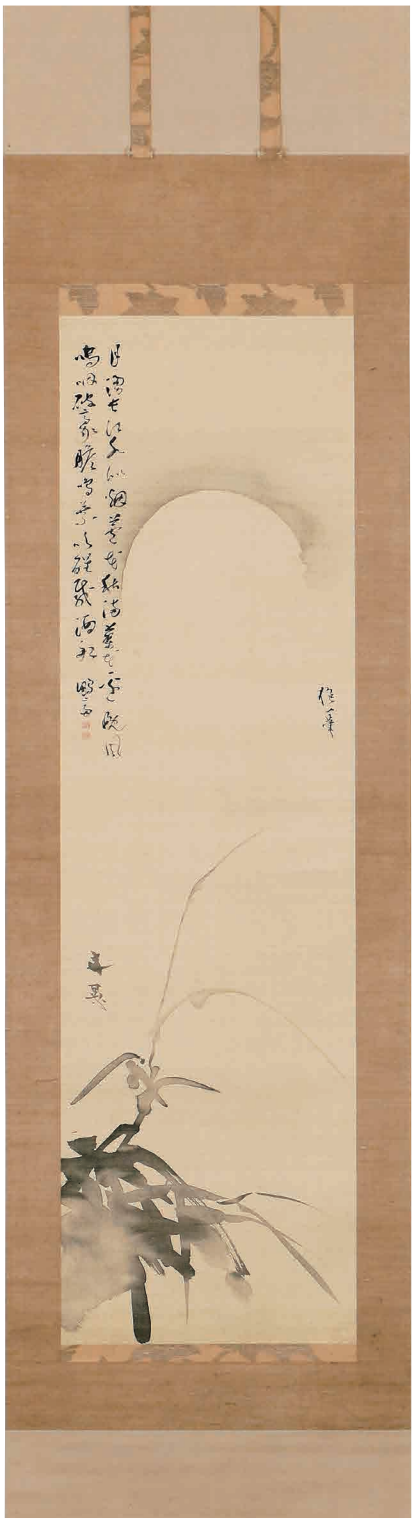
百二十万円
（1,200,000JPY）





竹渓成業謹畫

中林竹渓
一一七頁参照



谷文晁　一一七頁参照　酒井抱一　一一六頁参照　亀田鵬斎　一一四頁参照

35

谷文晁・酒井抱一画
亀田鵬斎賛　朧月秋草画賛

絹本水墨　箱入　本紙　巾30.5×竪106
総丈　巾42×竪191cm　微少オレ

「秋田氏蔵書」所蔵印有

月湧長江水似烟蘆花秋満蓼花辺晩風
鳴咽破豪膽鳴葉吹醒載酒舩

「秋田氏蔵書」所蔵印　十二万円
（120,000JPY）

山本琴谷　一一九頁参照

36

山本琴谷　山水双幅

絹本着色　箱入
本紙　各　巾41×竪136.5
総丈　各　巾57×竪212cm
慶応四年（一八六八）五八歳
本紙微少シミ　箱傷ミ

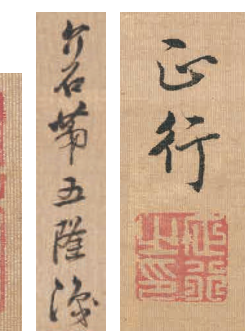
二十五万円
（250,000JPY）

37

野呂介石賛 阪上淇澳画　墨竹画賛

絹本金裏箔水墨　箱入　本紙 巾44×竪128.5　総丈 巾57×竪191cm　文政四年（一八二一）介石七五歳　表具シミ

蘇子瞻禄與可畫竹謂先得成竹于胸中執筆熟視追其所見而從之如兎起鶻落蓋此言為
墨竹家之訣也如正行畫竹其趣稍異写曽不履古人之轍漸積混熟卒為一種之風格豈不體哉頃日有
台命使正行畫　宮中金碧障子数本於墨竹幾千竿渭川清風瀟江烟雨図也墨色淋漓尋常墨竹家
亦非所可企及況如画家不能視于夢也坡翁所謂胸中之来竹從筆而来者耶自然得造化之真態者耶
既畫罷有餘墨伯氏瀬雪翁具金箋一幀而正併請記于余其事実便應来意録烏爾々　用墨即程方二氏之妙品
文政辛巳冬梢介石第五隆識



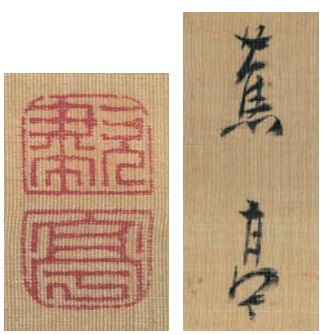
野呂介石　一一七頁参照
阪上淇澳　一一六頁参照

二十五万円
（250,000JPY）

38

増山雪斎　雪竹図

絹本水墨　箱入　本紙 巾34.5×竪95.5　総丈 巾43×竪159.5cm　表具少汚レ　本紙微少シミ・微少オレ　**佳品**



増山雪斎　一一八頁参照

十八万円
（180,000JPY）

39

谷　文　晁　瀑布図

絹本水墨　箱入　本紙 巾37×竪95　総丈 巾49.5×竪199cm　微少シミ・オレ・微少傷ミ

谷文晁
一一七頁参照

十八万円
（180,000JPY）

40

浅　井　柳　塘　松下嘯虎図

絹本着色　箱入　本紙 巾44×竪116　総丈 巾53×竪191cm　表具少傷ミ　箱少傷ミ

浅井柳塘
一一三頁参照

二十五万円
（250,000JPY）

41

小田海僊　百老図 大幅

絹本着色　箱入　本紙 巾86.5×竪141　総丈 巾103×竪209cm　表具少虫穴　本紙微少シミ・少オレ

三十八万円
(380,000JPY)

小田海僊
一一四頁参照

42

宋紫山　菊花図

絹本着色金泥　箱入　本紙 巾37×竪105.5　総丈 巾49.5×竪195cm　少シミ

宋紫山
一一六頁参照

二十五万円
(250,000JPY)

43

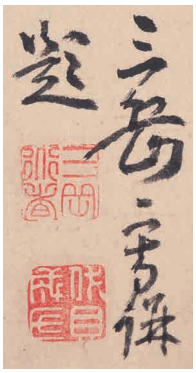
渡辺玄対　唐子遊戯図

絹本着色　箱入　本紙 巾35.5×竪94.5　総丈 巾48.5×竪182.5cm　少オレ　表具少ヤケ　本紙少シミ

渡辺玄対
一一九頁参照

十二万円
(120,000JPY)

雲断上頑置積
慮山窮霄滓別
搴峰



44 **池　大　雅　富嶽図 大幅**

紙本着色　箱入　本紙 巾87.5×竪51
総丈 巾106×竪167.5cm　本紙修復痕

四十五万円
(450,000JPY)

池大雅
113頁参照

45 **釈独処賛 狩野探幽画　児持虎画賛 大幅**

絹本水墨　荒木探令箱書　本紙 巾72×竪41
総丈 巾82.5×竪131cm　少オレ・少傷ミ

顧走為児揺乗
義威谷口巌畔
遊戯月奇

三十八万円
(380,000JPY)

狩野探幽
114頁参照
荒木探令
113頁参照

46

諸葛監　花卉翡翠図

絹本着色　箱入　本紙巾42×竪35
総丈巾48.5×竪116cm
表具少傷ミ・少虫穴
本紙微少シミ

十八万円
(180,000JPY)

諸葛監
一一六頁参照

47

宋紫石　朝顔図

絹本着色　箱入　本紙巾27×竪22.5
総丈巾39×竪124cm

十二万円
(120,000JPY)

宋紫石
一一六頁参照
渡辺崋山
一一九頁参照
人見少華
一一八頁参照
滑川達
一一七頁参照

48

渡辺崋山　墨蘭明人筆意

紙本水墨　人見少華箱書　二重箱入
本紙巾32.5×竪25　総丈巾45×竪110.5cm
蝋箋表具　滑川達極

十八万円
(180,000JPY)

滑川達極

49

狩野探幽　竹林双虎図双幅

絹本水墨　箱入　本紙各巾57.5×竪115.5　総丈（右）巾71×竪208.5・（左）巾71×竪210cm　寛文八年（一六六八）六七歳　少シミ・少オレ・少傷ミ　**時代極上表具**

五十五万円
（550,000JPY）

50

狩野探幽　菊芙蓉双幅

紙本水墨　大倉好斎箱書　本紙各巾36×竪105.5　総丈各巾49.5×竪192.5cm
表具微少傷ミ　本紙少オレ　箱少傷ミ

『岡山市天城池田御蔵品入札』目録（大正六年三月）所載

三十八万円
（380,000JPY）

『岡山市天城池田御蔵品入札』目録

狩野探幽
一一四頁参照

大倉好斎
一一四頁参照

51

狩野安信　雲龍図双幅

絹本水墨　二重箱入
本紙各巾33.5×竪106　総丈各巾45.5×竪195cm
本紙微少シミ・微少傷ミ　箱少傷ミ

三十八万円
（380,000JPY）

狩野安信
一一四頁参照

52

狩野常信　龍虎双幅

絹本水墨　箱入　本紙各巾37×竪91
総丈各巾48.5×竪175cm　少シミ　表具少虫穴

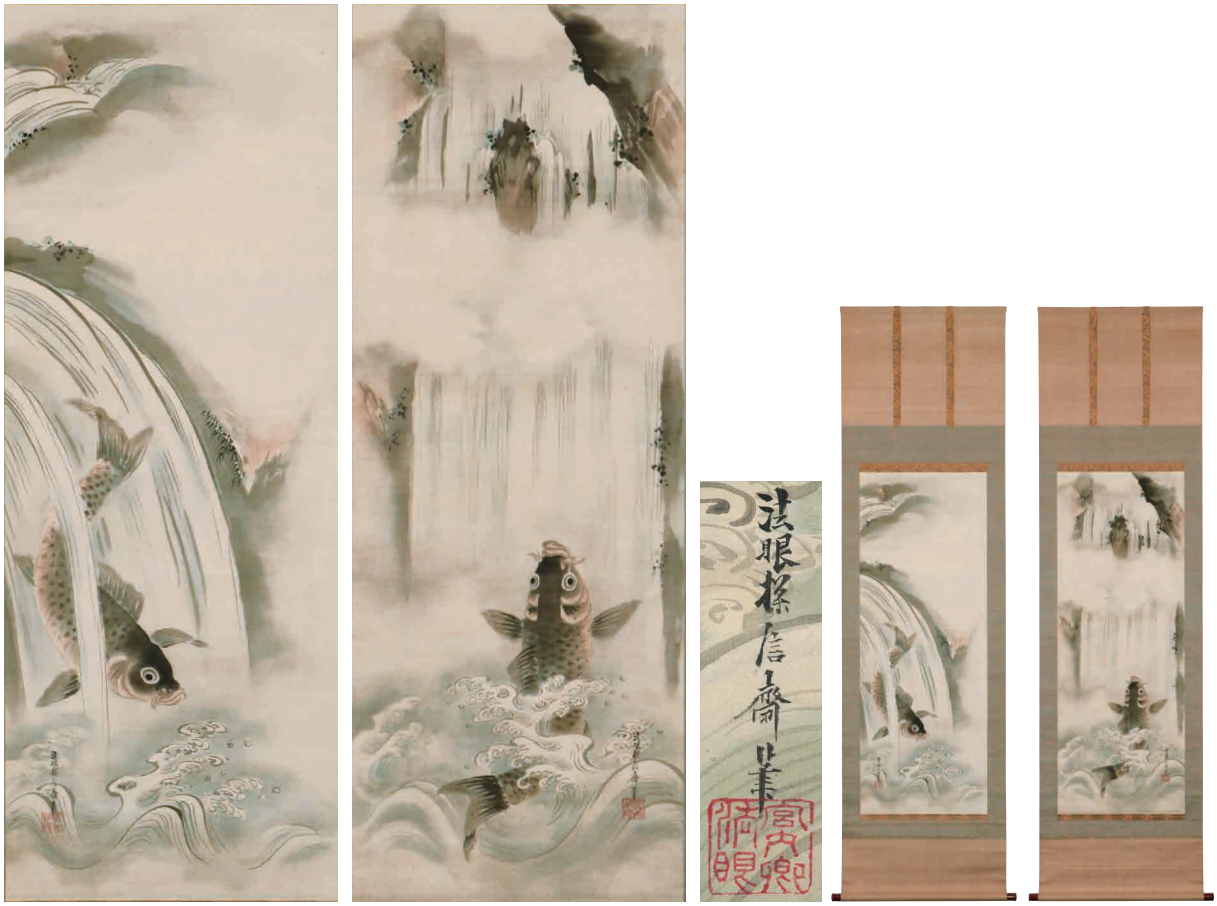
二十五万円
(250,000JPY)

53

狩野探信守道　昇鯉図双幅

絹本着色　箱入　本紙各巾42.5×竪115
総丈各巾55.5×竪199.5cm　微少シミ・微少傷ミ

二十五万円
(250,000JPY)



狩野探信守道
一一四頁参照

54

狩野常信　初冬富士図

絹本水墨　箱入　本紙巾43×竪100.5
総丈巾57×竪184cm　本紙少オレ
風帯少傷ミ　箱少傷ミ　大倉好斎極

十二万円
(120,000JPY)

狩野常信
一一四頁参照
大倉好斎
一一四頁参照

55

狩野養川院　雪月花三幅対

絹本着色　箱入　本紙各巾19.5×竪99
総丈各巾29×竪178cm
傷ミ　本紙ウキ・少シミ

二十五万円
(250,000JPY)

狩野養川院
一一四頁参照

56

酒井抱一　源実朝像

紙本着色　箱入　本紙 巾27×竪92　総丈 巾28.5×竪165cm　微少オレ・少傷ミ・少虫穴

八大龍王
雨やめたまへ
なけきなり
民の
過れハ
時によりて
鎌倉右大臣

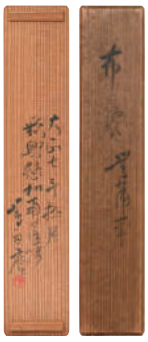
酒井抱一
一一六頁参照

二十五万円
(250,000JPY)

57

酒井鶯蒲　布袋

紙本水墨淡彩　鶯雨箱書　本紙 巾24.5×竪80.5　総丈 巾26.5×竪148cm



酒井鶯蒲
一一六頁参照

十二万円
(120,000JPY)

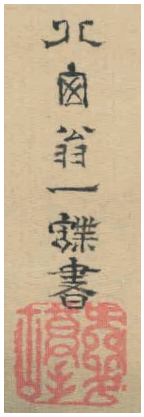
58

英一蝶　一本菊図

絹本着色　箱入　本紙 巾22.5×竪73.5　総丈 巾24×竪146.5cm　**美品**

十八万円
(180,000JPY)

英一蝶
一一七頁参照



59 英　一　蝶　雪夜行舟図 大幅

絹本着色　箱入　本紙 巾86.5×竪49.5
総丈 巾103.5×竪144cm　少オレ・微少傷ミ

三十八万円
(380,000JPY)

60 英　一　蝶　猿廻之図

紙本着色　箱入　本紙 巾59.5×竪33.5
総丈 巾72.5×竪122.5cm　本紙少オレ

五十五万円
(550,000JPY)

浮田一蕙
一一三頁参照

61 浮　田　一　蕙　旭日群鴉図 大幅

紙本水墨淡彩　箱入　本紙 巾85×竪38.5
総丈 巾90×竪144cm　本紙少オレ・修復痕・少ウキ

十八万円
(180,000JPY)

62

伝教大師最澄像

絹本着色　箱入　本紙 巾35.5×竪81　総丈 巾51.5×竪163cm　本紙ヤケ・少傷ミ・修復済　箱少傷ミ

百八十万円
(1,800,000JPY)

63

室町期 蓮池阿弥陀像

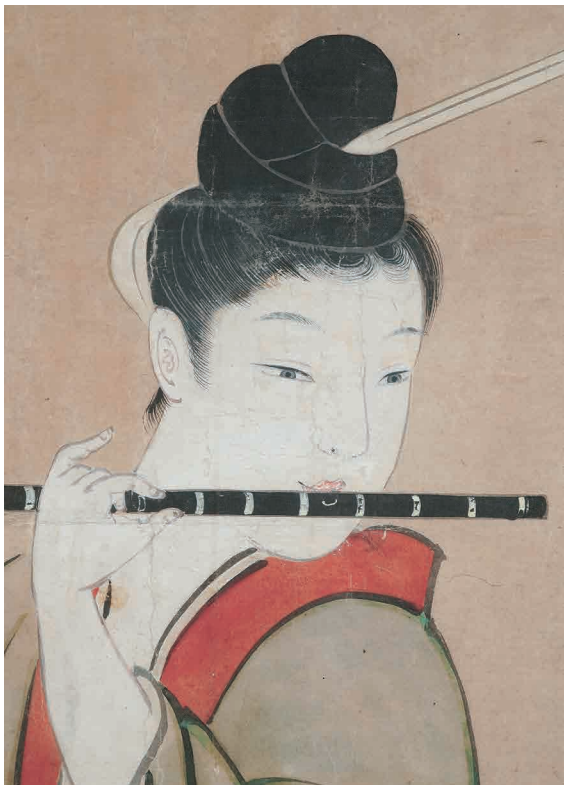
絹本着色金泥金截金　瀧沢清箱書　本紙 巾42×竪84　総丈 巾57.5×竪155.5cm　本紙修復済

二百五十万円
(2,500,000JPY)

64

江戸中期 琉球吹笛美人図

紙本着色　箱入　本紙 巾40×竪103　総丈 巾46.5×竪190.5cm　本紙修復痕



百二十万円
(1,200,000JPY)

65

横山清暉　追儺図

絹本着色　箱入　本紙巾49×竪112　総丈巾62.5×竪192.5cm

表具少シミ

十二万円（120,000JPY）

横山清暉
一一九頁参照

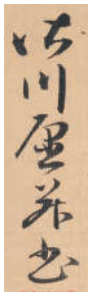
66

皆川淇園　山村春色

絹本着色　箱入　本紙巾37.5×竪100　総丈巾52.5×竪195.5cm

表具微少ウキ　本紙微少シミ・微少オレ

十二万円（120,000JPY）



皆川淇園
一一九頁参照

67

黄檗来鳳画　黄檗大成賛　雪中夜梅図

絹本水墨　箱入　本紙巾36.5×竪102　総丈巾48.5×竪172.5cm

少オレ

十二万円（120,000JPY）

水墨所写枝葉婆娑不
夢免俗風韻尤多

黄檗来鳳
一一四頁参照
黄檗大成
一一三頁参照

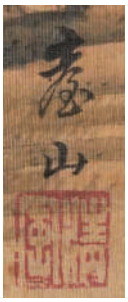
68

広瀬台山画　井岡桜仙賛　秋景山水図

絹本着色　箱入　本紙巾37.5×竪100　総丈巾48.5×竪189cm

本紙微少シミ

十二万円（120,000JPY）



烟嶂雲峯何處攀常
嗟身在市塵間筆頭
随意生高與写出胸
中幾黙山

広瀬台山
一一八頁参照
井岡桜仙
一一三頁参照

69

木下逸雲　紅葉山水図

絹本着色　森琴石箱書　本紙 巾50×竪124
総丈 巾64.5×竪198cm　安政四年（一八五七）五九歳
表具微少シミ　箱傷ミ　**佳品**

十八万円
（180,000JPY）

森琴石
一一九頁参照

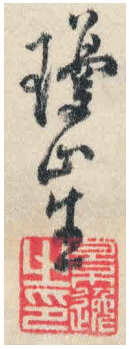
70

江上瓊山　雪中山水図

絖本着色　箱入　本紙 巾44×竪149.5　総丈 巾60×竪207.5cm
明治四二年　四七歳　微少シミ・修復痕　**佳品**

十二万円
（120,000JPY）

江上瓊山
一一三頁参照



71

宋紫山　虎図

紙本水墨　箱入　本紙 巾57.5×竪134　総丈 巾60×竪198cm
表具少傷ミ・少シミ　本紙少オレ・少虫穴

二十五万円
（250,000JPY）

宋紫山
一一六頁参照

72

十時梅崖　高士観瀑図

紙本水墨淡彩　箱入　本紙 巾74×竪154.5　総丈 巾81×竪206cm
寛政一一年（一七九九）五一歳　本紙少オレ・修復痕　**佳品**

十八万円
（180,000JPY）

十時梅崖
一一七頁参照

73

日根対山　秋山清詠

絖本水墨　小林卓斎箱書　本紙 巾51×竪134.5　総丈 巾65×竪192cm
文久元年（一八六一）四九歳　少シミ　本紙少オレ

十二万円
（120,000JPY）

74

月僊　猛虎図

絹本水墨　箱入　本紙 巾34.5×竪114　総丈 巾47×竪194cm
少シミ・微少オレ・ウキ

九万五千円
（95,000JPY）

日根対山　一一八頁参照　小林卓斎　一一五頁参照　月僊　一一五頁参照　木下逸雲　一一五頁参照　広瀬濠田　一一八頁参照

75

木下逸雲　秋景山水図

絹本着色　広瀬濠田箱書　本紙 巾52×竪138　総丈 巾66.5×竪214cm
文政一二年（一八二九）三一歳　本紙微少オレ　**佳品**

十八万円
（180,000JPY）

76

木下逸雲　雪中山水図

絹本着色　箱入　本紙 巾50.5×竪140.5　総丈 巾65×竪203cm
安政五年（一八五八）六〇歳　本紙微少シミ　**佳品**

十八万円
（180,000JPY）

77

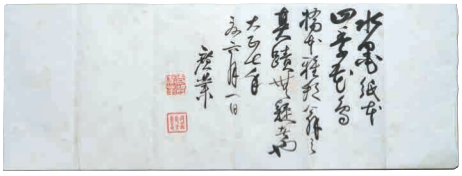
橋本雅邦　四季花鳥四幅対

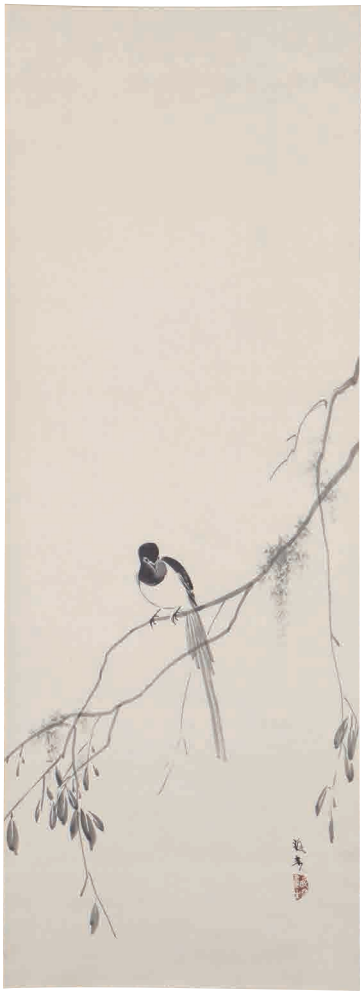
紙本水墨　川合玉堂箱書　二重箱入　本紙各巾42×竪115.5　総丈各巾56.5×竪213.5cm

『海野勝珉氏遺愛品並二某氏所蔵品入札』目録（大正五年十二月）並
『美術商の百年　東京美術倶楽部百年史』所載　東京美術倶楽部鑑定委員会鑑定証
寺崎広業極

百二十万円
（1,200,000JPY）

寺崎広業極





『美術商の百年　東京美術倶楽部百年史』

橋本雅邦　一一七頁参照　川合玉堂　一一四頁参照　寺崎広業　一一七頁参照

78

菱田春草　梅

紙本水墨淡彩　木村武山箱書　二重箱入　本紙巾48×竪120　総丈巾62×竪217cm

東美鑑定評価機構鑑定委員会鑑定証

二百五十万円
(2,500,000JPY)

菱田春草　一一八頁参照
木村武山　一一五頁参照

79

下村観山　五月雨の頃

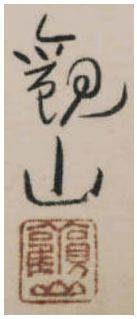
絹本着色　共箱　二重箱入　本紙巾56.5×竪39　総丈巾70×竪143.5cm　本紙微少オレ

『観山近業精英』（高島屋美術部一九二四年）並
『観山作品集』（日本美術院一九二五年）所載並添付
大正一二年一二月大阪高島屋主催展覧會出品作
高島屋シール　中林孫次郎旧蔵

二百五十万円
（2,500,000JPY）

『観山作品集』

『観山近業精英』



下村観山
一一六頁参照

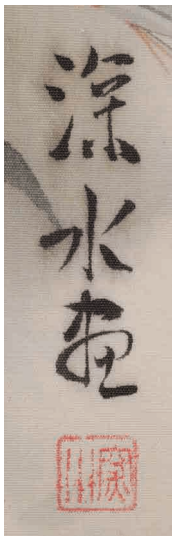
80

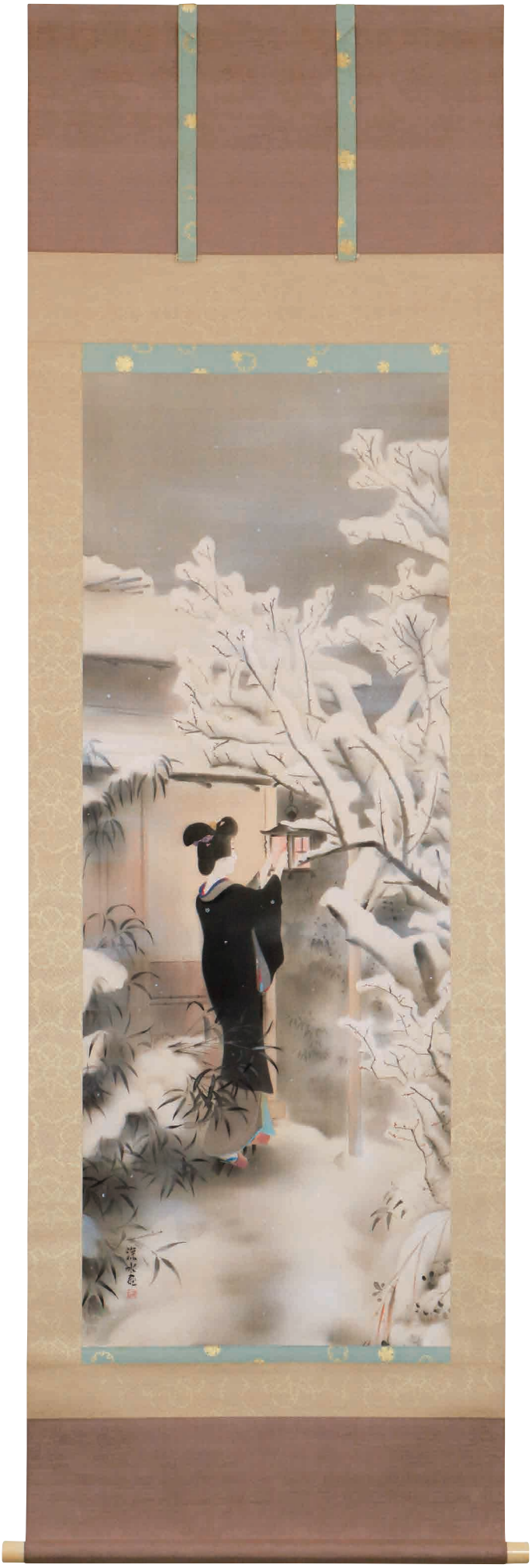
伊東深水　雪に暮る

絹本着色金泥　共箱　本紙 巾50×竪133　総丈 巾65.5×竪213.5cm　東美鑑定評価機構鑑定委員会鑑定証

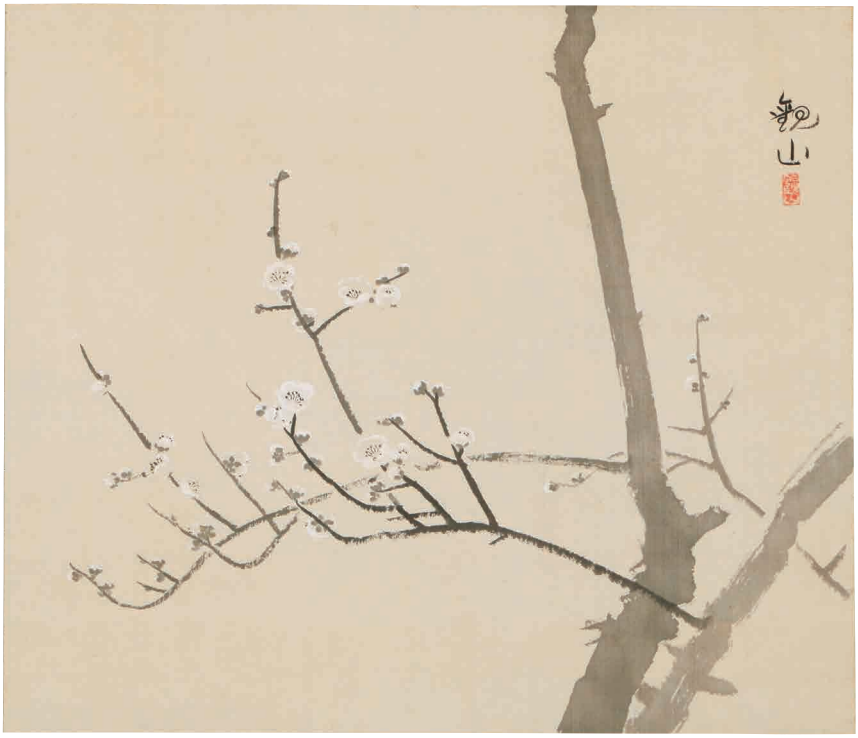
百五十万円（1,500,000JPY）

伊東深水
一一三頁参照





下村観山
一一六頁参照



81 **下 村 観 山　梅**

絹本水墨淡彩　共箱　二重箱入　本紙 巾50.5×竪43.5
総丈 巾64.5×竪136.5cm　軸芯少傷ミ
東美鑑定評価機構鑑定委員会鑑定証

四 十 五 万 円
(450,000JPY)

82 **伊 東 深 水　早春 額装**

紙本着色金泥　F12号変形　共シール　箱入
本紙 巾59.5×竪48　総丈 巾84×竪73cm　箱蓋少傷ミ

百 二 十 万 円
(1,200,000JPY)

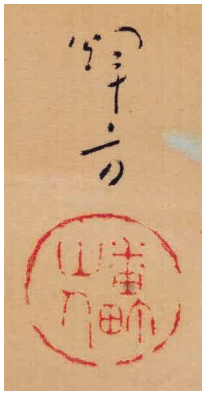
伊東深水
113頁参照

83

池田輝方　大師詣

絹本着色金泥　共箱　二重箱入　本紙巾50.5×竪134　総丈巾66×竪232cm

池田輝方
一一三頁参照



二十五万円
(250,000JPY)

84

木村武山　白衣観音

絹本着色金泥　共箱　本紙巾42.5×竪117　総丈巾59×竪214cm　本紙微少シミ・微少オレ

木村武山
一一五頁参照

七十五万円
(750,000JPY)

85

木村武山　孤月柳烏図

絹本着色　箱入　本紙 巾41×竪133.5　総丈 巾55.5×竪206cm　**佳品**

四十五万円
（450,000JPY）

86

木村武山　無花果鶏図

絹本着色　二重箱入　本紙 巾41.5×竪128　総丈 巾57.5×竪222cm

二十五万円
（250,000JPY）

木村武山
一一五頁参照

87

河鍋暁斎　面壁之図

絹本着色　好水散人箱書　本紙 巾33×竪101.5　総丈 巾40.5×竪192cm　本紙微少シミ・修復痕

百八十万円
(1,800,000JPY)

河鍋暁斎
一一四頁参照

88

河鍋暁斎　墨堤観桜図

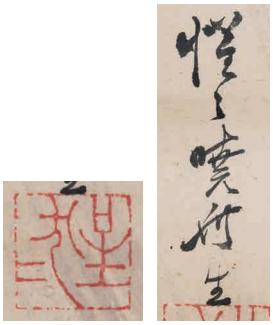
絹本着色　箱入　本紙 巾49×竪120　総丈 巾66.5×竪186.5cm　少シミ・微少オレ・微少傷ミ

七十五万円
(750,000JPY)

89

河鍋暁斎　風神雷神図 双幅

紙本着色　箱入　本紙 各巾13×竪137　総丈 各巾26.5×竪203.5cm

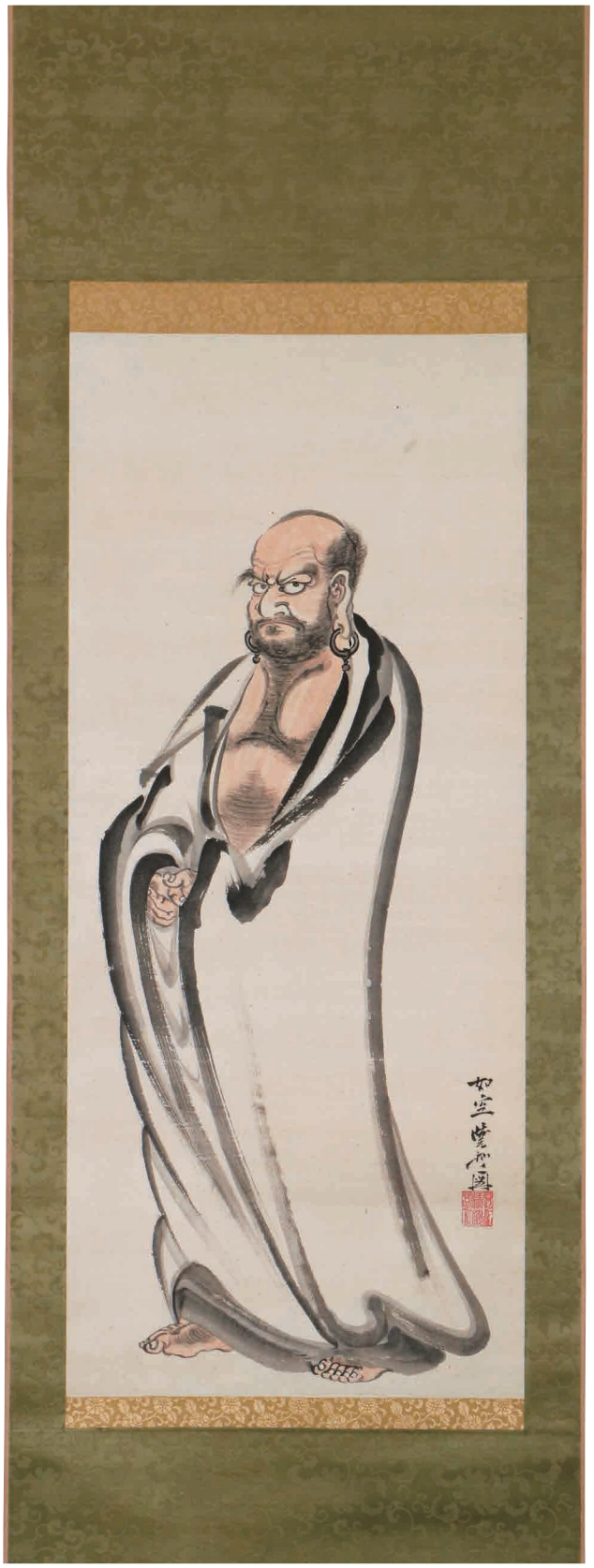


八十五万円
(850,000JPY)

90

河鍋暁斎　達磨図

紙本水墨淡彩　箱入　本紙 巾46×竪107　総丈 巾58.5×竪188cm　本紙修復痕



五十五万円
(550,000JPY)

91

河鍋暁斎　宴席図

紙本着色　箱入　本紙 巾30×竪110　総丈 巾43×竪202cm　表具シミ・ヤケ　本紙少傷ミ

六十五万円
(650,000JPY)

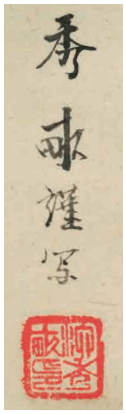
河鍋暁斎
一一四頁参照

池上秀畝
一一三頁参照

92

池上秀畝　菊池正観公筑後河奮戦之図

紙本着色　共箱　本紙 巾51×竪122　総丈 巾64.5×竪213cm　少傷ミ　本紙少オレ・少剥落　**若年作**



三十八万円
(380,000JPY)

93

池上秀畝　寒月猛虎図

絹本着色　共箱　本紙 巾49×竪126　総丈 巾65×竪231.5cm　表具シミ　本紙少シミ・微少オレ　**若年作**

二十五万円
(250,000JPY)

94

小堀鞆音　豊公陣廻図

絹本着色　共箱　本紙 巾42×竪117.5　総丈 巾56×竪210 cm
本紙微少シミ　畑仙齢葉書三通有

十八万円
(180,000 JPY)

小堀鞆音
一一五頁参照

畑仙齢
一一七頁参照

95

尾竹国観　秀吉破明国書図

絹本着色　箱入　本紙 巾41.5×竪121　総丈 巾57×竪210 cm
微少シミ・少オレ

十二万円
(120,000 JPY)

尾竹国観
一一四頁参照

96

高橋応真　槿花

絹本着色　箱入　本紙 巾41.5×竪115.5　総丈 巾54.5×竪201 cm
微少オレ

十二万円
(120,000 JPY)

高橋応真
一一六頁参照

97

矢澤弦月　童女子守図

絹本着色　箱入　本紙 巾36.5×竪127　総丈 巾47×竪189.5 cm
少オレ　本紙微少シミ　若年作

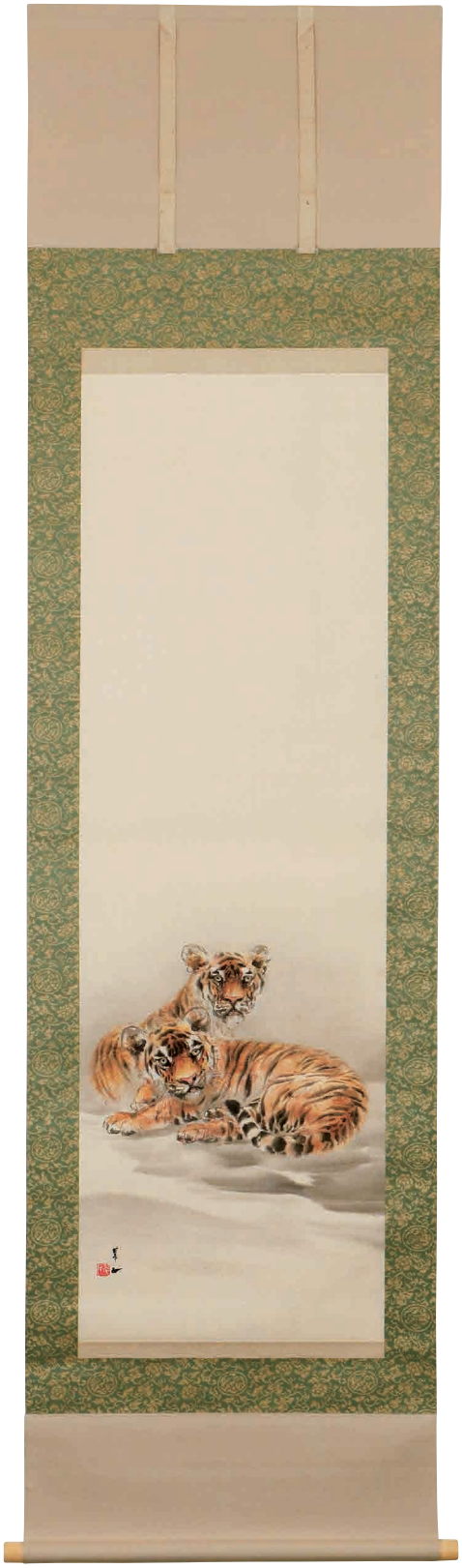
八万五千円
(85,000 JPY)

矢澤弦月
一一九頁参照

98

大橋翠石　虎児之図

絹本着色　共箱　二重箱入　本紙巾40×竪127　総丈巾54×竪202.5cm



大橋翠石
一一四頁参照

六十五万円
(650,000JPY)

99

尾竹竹坡　石榴

絹本着色　尾竹国観箱書　二重箱入　本紙巾41.5×竪127　総丈巾56×竪221cm

尾竹国観
一一四頁参照　尾竹竹坡
一一四頁参照

四十五万円
(450,000JPY)

100

藤井澄湖　盆踊大幅

絹本着色金泥　箱入　本紙巾86×竪172　総丈巾102×竪211cm

藤井澄湖
一一八頁参照

八十五万円
(850,000JPY)

101

渡辺省亭
桜・紅葉・雪景 三幅対

絹本着色　箱入　本紙各巾41×竪119
総丈各巾54.5×竪197.5cm　表具微少シミ
五十五万円
(550,000JPY)

渡辺省亭
一一九頁参照

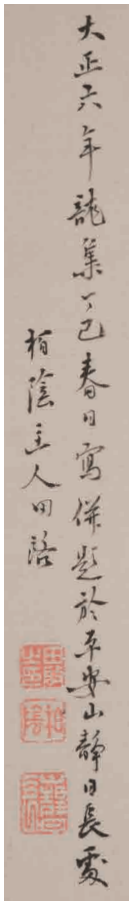
102

田中柏陰　白雲仙館図

絹本着色金泥　共箱　二重箱入　本紙 巾52×竪158　総丈 巾67×竪222cm　大正六年　五二歳　**美品**

五十五万円
(550,000JPY)

田中柏陰
一一六頁参照



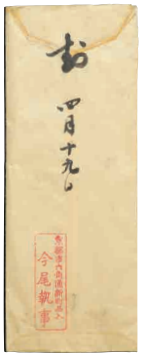
103

今尾景年　桃林牧童図

絹本着色　今尾景祥箱書　二重箱入　本紙巾70.5×竪140.5　総丈巾84.5×竪226cm　明治三〇年　五三歳　龍野満黄旧蔵　今尾家執事書翰三通

百二十万円（1,200,000JPY）

今尾家執事書翰



今尾景年　一一三頁参照
今尾景祥　一一三頁参照
龍野満黄　一一六頁参照

104

山元春挙　菊童子図

絹本着色金泥　共箱　二重箱入　本紙巾42.5×竪112　総丈巾56×竪223cm　本紙シミ　若年作

三十八万円（380,000JPY）

山元春挙
一一九頁参照

105

菊池契月　美人水鏡図

紙本着色　箱入　本紙巾55.5×竪136.5　総丈巾67×竪195cm　本紙微少傷ミ　若年作

四十五万円（450,000JPY）

菊池契月
一一五頁参照

106

土田麦僊　清水の春

絹本着色　共箱　本紙 巾42.5×竪124　総丈 巾57×竪196.5cm　大正三年　二八歳　**美品**

土田麦僊
一一七頁参照

四十五万円
(450,000 JPY)

107

山口華楊　清水之秋

絹本着色　共箱　本紙 巾50.5×竪130.5　総丈 巾65×竪217cm　本紙微少オレ

山口華楊
一一九頁参照

三十八万円
(380,000 JPY)

108

木島桜谷　春野牧牛図

絹本着色　共箱　本紙巾51×竪137　総丈巾65×竪227cm　本紙少シミ　**印譜裂表具**

百二十万円
（1,200,000JPY）

木島桜谷
一一五頁参照

109

木島桜谷　双鹿

絹本着色　共箱　二重箱入　本紙巾50.5×竪140　総丈巾66×竪234cm

木島桜谷
一一五頁参照

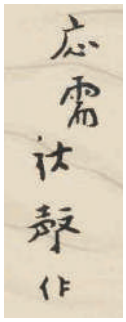
八十五万円
(850,000JPY)

110

小早川秋声　誉之的

絹本着色金泥雲母散　共箱　本紙巾36.5×竪121.5　総丈巾50×竪202.5cm

小早川秋声
一一五頁参照



三十八万円
(380,000JPY)

111

不染鉄　奈良風景 大幅

紙本水墨淡彩　箱入　本紙 巾79×竪148.5　総丈 巾93×竪215cm　本紙修復痕

百五十万円
(1,500,000JPY)

不染鉄
一一八頁参照

112

石崎光瑤　朧月白鷺

絹本着色　共箱　本紙 巾41×竪129　総丈 巾55.5×竪216.5cm　本紙少オレ

石崎光瑤
一一三頁参照

六十五万円
（650,000JPY）

113

橋本関雪　夏山避暑図

絹本着色　共箱　二重箱入　本紙 巾36×竪139　総丈 巾49.5×竪214cm　本紙シミ

五十五万円
（550,000JPY）

114

橋本関雪　松館訪隠図

絹本着色　共箱　二重箱入　本紙 巾36×竪140.5　総丈 巾50×竪208.5cm　表具微少ウキ　本紙少シミ

四十五万円
(450,000JPY)

115

橋本関雪　影妓図

絹本水墨　共箱　本紙 巾25×竪110　総丈 巾38×竪172cm

三十八万円
(380,000JPY)

橋本関雪
一一七頁参照

116

北野恒富　春

絹本着色銀箔　共箱　二重箱入　本紙 巾28.5×竪141　総丈 巾40.5×竪211.5cm

三越百貨店口貼

北野恒富
一一五頁参照

三越百貨店口貼

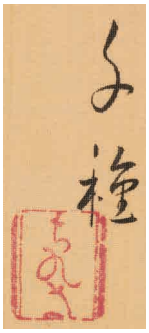
五十五万円
(550,000JPY)

117

木谷千種　紅萩

絹本着色金泥　共箱　本紙 巾42×竪130.5　総丈 巾57.5×竪202cm

木谷千種
一一五頁参照



三十八万円
(380,000JPY)

118

松林桂月　歳寒盟友

絹本着色　共箱　二重箱入　本紙 巾41.5×竪137　総丈 巾55.5×竪223cm　**美品**

松林桂月
一一八頁参照

四十五万円
（450,000JPY）

119

窠本芳樹　帝釋天図

絹本着色金泥　共箱　本紙 巾50×竪117　総丈 巾62×竪198.5cm　明治三〇年六月　**美品**　**窠本一洋父　稀品**

窠本芳樹
一一八頁参照

十八万円
（180,000JPY）

120

加藤英舟　猛虎図

絹本着色　共箱　本紙巾41×竪124.5　総丈巾53.5×竪197.5cm　大正四年　四三歳　本紙微少シミ

加藤英舟
一一四頁参照

二十五万円
(250,000JPY)

121

菊池芳文　映桜花水禽図

絹本着色　敬齊箱書　本紙巾42×竪125.5　総丈巾58×竪215.5cm　少オレ

菊池芳文
一一五頁参照

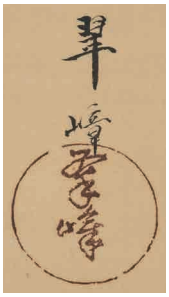
十二万円
(120,000JPY)

122

西山翠嶂　山雉

絹本着色金泥　共箱　二重箱入
本紙 巾55×竪123.5　総丈 巾71.5×竪234.5cm
本紙修復痕

十八万円
（180,000JPY）



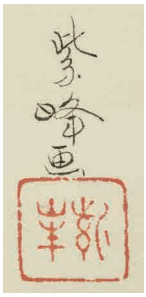
西山翠嶂
一一七頁参照

123

榊原紫峰　狗児図

絹本着色　箱入　本紙 巾41.5×竪112
総丈 巾56.5×竪200cm　若年作

二十五万円
（250,000JPY）



榊原紫峰
一一六頁参照

124

日比野白圭　美人納涼図

絹本着色金泥　箱入　本紙 巾42×竪115.5
総丈 巾46.5×竪196.5cm
少オレ・少シミ・少虫穴

十五万円
（150,000JPY）

日比野白圭
一一八頁参照

125 河鍋暁斎 化狸図

絹本着色 箱入 本紙 巾17×竪20.5 総丈 巾25×竪124cm

六十五万円 (650,000JPY)

河鍋暁斎 一一四頁参照

高光一也 一一六頁参照

高光一生 一一六頁参照

126 高光一也 天上天下唯我独尊

紙本水墨 高光一生箱書

本紙 巾44.5×竪39 総丈 巾60.5×竪138.5cm

九万五千円 (95,000JPY)

菊池契月 一一五頁参照

127 菊池契月 陽炎

絹本着色 共箱 二重箱入

本紙 巾49×竪42.5 総丈 巾64×竪141cm

三十八万円 (380,000JPY)

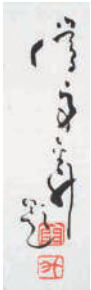
128

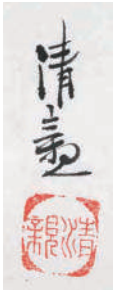
小林清親画 鶯亭金升賛　かちかち山画賛

紙本着色　箱入　本紙 巾32.5×竪134
総丈 巾47.5×竪202cm

十五万円
（150,000JPY）

計略を
やる〳〵思ひ
月の夜に
浮て木船や
しつむ土船



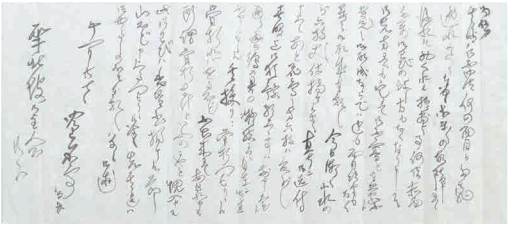


129

児玉果亭　松渓載雀・薫風入微・洞門白雲 三幅対

絹本着色　共箱並青柳琴僊箱書　本紙 各 巾41.5×竪121
総丈 各 巾57×竪210cm　本紙微少シミ・微少オレ
自筆書翰有　**佳品**

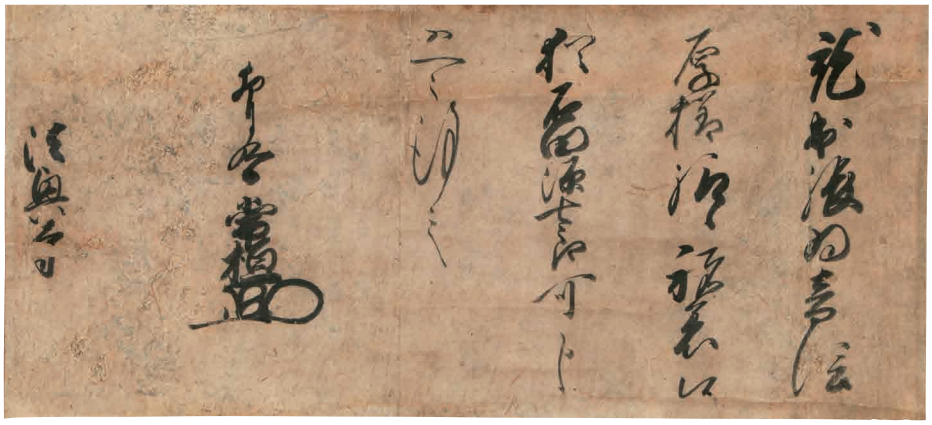
三十八万円
（380,000JPY）



自筆書翰

小出八郎右衛門氏依頼
近出氏取次
飯島氏遺贈
果亭幅

小林清親　一一五頁参照
鶯亭金升　一一三頁参照
児玉果亭　一一五頁参照
青柳琴僊　一一三頁参照



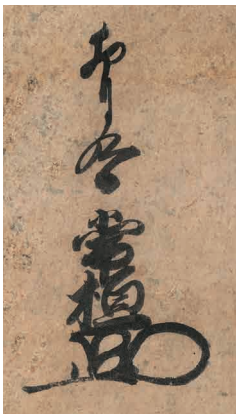
室町幕府三十一代管領

130 細　川　高　国　　卯月九日付法興寺宛文書

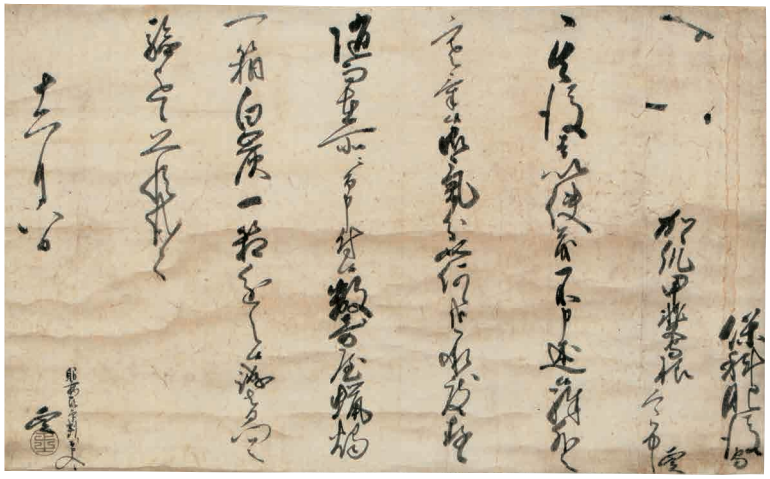
紙本　箱入　本紙 巾32.5×竪15
総丈 巾35×竪95.5cm
本紙オレ・少傷ミ　箱少傷ミ

九十五万円
(950,000JPY)

就出張為音信
厚様給候祝着候
猶石田源七郎可申候
恐々謹言
卯月九日　常桓
法興寺



細川高国
118頁参照



会津藩初代

131 保　科　正　之　　十二月八日付加々爪直澄宛消息

紙本　箱入　本紙 巾48.5×竪29.5
総丈 巾58×竪106cm
少シミ・微少オレ・少虫穴

七十五万円
(750,000JPY)

（端裏）
保科肥後守
加々爪甲斐守様　正之
人々御中

其後者以使茂不申述候　殊外之
寒気候　御気分如何候哉承度存候
随而在所ニ而申付候数奇屋蝋燭
一箱白炭一箱進之候　誠音問之
験迄候　恐惶謹言
眼病故印判ニ而申入候
十二月八日　　正之（黒印「正之」）

保科正之
118頁参照

加々爪直澄
114頁参照

132

江戸幕府八代

徳川吉宗　達磨図　小禽図　双幅

紙本着色　**勝海舟箱書**　三重箱入　本紙各巾33.5×竪60　総丈各巾45.5×竪160.5cm　本紙少オレ　**徳川将軍家旧蔵**　**葵紋入極上表具**

三百八十万円
(3,800,000JPY)

勝海舟箱書

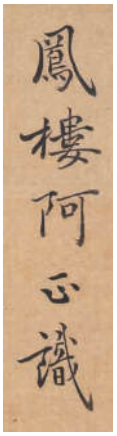
徳川吉宗　一一七頁参照　勝海舟　一一四頁参照

133

武蔵忍藩七代

阿部正識　西施調布之図

絹本着色金泥　箱入　本紙 巾62×竪116　総丈 巾74.5×竪203cm　寛政一〇年（一七九八）三五歳　表具微少シミ　本紙少シミ・微少傷ミ・修復痕



阿部正識
一一三頁参照

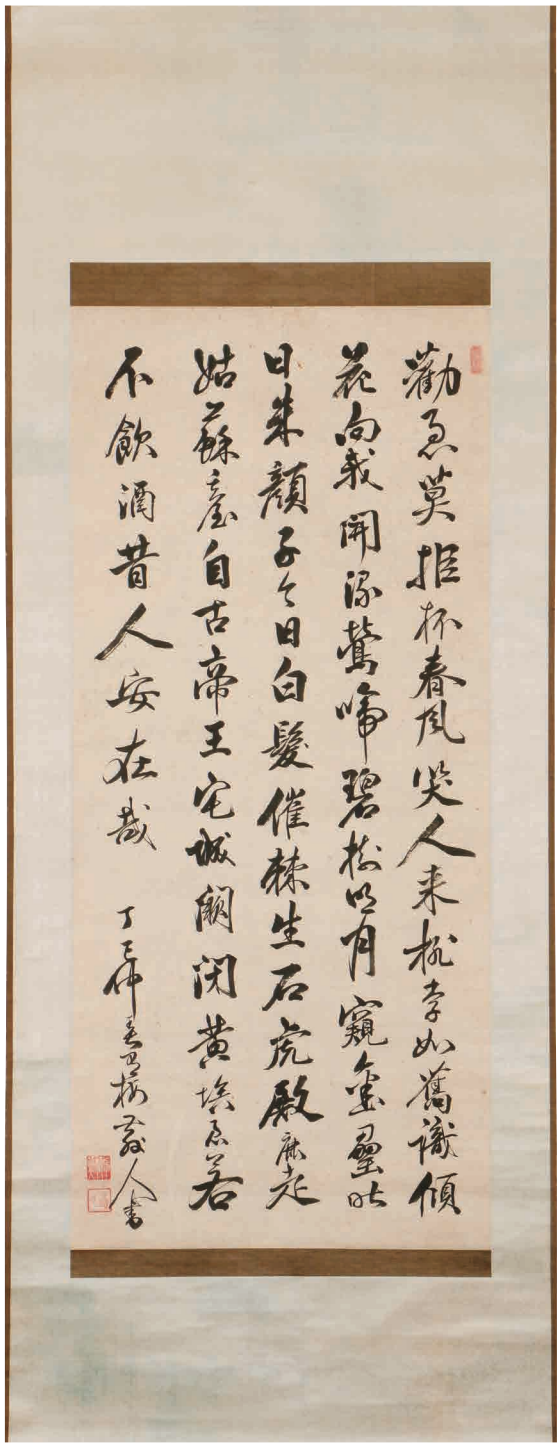
二十五万円
（250,000JPY）

134

箱館奉行　外国奉行

堀　利　熙　五言古詩五行

紙本　箱入　本紙 巾51.5×竪115　総丈 巾67.5×竪190cm　安政四年（一八五七）四〇歳　少シミ・少傷ミ　**「双川書屋」蔵印有**



勸君莫拒杯春風笑人来桃李如舊識傾
花向我開流鶯啼碧樹名月窺金罍昨
日朱顔子今日白髮催棘生石虎殿鹿走
姑蘇臺自古帝王宅城闕閉黄埃君若
不飲酒昔人安在哉

堀利熙
一一八頁参照

「双川書屋」蔵印

十二万円
（120,000JPY）

135

森川許六画 宝井其角賛　墨梅画賛

紙本水墨　二重箱入　本紙巾30.5×竪97　総丈巾43×竪182.5cm
表具微少虫穴　本紙少オレ　**尾州関戸家並梅本南枝庵旧蔵**

三十五万円
(350,000JPY)

懐しき　朶のさけめや　むめのはな

森川許六
一一九頁参照

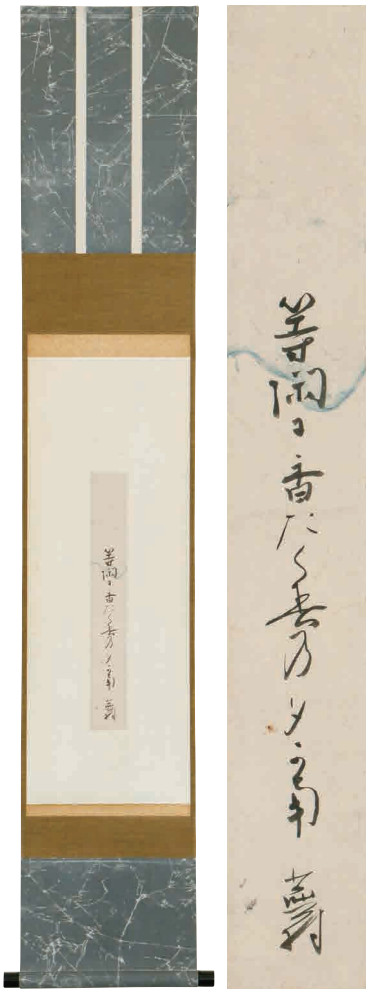
宝井其角
一一六頁参照

136

与謝蕪村　俳句短冊

紙本　箱入　本紙巾5.5×竪38　総丈巾26×竪144cm

三十八万円
(380,000JPY)



等閑に　香たく春の　夕かな

与謝蕪村
一一九頁参照

137

加賀千代尼　蝶画賛

絹本着色　箱入　本紙巾26.5×竪76.5　総丈巾36×竪147.5cm
少オレ・少シミ　表具少傷ミ　箱少傷ミ

二十五万円
(250,000JPY)

鶯や　こゑからすとも　富士の雪

138

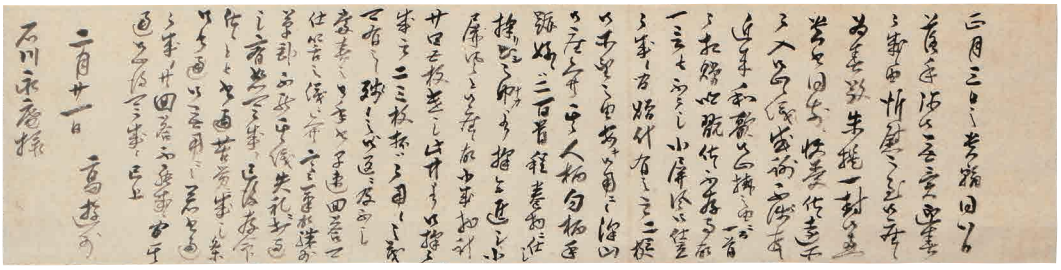
加賀千代尼　砧画賛

紙本水墨　箱入　本紙巾28.5×竪86　総丈巾37×竪156.5cm

二十二万円
(220,000JPY)

をとそふて　雨にしつまる　砧かな

加賀千代尼
一一四頁参照



正月三日之貴翰同八日
落手弥御無異迎春
被成候由、忻慰之至御座候
為春敬朱提一封御恵
貴書同前ニ快受仕候　遠所
被入御心候儀感謝不浅存候
近来和歌御心掛之由ニ而一首
被相贈吟翫仕候　不存事故
一言も不被申候　小屏風御仕立
被成候間　贈什有之候ハヾ二梃
御所望之由安キ御用ニ候　沢山
御座候へ共其人柄句柄手
跡好候ハ二百程巻物ニ仕申候
択り出シ之中より択候而進申候　小
屏風と御座候故小成物計
廿四五枚遣申候　此中より御択被
成候ハヾ二三枚抔ハ被用候之茂
可有之候　残候之ハ御返ニ及不申候
当春之御年書早速回答可
仕筈之儀ニ候へ共寒気故殊外
草臥不能其儀失礼ニ打過
申候　宥恕可被成候　已後存命
仕候とも書通苦労ニ成申候条
御書通御無用ニ候　若書通
被成候共回答不罷成候間其
通御心得可被成候　已上
二月廿一日　高遊外
石川永庵様

高遊外
115頁参照

石川永庵
113頁参照

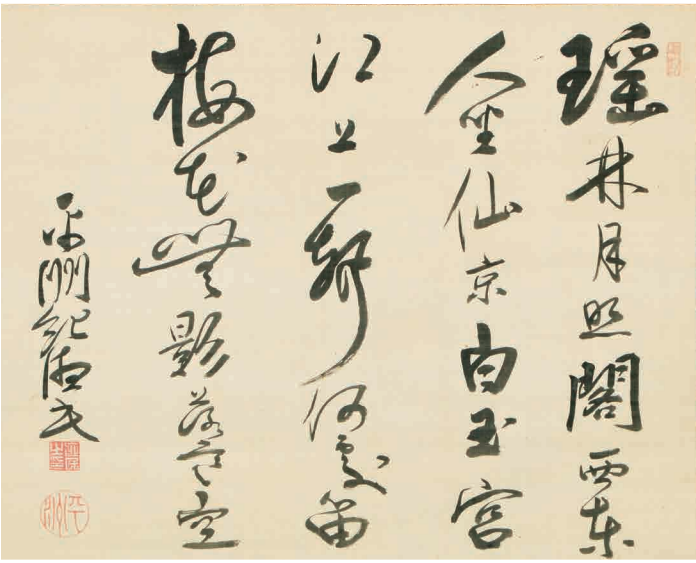
黄檗道元
114頁参照

封筒宛名

139　**高　遊　外　二月廿一日付石川永庵宛消息**

紙本　黄檗道元箱書　本紙 巾61.5×竪15
総丈 巾63.5×竪98cm　表具微少傷ミ　巻緒無
裏に封筒宛名貼付

三十八万円
(380,000JPY)



瑶林月照閣西東
人坐仙京白玉宮
江上一聲何處笛
梅花無影落寒空

細井平洲
118頁参照

140　**細　井　平　洲　梅花七絶 大幅**

絹本　二重箱入　本紙 巾65×竪51.5
総丈 巾78.5×竪151.5cm　表具オレ　**佳品**

十二万円
(120,000JPY)

させる功もなくて徒に五十年の
星霜をゝへりていつしか瑕句の翁とハ
なをなされハ栄花せきわめし
夢も見されは盧生か枕のさとりもなし
ア、いかにせむ今は悔とも甲斐なし
湯の花やさかりもしらすちりもせす
於山中七蔵屋客舎
平安素絢戯題

141　**山　口　素　絢　柳に燕 画賛**

紙本水墨　箱入　本紙 巾48.5×竪31
総丈 巾51.5×竪131cm
於山中（温泉）七蔵屋と有

十二万円
(120,000JPY)

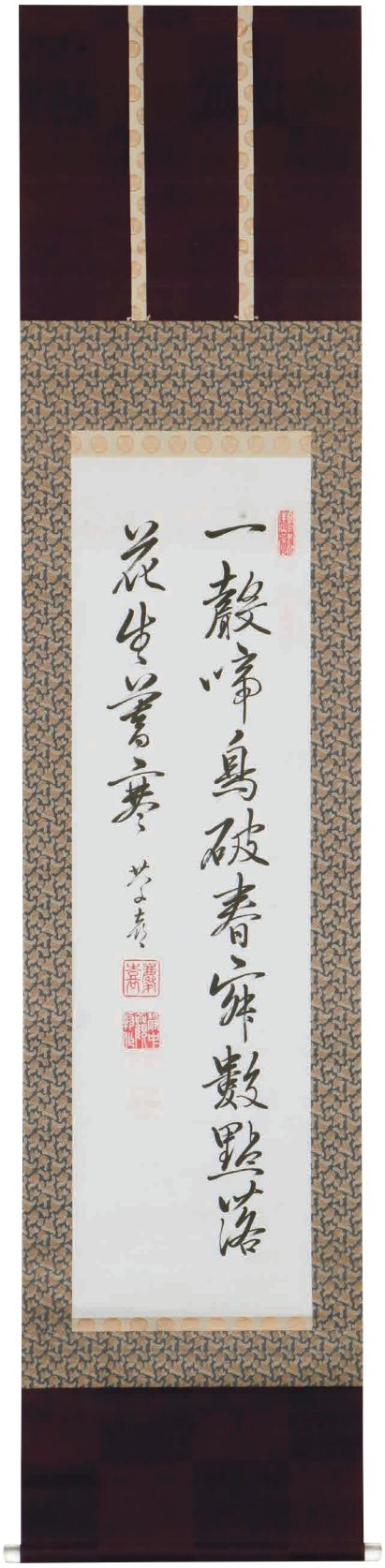
山口素絢
119頁参照

142

江戸幕府十五代

徳川慶喜　七言二句二行

紙本　二重箱入　本紙 巾31×竪111　総丈 巾44×竪200.5cm　本紙少シミ　**水晶軸先**



一聲啼鳥破春寂數點落
花生暮寒

六十五万円
(650,000JPY)

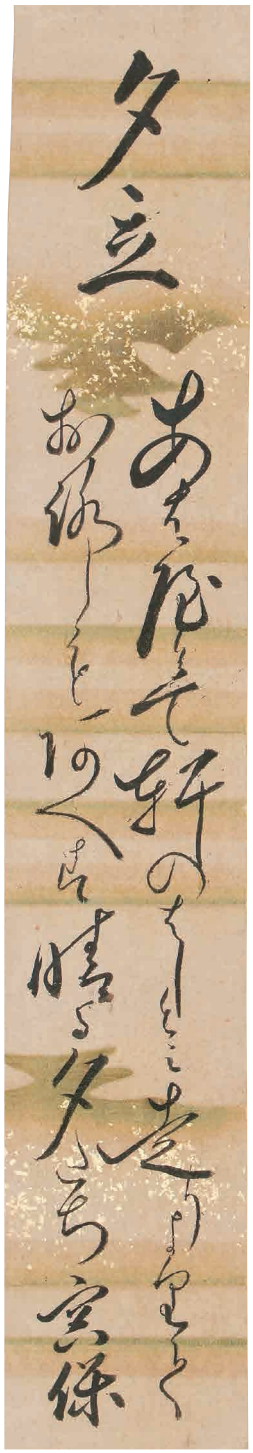
徳川慶喜
一一七頁参照

143

会津藩九代

松平容保　夕立 和歌短冊

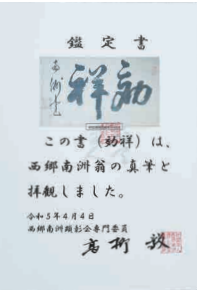
紙本　箱入　本紙 巾6×竪36　総丈 巾37×竪148cm



夕立
あはやとて軒のはしとミ走りよりて
おろしもあへす晴る夕たち

六十五万円
(650,000JPY)

松平容保
一一八頁参照



西郷南洲顕彰会鑑定書

鹿児島高島屋シール

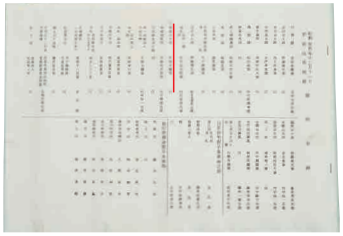
144 **西　郷　南　洲　　効祥 扁額**

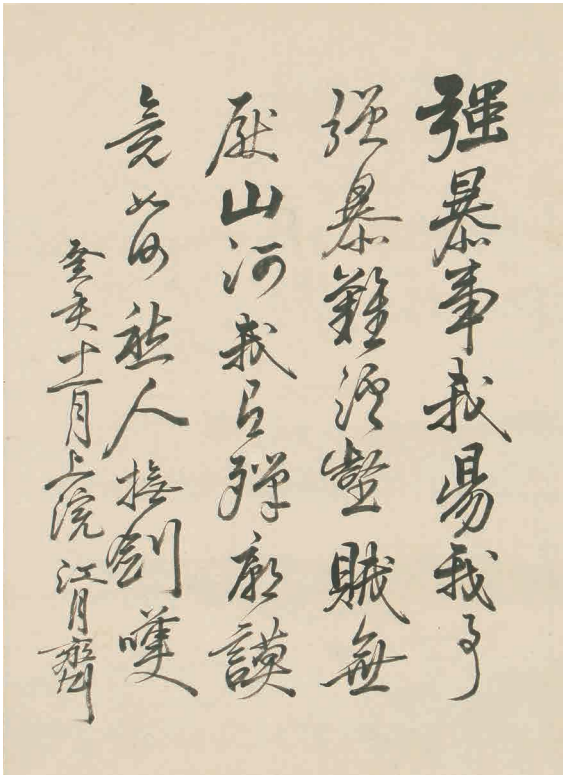
絹本　箱入　本紙 巾51.5×竪29.5
総丈 巾84.5×竪45cm　箱傷ミ
鹿児島高島屋シール有
西郷南洲顕彰会鑑定書

百　二　十　万　円
(1,200,000JPY)

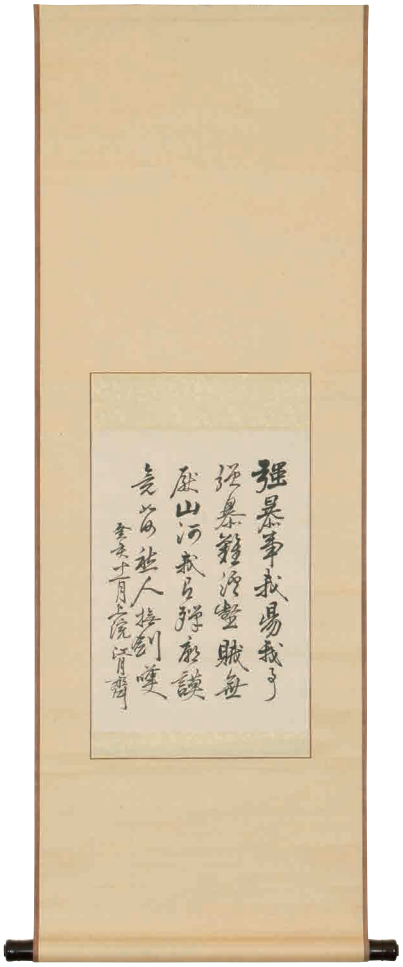
強暴事我易我事
強暴難渓壑賊無
厭山河我有弾廟謨
竟如何愁人撫剣嘆

徳山市民館陳列目録





久坂玄瑞
115頁参照



145 **久　坂　玄　瑞　　強暴云々詩**

紙本　箱入　本紙 巾26×竪36　総丈 巾40×竪114cm
文久３年（1863）11月　24歳　**最晩年作**　少オレ
昭和35年徳山市民館出陳

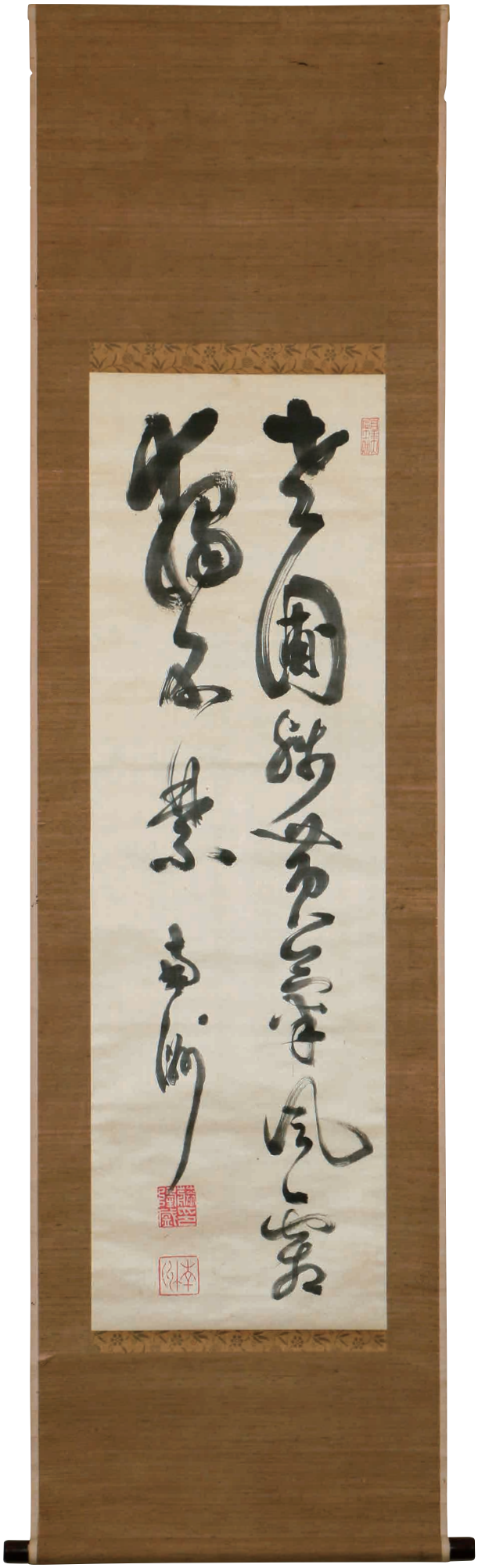
五　十　五　万　円
(550,000JPY)

146

西郷南洲　五言二句二行

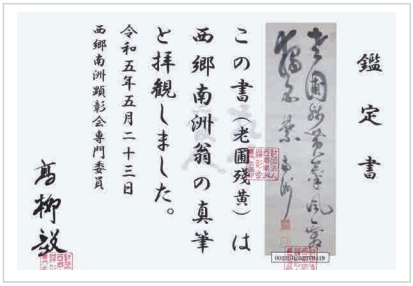
絖本　箱入　本紙巾33×竪107　総丈巾46.5×竪173cm　表具微少傷ミ　本紙微少シミ　**西郷南洲顕彰会鑑定書**

百二十万円
（1,200,000JPY）



老圃残黄菊風霜
獨不禁

西郷南洲
一一五頁参照



鑑定書

この書（老圃残黄）は
西郷南洲翁の真筆
と拝観しました。
令和五年五月二十三日
西郷南洲顕彰会専門委員
高柳敬

西郷南洲顕彰会鑑定書

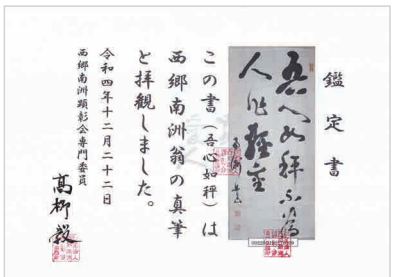
147

西郷南洲　吾心如秤不為人作軽重

紙本　箱入　本紙 巾46×竪102.5　総丈 巾60.5×竪188.5cm　本紙修復痕　**西郷南洲顕彰会鑑定書**

西郷南洲
一一五頁参照

西郷南洲顕彰会鑑定書



鑑定書

吾心如秤不為人作軽重

この書（吾心如秤）は
西郷南洲翁の真筆
と拝観しました。

令和四年十二月二十二日
西郷南洲顕彰会専門委員
高柳毅

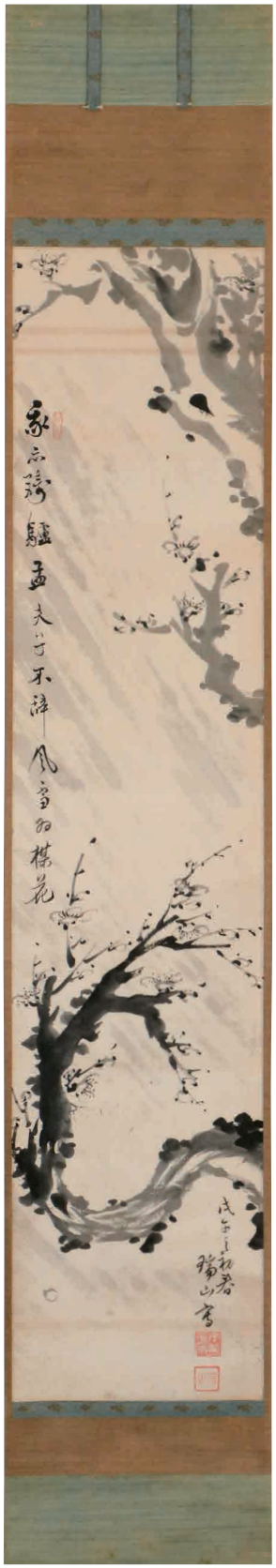
八十五万円
（850,000JPY）

148

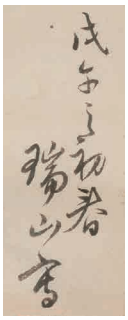
武市半平太　墨梅図画賛

紙本水墨　箱入　本紙 巾27×竪123.5　総丈 巾29×竪200cm　安政五年（一八五八）三〇歳

武市半平太
一一六頁参照



我亦騎驢孟夫子不辞風雪為梅花

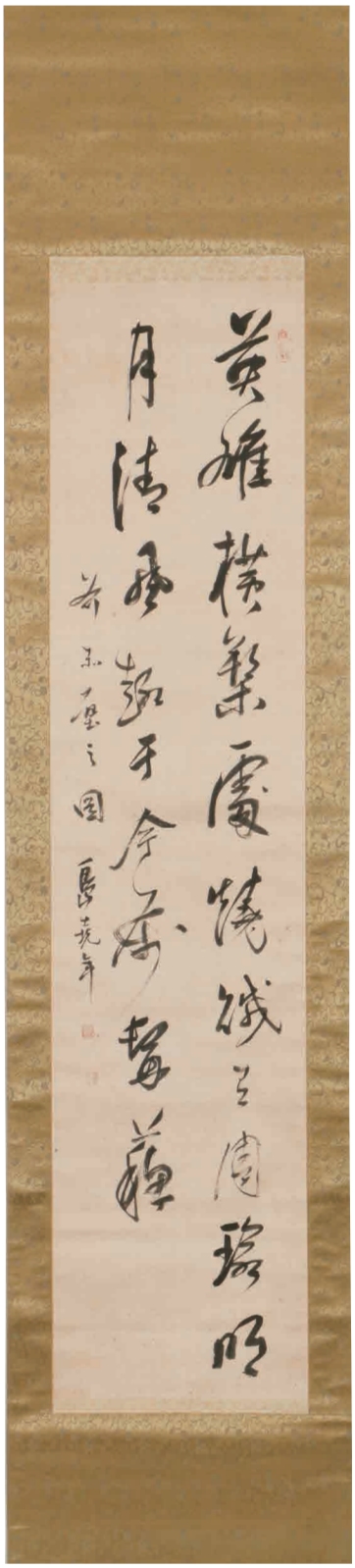


五十五万円
（550,000JPY）

149

島　義　勇　五絶二行

紙本　箱入　本紙 巾31×竪133.5　総丈 巾41.5×竪204.5cm　妙里庵箱書並題簽



英雄横槊處燒賊有周瑜明
月清風趣于今屬髯蘇

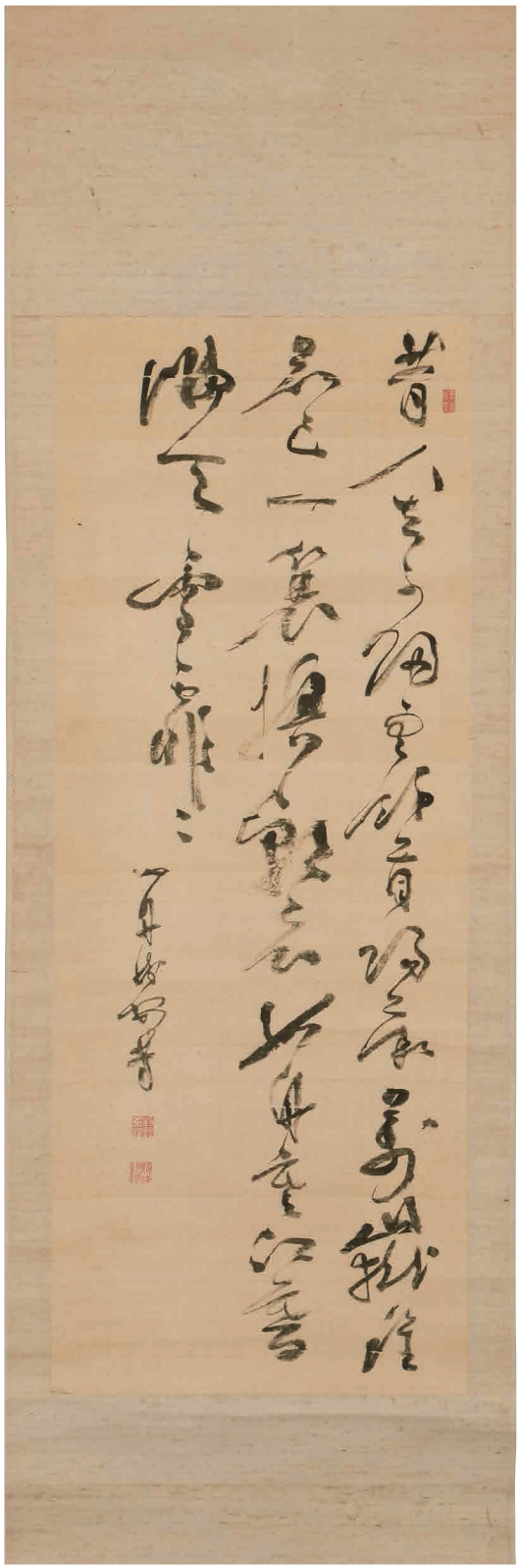
二十五万円
(250,000JPY)

島義勇
一一六頁参照

150

勝　海　舟　三行書

絹本　箱入　本紙 巾41×竪105.5　総丈 巾51×竪170cm　少オレ・少汚レ



昔人去不帰空餘首陽薇萬嶽誰
知己一簑換朝衣孤舟寒江暮
滿天雪霏々

二十五万円
(250,000JPY)

勝海舟
一一四頁参照

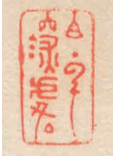
151

勝海舟　二行書

絖本　箱入　本紙巾39.5×竪128　総丈巾54.5×竪198.5cm　本紙微少シミ

無功亦無名不求貴與栄國
難今已了飄然身世軽

勝海舟
一一四頁参照



十五万円
（150,000JPY）

152

高橋泥舟　心棒和歌

紙本　箱入　本紙巾43×竪134.5　総丈巾56.5×竪206.5cm　本紙少シミ・修復痕

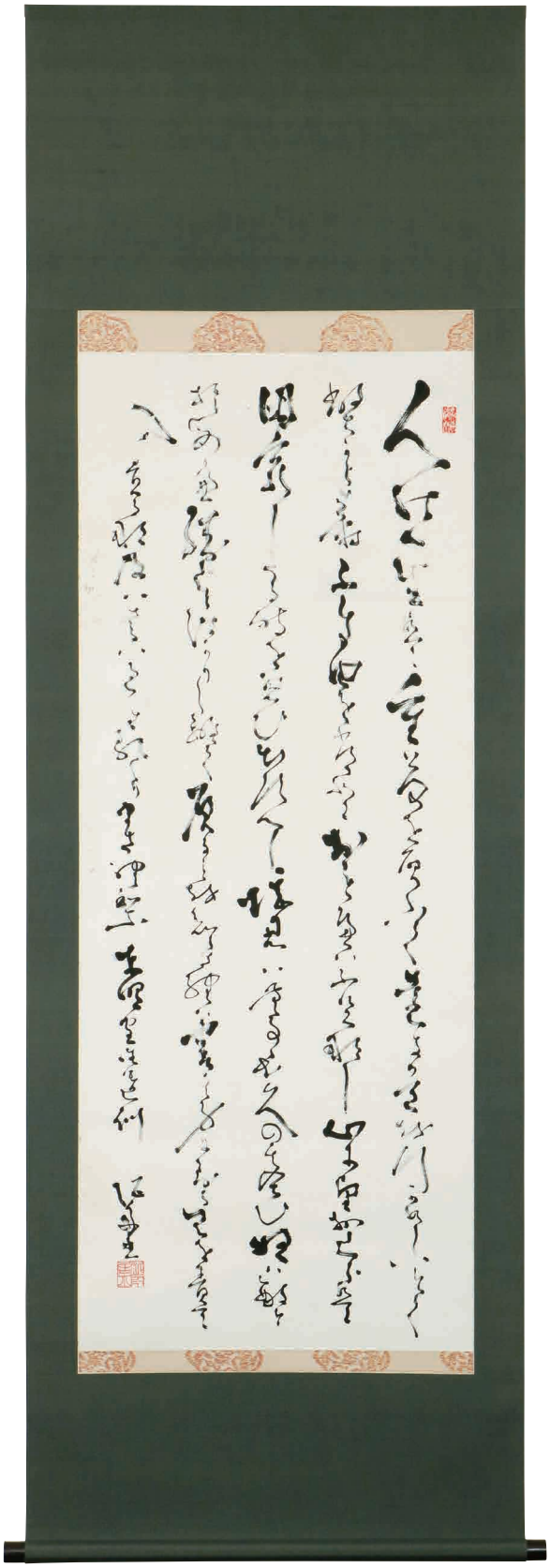
牛鍋と地獄の
味はよくしれて
此字のあしを知る
坊わなし

二十五万円
（250,000JPY）

153

高橋泥舟　徳川家康遺訓

紙本　箱入　本紙巾54×竪136　総丈巾68.5×竪211.5cm　本紙少シミ・少傷ミ・修復痕



人の一生は重荷を負ふて遠き道を行か如しいそく
へからす不自由を常とおもへハ不足なし心に望おこらは
困窮したる時を思ひ出すへし堪忍ハ無事長久の基いかりハ敵と
おもへ勝事はかりしりて負ることを
しらされは害其身に到る己を責て
人を責るな及ハさるハ過たるよりまされり

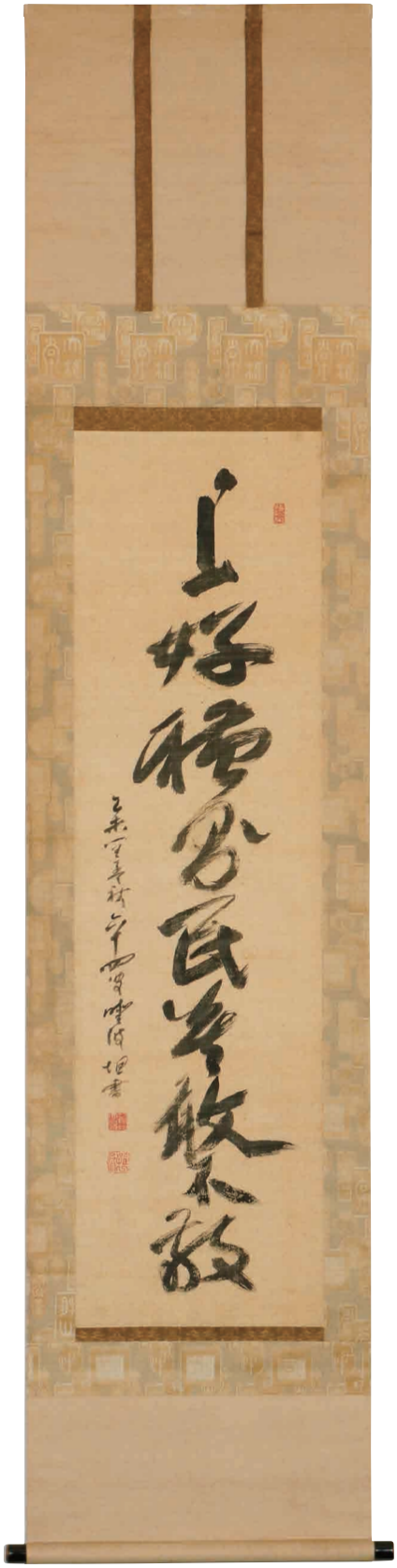
高橋泥舟
一一六頁参照

二十五万円
（250,000JPY）

154

佐藤一斎　論語一節

絹本　箱入　本紙巾31×竪112.5　総丈巾43.5×竪195cm　天保六年（一八三五）六四歳　表具少オレ　本紙少シミ　軸先少傷ミ



上好禮則民莫敢不敬

佐藤一斎
一一六頁参照

八万五千円
（85,000JPY）

貫名海屋　一一七頁参照
犬養木堂　一一三頁参照

155

貫名海屋
人見幽居僻吾知善拙尊　一行

絁本　箱入　本紙巾14×竪116.5
総丈巾33×竪180cm　微少オレ
佳品

八万五千円
（85,000JPY）

156

犬養木堂
即心是道主善為師　一行

紙本　箱入　本紙巾33×竪136
総丈巾48.5×竪199.5cm
昭和六年　七七歳　**最晚年作**
本紙修復痕　**佳品**

十五万円
（150,000JPY）

157

犬養木堂
即是為學何處不僻　一行

紙本　箱入　本紙巾31×竪132.5
総丈巾44×竪196.5cm
表具少虫穴　箱少傷ミ　**佳品**

十五万円
（150,000JPY）

158 渋 沢 栄 一
貿易之大宗 扁額

絖本 本紙 巾110.5×竪34.5
総丈 巾139×竪47cm

渋沢栄一 116頁参照　十 八 万 円 (180,000JPY)

159 熊 谷 守 一　露 額装

紙本　熊谷秀子箱書　本紙 巾10×竪12.5
総丈 巾31×竪34cm　**美品**

熊谷守一 115頁参照　熊谷秀子 115頁参照　十 八 万 円 (180,000JPY)

160 山 本 五 十 六　寿

紙本　長岡堅正寺 橋本禅巌箱書
本紙 巾31×竪32.5　総丈 巾46×竪121.5cm
昭和一六年　五八歳　本紙微少シミ

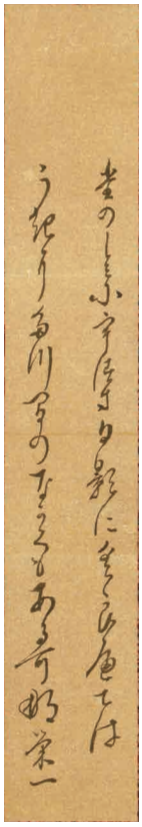
三十八万円 (380,000JPY)

山本五十六 一一九頁参照　橋本禅巌 一一七頁参照

161 渋 沢 栄 一　短冊 額装

金地紙本　本紙 巾6×竪35.5
総丈 巾20×竪69cm

たのしミにうつす日影にくらへては
うきにたつまのなかくもあるかな



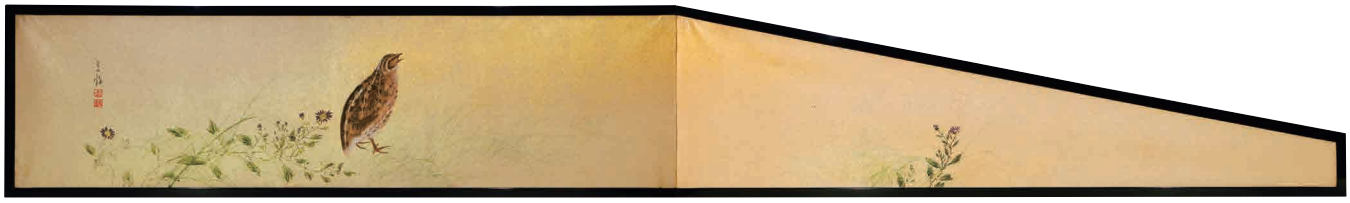
七万五千円 (75,000JPY)

平田郷陽
118頁参照

162 平 田 郷 陽 熟柿

共箱 総丈 巾18×奥行10×高11.5cm

百 五 十 万 円
(1,500,000JPY)



今井景樹
113頁参照

163 今 井 景 樹
花鳥図風炉先屏風
二曲一双

金地紙本着色金砂子 箱入
本紙各巾185×竪24
総丈各巾188×竪27.5cm
本紙微少シミ

十 八 万 円
(180,000JPY)

164

柴原魏象　憩い屏風二曲半双

絹本着色　本紙 巾168×竪142.5　総丈 巾172×竪146.5cm　本紙少シミ・少ヤケ　出品作か

五十五万円
(550,000JPY)

柴原魏象
一一六頁参照

165 伝 土佐光茂
平家物語図屏風 六曲一双

紙本着色金泥金砂子
本紙 各 巾315×竪157.5
総丈 各 巾331×竪174.5cm
傷ミ・少虫穴・少シミ

百 八 十 万 円
(1,800,000JPY)

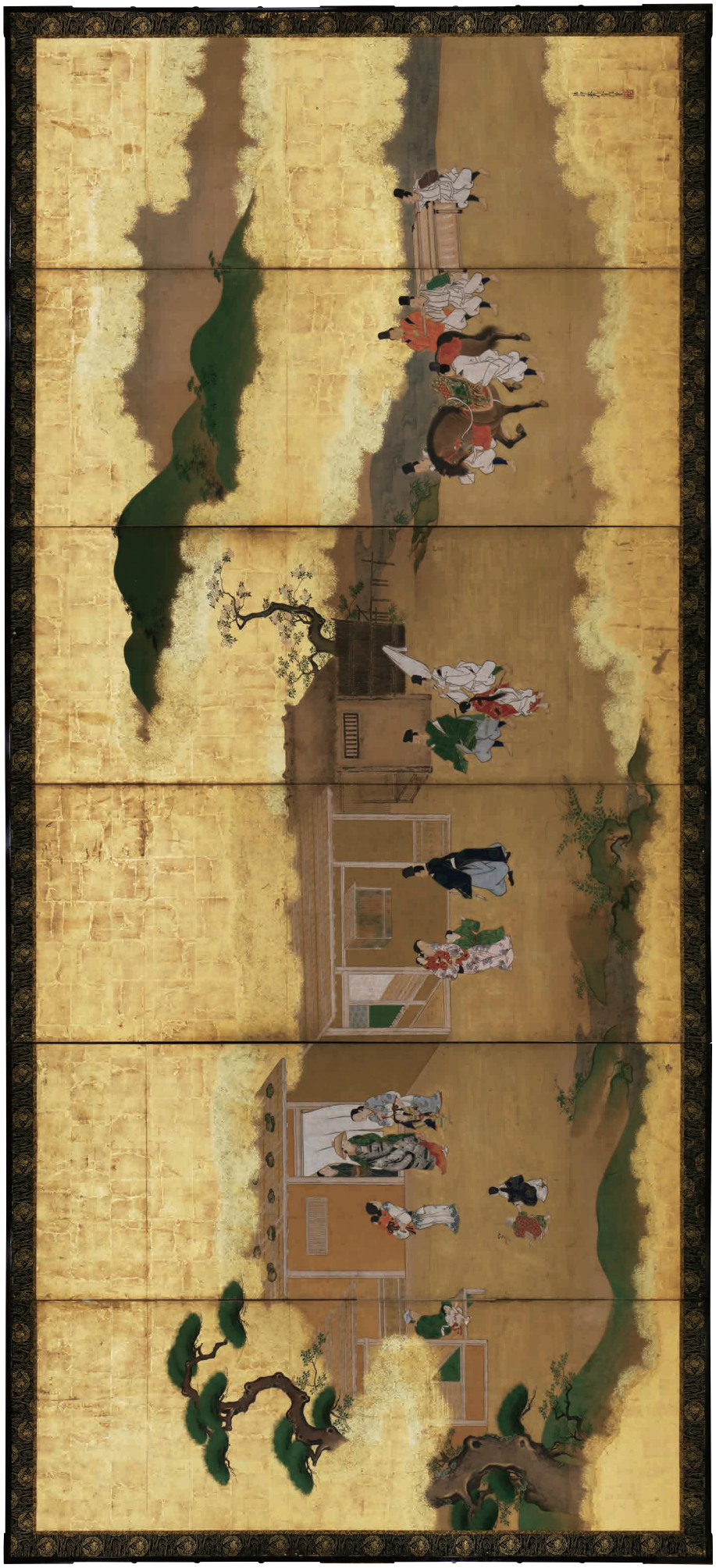
土佐光茂
117頁参照

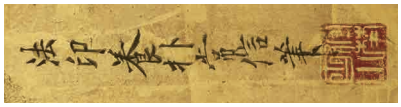
166 **狩　野　常　信　　物語図屏風 六曲一双**

金地紙本着色金泥金砂子　本紙 各 巾356×竪153.5
総丈 各 巾373×竪169.5cm　本紙少傷ミ・修復痕　裏少傷ミ　オゼ少傷ミ

二百五十万円
(2,500,000JPY)

狩野常信
114頁参照

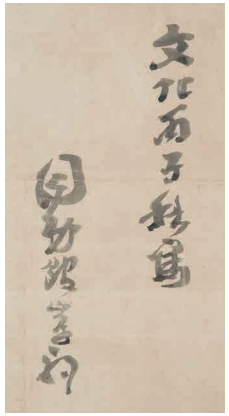




167　**江戸中期 源氏物語図屏風**
六曲一双中屏風

紙本着色金泥金箔　本紙 各 巾271×竪106.5
総丈 各 巾286×竪120.5cm
少傷ミ・少虫穴　オゼ傷ミ　**佳品**

百　二　十　万　円
(1,200,000JPY)



168 岸　　駒　墨梅墨竹図屏風 六曲一双

紙本水墨　本紙 各 巾468×竪174　総丈 各 巾472×竪178cm
文化13年（1816）61歳　本紙少シミ・少傷ミ・修復痕

岸駒
114頁参照

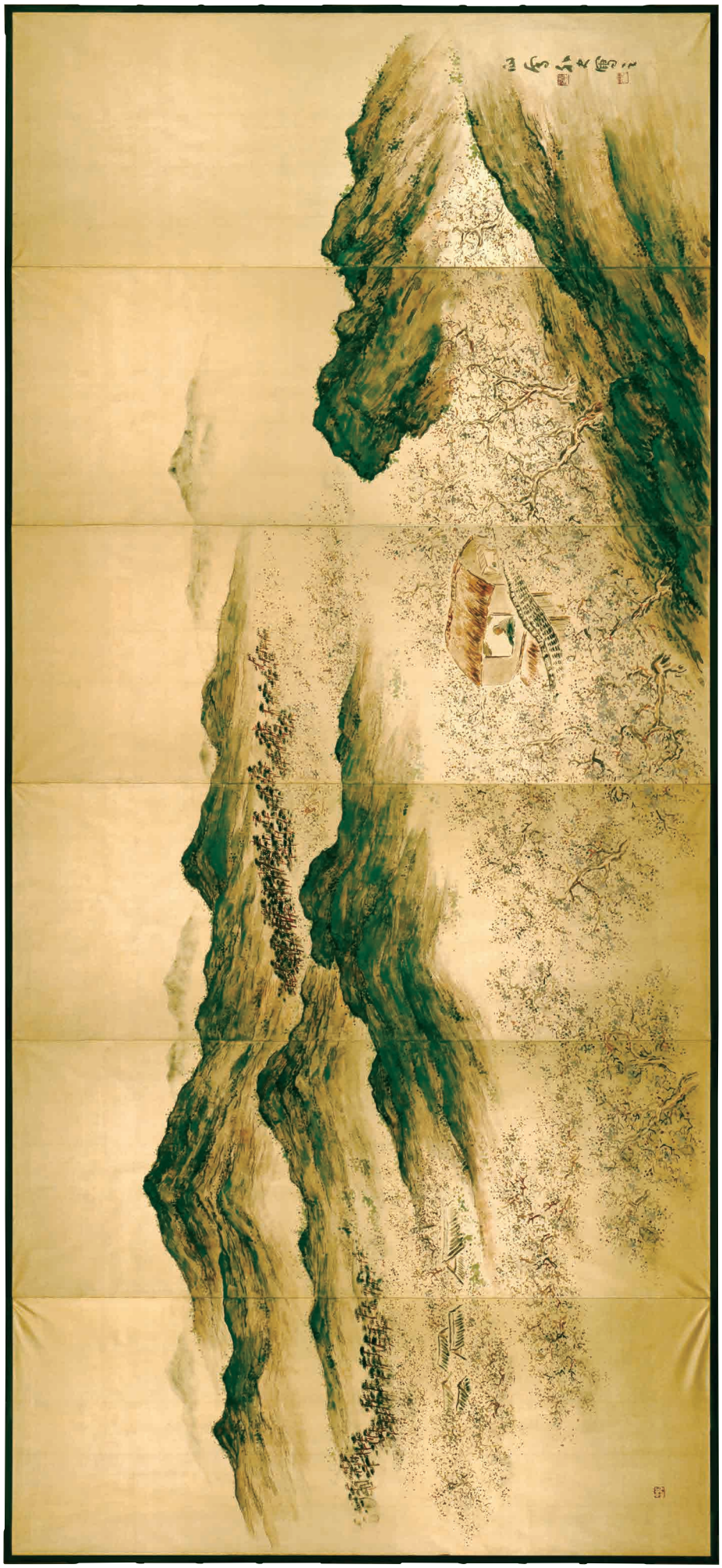
二百五十万円
(2,500,000JPY)

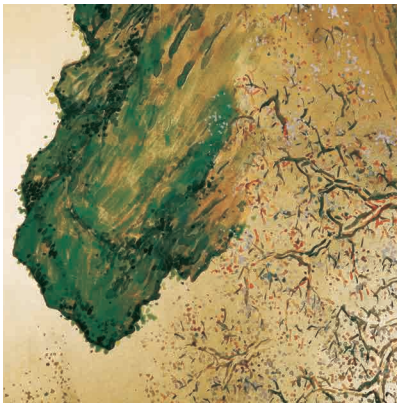
169 **橋　本　関　雪**　　**春秋山水図屏風 六曲一双**

金地紙本着色　共箱蓋有　本紙 各 巾372×竪167
総丈 各 巾376×竪171.5cm　本紙少ヨレ

四 百 五 十 万 円
(4,500,000JPY)

橋本関雪
117頁参照





170

山本光一

四季草花小禽図屏風 六曲一双中屏風

紙本着色金泥 本紙各巾234×竪76.5

総丈各巾247×竪89.5cm 表具微少傷ミ

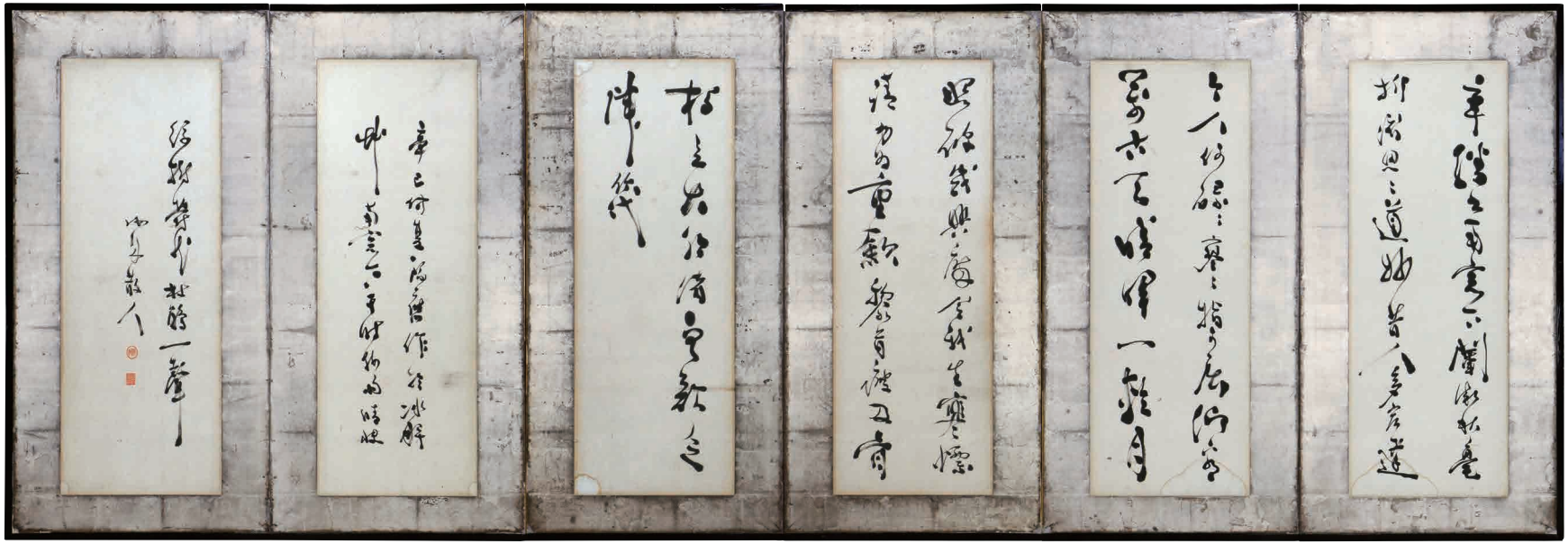
百二十万円

(1,200,000JPY)

山本光一 一一九頁参照

（右隻）
群動日駸々聊足
慰塵襟世路多風雨
鴉雀悲疎林豈何張
密羅尚憶有好音後
事今難言昂然表
素心
稟性厭瑣屑天賦出陋
質不伸鴻鵠只定因才拙
塵氛真途儀頭白毳々
空一過一転瞬賢懸半
死別散材豈為果自笑亦
自失行我随大化用推任真

（左隻）
卒淡出両完下闌漸秋毫
抑依思々道好昔人多官道
今人何碌々寥々指可屈御客
万古天嗟暉一輪月
照破咸興廃令我生寒慄
請勿為重歛黎首疲及肯
橋立大倫諸定欲乞
津筏
辛巳仲夏録旧作於冰解
艸南窓下干時梅雨晴快
緑樹対弋杜鵑一声
海舟散人



171 **勝　海　舟　書屏風 六曲一双中屏風**

紙本　本紙 各 巾35.5×竪98.5　総丈 各 巾351×竪121cm　　五十五万円
表具少傷ミ　本紙少シミ・少虫穴　　(550,000JPY)

勝海舟
114頁参照

172 **小　山　栄　達**
屋島合戦図屏風 六曲半双

絹本着色金泥金砂子　本紙 巾355×竪161　総丈 巾367×竪173cm
表具少傷ミ　本紙微少シミ・修復痕

百　二　十　万　円
(1,200,000JPY)

小山栄達
115頁参照

173 **武　田　一　路**
楠木正成迎後醍醐帝図屏風 六曲半双

絹本着色金泥金砂子　本紙 巾336×竪161　総丈 巾348×竪173.5cm

四 十 五 万 円
(450,000JPY)

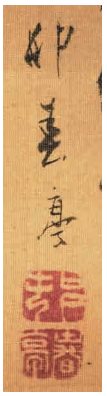
武田一路
116頁参照

174

中村春亭　広南従四位白象図

絹本着色　箱入　本紙 巾57×竪37.5
総丈 巾71×竪146cm　嘉永七年（一八五四）

三十五万円
（350,000JPY）



中村春亭
一一七頁参照

175

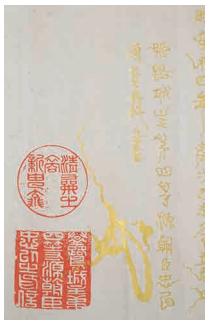
谷舜嬢画 中田粲堂賛 釣舟図 夫婦合作 小品

紙本水墨淡彩　箱入　本紙 巾17×竪23
総丈 巾28×竪123.5cm　微少オレ　**稀品**

二十五万円
（250,000JPY）

山平水遠晴湖
滴無雨春風一
境閑不敢漁翁
恒魚耳只應聞
釣避塵間

谷舜嬢
一一六頁参照
中田粲堂
一一七頁参照



176

酒井忠以
妙法蓮華経観世音菩薩普門品並扉絵 巻物

（経）紙本金泥・（扉絵）絹本着色金泥　共箱
本紙（経）巾349×竪35.5・（扉絵）巾21.5×竪28
総丈 巾404×竪35.5cm
安永４年（1775）十二月中七日　21歳
少オレ　表具微少虫穴　**水晶軸先**

四十五万円
（450,000JPY）

酒井忠以
116頁参照

177

藤本鉄石　花火画賛

紙本金泥　箱入　本紙 巾29.5×竪130.5　総丈 巾42×竪199.5cm　微少オレ

藤本鉄石
一一八頁参照

恣升　舟如残橋声入夜長峭然何
所音一発栄星光　発々呈士子頭胤天
曷我高不識西風魚撩三孔王京桃月宮発
植華銀謹披絶練暑荐兼舟燈痕抱水面
踏影而抑舞十一如酔慕達不対平安去明時
楽此時　任明謨作明時　源真金写并題

十八万円
(180,000JPY)

178

浮田一蕙　七草之図

絹本着色金泥　箱入　本紙 巾35×竪97　総丈 巾37.5×竪178.5cm　本紙微少シミ

浮田一蕙
一一三頁参照

十八万円
(180,000JPY)

179

熊谷守一　浜額装

板に油彩　本紙巾32×竪23.5　総丈巾50×竪41cm　昭和二九年　七四歳

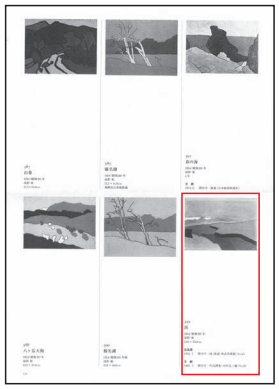
『熊谷守一油彩画全作品集』並『熊谷守一作品撰集』所載

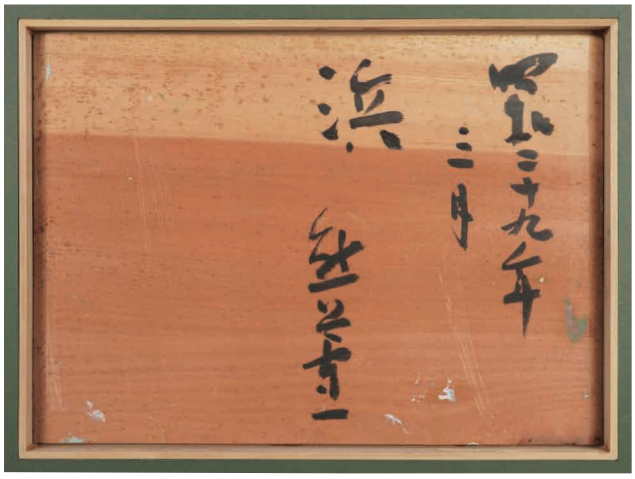
裏に自署有　東美鑑定評価機構鑑定委員会鑑定証

六百五十万円
（6,500,000JPY）

熊谷守一
一一五頁参照

『熊谷守一油彩画全作品集』





（作品裏面）

180

香月泰男　花縮砂　額装

P4号　キャンバス油彩　本紙巾20×竪31.5　総丈巾38.5×竪52cm　キャンバス割レ有

裏面画布に自署　木枠に自題有　香月婦美子並藤田士朗鑑定書　京橋画廊 霜月会出品作

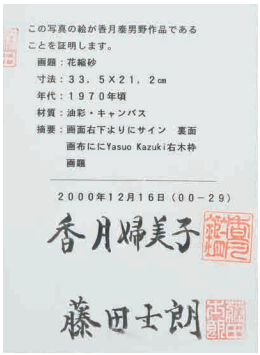
二百五十万円
(2,500,000JPY)

(キャンバス木枠)

香月泰男
一一四頁参照
香月婦美子
一一四頁参照

(キャンバス裏)

香月婦美子並藤田士朗鑑定書

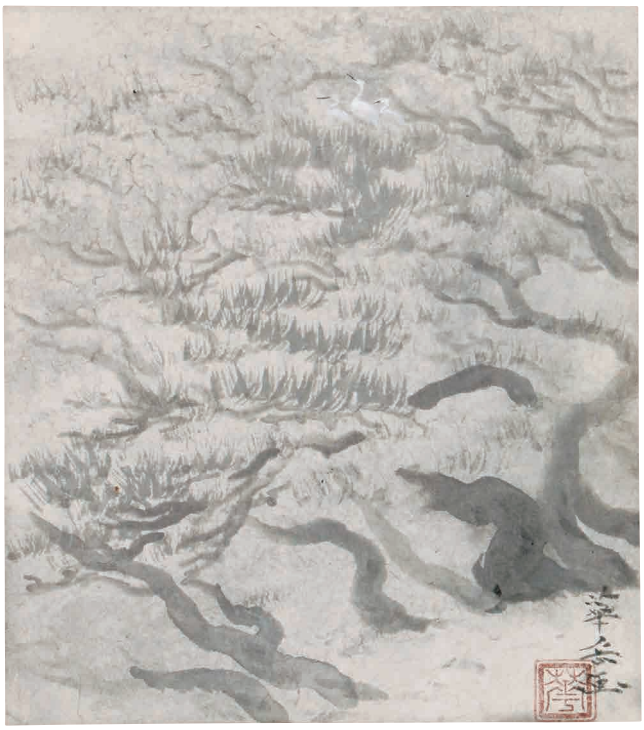


この写真の絵が香月泰男野作品である
ことを証明します。
画題：花縮砂
寸法：33．5×21．2cm
年代：1970年頃
材質：油彩・キャンバス
摘要：画面右下よりにサイン　裏面
画布ににYasuo Kazuki右木枠
画題

2000年12月16日（00－29）

香月婦美子

藤田士朗



181 **村　上　華　岳　　鷺棲松籟**

紙本水墨　村上佳子箱書　二重箱入
本紙 巾23.5×竪27.5　総丈 巾48×竪141.5cm
藤岡光影堂製表具

村上華岳　119頁参照　**村上佳子**　119頁参照

百　二　十　万　円
(1,200,000JPY)

入江波光
一一三頁参照

182 **入　江　波　光　　東天紅 倣法隆寺塑像**

紙本着色　共箱　二重箱入　本紙 巾20×竪34
総丈 巾25.5×竪111.5cm　昭和20年　58歳
本紙微少シミ

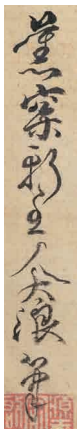
三　十　八　万　円
(380,000JPY)

183

石川大浪　龍虎双幅

絹本水墨　**共箱**　本紙各巾35×竪106　総丈各巾47×竪194cm　表具少虫穴　本紙微少シミ　**稀品**

五百五十万円
(5,500,000JPY)



石川大浪
一一三頁参照

作家略歴

＊五十音順で掲載しております。
＊作家名の下の番号は本目録の作品番号です。

青柳琴僊　あおやぎきんせん　129

文人画家。群馬県生。本名は琴之助。初号は燕山。農家の長男でありながら児玉果亭の作品に感銘を受けて画を志し、その門に入る。以降二十数年にわたって農閑期に信州渋温泉の師の許へ通い画を学んだ。明治二六年アメリカ・シカゴのコロンブス記念万国博覧会に出品。師の歿後もその跡を継いで後進の指導にあたり、晩年は郷里の群馬県月夜野で画室玉兎山房を開いた。昭和三七年（一九六二）歿、九四歳。

秋野庸彦　あきのつねひこ　19

幕末～明治の国学者。出羽生。通称は仲衛、美彦。号は松屋。鈴木重胤に師事し、儒学を芳野金陵に、医術を林洞海に学んだ。重胤の著作『日本書紀伝』を校訂。維新後は山形県会議員となり、加茂坂トンネルの開削など道路改修の実現に努めた。大正九年（一九二〇）歿、八〇歳。

浅井柳塘　あさいりゅうとう　40

幕末～明治の南画家。阿波生。幼名は永吉、名は龍、字は子祥、別号に小白、白山人、拝竹道人、白雲山客、雲客蘇雲など。はじめ百々広年に四条派を学び、ついで谷口藹山に南画を、貫名海屋に教えを受けた。のち長崎に遊学して木下逸雲、鉄翁祖門、清人徐雨亭らに山水画を学んだ。明治六年（一八七三）の京都博覧会では席上揮毫に参加している。明治一三年京都府画学校出仕拝命。詩文、書も能くした。明治四〇年（一九〇七）歿、六六歳。

阿部正識　あべまさつね　133

江戸中期の大名。武蔵忍藩主。忠秋系阿部家七代。父正敏の跡を継いで家督を相続するも、病弱であったため幕府の役職に就くこともなく三三歳で隠居。絵画や書を能くした。享和三年（一八〇三）歿、四〇歳。

荒木探令　あらきたんれい　45

狩野探令。明治～昭和前期の日本画家。出羽新庄生。名は丈太郎、のち守純。別号に六陶居士。東京で菊川淵斎、のち狩野探美に師事。狩野忠信・岡倉秋水らと狩野会を結成し、狩野派の復興に務めた。また江戸川製陶所の納富介次郎にテレビン油描法を学び、陶画も描いた。晩年に狩野姓となる。日本画会幹事・正派同士会幹事。昭和六年（一九三一）歿、七三歳。

池上秀畝　いけがみしゅうほ　92，93

日本画家。長野県生。本名は国三郎、別号伝神洞。絵を嗜む趣味人の祖父・父の元育つ。荒木寛畝に師事、弟子の中心となる。文展・帝展で活躍。伝神洞画塾主宰、後進指導にも力を入れた。帝展委員・審査員。昭和一九年（一九四四）歿、七〇歳。

池田輝方　いけだてるかた　83

日本画家。東京木挽町生。名は正四郎。妻は同じく日本画家の池田蕉園。水野年方について浮世絵を学び、師の歿後は川合玉堂に師事した。美人画、風俗画を得意とし、鏑木清方、大野静方らと烏合会を結成。初期日本美術院展、文展、帝展を場として活躍した。のち大正八年には石井林響、山内多門らと如水会を結成している。妻蕉園とともに文展の鴛鴦画家とうたわれた。大正一〇年（一九二一）歿、三九歳。

池大雅　いけのたいが　22，44

江戸中期の文人画家。京都生。姓は池野、幼名を又次郎、通称は秋平、名を勤・無名、字は公敏・子職・貸成・載成。号は大雅、霞樵など多数。一五歳で扇屋を構え、扇子に絵を描いて生計を立てた。柳沢淇園、祇園南海らから教えを受ける一方で、舶載の木版画譜類を通して中国南宗画を独学。日本画の伝統と西洋絵画の表現法をとり入れて独特の画風を確立し、与謝蕪村とともに日本南画の大成者といわれている。安永五年（一七七六）歿、五四歳。妻の玉瀾も画家として知られる。

石川永庵　いしかわえいあん　139

儒医。高遊外の支持者であったとみられる。美濃に住した。生歿年不詳。

石川大浪　いしかわたいろう　183

江戸後期の画家・旗本。名は乗加。通称は甲吉、のち七左衛門。字は啓白、前野良沢、大槻玄沢ら蘭学者と交わり、舶来洋書の挿絵や銅版画を写し西洋画法を研究した。文化一四年（一八一七）歿、五三歳。

石河有粼　いしこう（いしこ）ゆうりん　30

日本画家。名古屋生。名は正徳。別号に両鶴軒、千石斎。園田忠監、織田杏斎に、のち山元春挙に師事した。内国勧業博覧会や絵画共進会などで受賞を重ねた。昭和二七年（一九五二）歿、八二歳。

石崎光瑶　いしざきこうよう　112

大正～昭和前期の日本画家。富山県福光生。名は猪四一。はじめ金沢で琳派の絵師山本光一に学び、のち京都に出て竹内栖鳳に師事した。写実に基づく鮮やかで装飾的な花鳥画を得意とし、大正元年第六回文展で初入選以降、文展・帝展を中心に活躍。インド・ヒマラヤで大連峰や古蹟を巡り、またヨーロッパにも外遊した。師栖鳳の歿後には石崎画塾を開いて後進の育成にあたる。帝展審査員・京都絵専教授を務めた。昭和二二年（一九四七）歿、六四歳。

伊藤若演　いとうじゃくえん　18

江戸中～後期の画家。名は雅時。若冲の子とも、弟子とも言われる。生歿年不詳。

伊藤若冲　いとうじゃくちゅう　16，17

江戸中期の画家。京都錦小路の青物問屋に生まれる。字は景和、斗米庵とも号す。幼少より画を好み、初め狩野派に学びのち宋元画の模写に励む。花鳥画、殊に鶏画を得意とし、飼育する鶏を熟視し描いたという。絵を求める人があれば米一斗をもってこれにかえたため、斗米庵と号したと伝わる。現在宮内庁で保存されている『動植綵絵』三十幅は代表作。寛政一二年（一八〇〇）歿、八五歳。

伊東深水　いとうしんすい　80，82

日本画家。東京生。名は一。鏑木清方に師事。文展・帝展に入選。第八回帝展で「羽子の音」、第十回帝展で「秋晴れ」が特選を得、美人画家としての地位を確立する。浮世絵の伝統に立ちながら現代風俗を取り入れた、芸術性の高い画境を築いた。日月社顧問。日展顧問。芸術院会員。昭和四七年（一九七二）歿、七四歳。

犬養木堂　いぬかいぼくどう　156，157

政治家。岡山県生。名は毅。立憲改進党の結成に参加。憲政擁護を掲げ、「憲政の神様」と呼ばれる。立憲国民党総裁、革新倶楽部総裁、立憲政友会総裁、文部大臣、逓信大臣等を歴任し、昭和六年に内閣総理大臣となるが、翌昭和七年（一九三二）、五・一五事件にて命を落とした。七八歳。

井岡桜仙　いのおかおうせん　68

江戸後期の本草学者・津山藩医。名は洌。字は元泉。通称は道貞。別号に桜泉。小野蘭山に学び、蘭山が述した『大和本草批正』を筆記した。天保八年（一八三七）歿、六〇歳。

今井景樹　いまいけいじゅ　163

四条派の画家。三重生。本名康。京都美術専門学校卒業後、今尾景年のもとで円山派を学ぶ。景年の養子となるが、のち復籍する。花鳥画を得意とした。昭和四〇年（一九六五）歿、七四歳。

今尾景祥　いまおけいしょう　103

日本画家。京都生。名は孝則。別号に静観。日本画家今尾景年の養嗣子。養父景年に画を学ぶ。京美校卒。個展を中心として活躍し、皇室献上数回に及ぶ。京都金戒光明寺襖絵、南禅寺大衡立など、京都の各寺社へ大作を収めた。平成五年（一九九三）歿、九一歳。

今尾景年　いまおけいねん　103

日本画家。京都生。名は永勧、字は子裕、景年は号、別号に聊自楽居。初め浮世絵師梅川東居に師事、のち鈴木百年に四条円山派を学ぶ。花鳥画を得意とし国内外の博覧会で多数受賞するなど高い評価を得た。帝室技芸員・文展審査員・帝国美術院会員。大正一三年（一九二四）歿、八〇歳。

入江波光　いりえはこう　182

日本画家。京都生。本名は幾治郎。京都市立美術工芸学校・京都市立絵画専門学校で竹内栖鳳に師事。菊池契月らと共に欧州を遊学。卒業後、国画創作協会に所属し、同人となる。同会解散後に京都絵専教授を務め、法隆寺壁画の模写に従事した。昭和二三年（一九四八）歿、六一歳。

浮田一蕙　うきたいっけい　61，178

江戸後期の画家。京都生。姓は豊臣、初名は公信、のち可為、号は為牛。画を土佐光孚・田中訥言に学び、大和絵の復興につとめた。和歌や書道にも通じた。安政の大獄の際に捕らえられ、翌年釈放後に歿した。安政六年（一八五九）歿、六五歳。

江上瓊山　えがみけいざん　70

明治期の南画家、書家。長崎生。名は景逸。字は希古。別号に墨隠、数峰道人。守山湘飄に南画を、岡田篁所に書を学んだ。懇意にしていた大森鐘一長崎県知事の京都府知事に就任に伴い京都師範学校教師として招聘され、また同知事の依頼により明治天皇・皇后への献上画四君子四幅対を揮毫した。富岡鉄齋や犬養毅らと交流があったことが知られている。大正一三年（一九二四）歿、六二歳。

鶯亭金升　おうていきんしょう　128

新聞記者、戯作者。下総生。本名は長井総太郎。旗本の家に生まれる。戯作者梅亭金鵞の門に入り、雑誌『団団珍聞』の編集にあたった。『万朝報』や『都新聞』などに戯作、落語を書いたほか、都々逸（情歌）、川柳、狂歌などを好んで作った。結婚の際、小林清親夫妻が媒酌を務めるなど親交が深かった。昭和二九年（一九五四）歿、八六歳。

黄檗大成　おうばくだいじょう　67

大成照漢。江戸中期の渡来僧。黄檗宗。中国福建省生。道号は大成。法諱は照漢。先号は仲瑛。享保七年（一七二二）日本に渡来し、長崎崇福寺八代住持、のち宇治万福寺二十一代住持を務めた。天明四年（一七八四）寂、七六歳。

黄檗道元　おうばくどうげん

道元仁明。黄檗宗僧。京都府宮津市生。道号は道元。法諱は仁明。号は謙堂。黄檗山萬福寺五十二世。密道仁超の法を嗣ぐ。中国祖跡・インド仏跡を巡拝し、帰国後は佐賀普明寺・滋賀正明寺・朝鮮覚心寺の住持を務め た。戦後は万福寺塔頭万松院に住した。昭和四一年（一九六六）寂、九〇歳。　139

黄檗来鳳　おうばくらいほう

江戸中～後期の黄檗宗の僧。道号は弥峰、法諱は円基、号は来鳳、別号に墨痴・山陽山人等。福済寺の大鵬正鯤に師事し、のち福済寺十三監寺に就任。大鵬に墨画を学び、墨竹画を能くした。文化一四年（一八一七）寂、八八歳。　67

大倉好斎　おおくらこうさい

江戸後期の古筆鑑定家。京都生。大倉汲水の長男。姓は菅原、名は信古、号に古昔園。紀州徳川家に仕えた。嘉永四年（一八五一）法橋に叙せられる。文久二年（一八六三）歿、六八歳。　50，54

大橋翠石　おおはしすいせき

明治～昭和の日本画家。美濃生。本名は卯三郎。通称は宇一郎。天野方壺・渡辺小華に師事する。内国勧業博覧会、東京勧業博覧会をはじめ、明治三三年パリ万国博、三七年セントルイス万国博などに出品して受賞。写実的な動物画、特に虎画を得意とし、国内外で高く評価された。昭和二〇年（一九四五）歿、八一歳。　98

小田海僊　おだかいせん

江戸後期の南画家。周防生。通称良平、名は贏（るい）または瀛（えい）。字を巨海、号は海僊の他に百谷または百穀。二二歳で上京。京都四条派の松村呉春に入門し、同門の松村景文や岡本豊彦らと名声を競ったが、やがて頼山陽に感化され南画に転向。その後九州に遊学して独自の南画風を確立した。菅茶山、浦上春琴、田能村竹田らと交流があった。高野山や京都御所の障壁画などの大事業を手掛けた。文久二年（一八六二）歿、七八歳。　41

尾竹国観　おたけこっかん

明治～昭和前期の日本画家。新潟生。紺屋で絵師・倉松の子。日本画家尾竹越堂・竹坡の弟。名は亀吉、可明と称する。幼くして笹田雲石に国観の号を受け、のち小堀鞆音に師事。また漢学を高橋太華に学んだ。おもに文展で活躍し、歴史画の大作を発表した。教科書や雑誌の挿絵や ポンチ絵、絵本なども描いた。門下に織田観潮・換戸観海等。昭和二〇年（一九四五）歿、六六歳。　95，99

尾竹竹坡　おたけちくは

明治～昭和の日本画家。新潟生。紺屋で絵師・倉松の子。幼い頃より絵に親しみ、兄・越堂、弟・国観と共に絵に長けた。上京して川端玉章・小堀鞆音に師事。文展で入選を重ねる。八火社を創立、門人を率いて展覧会を開いた。昭和一一年（一九三六）歿、五九歳。　99

加々爪直澄　かがつめなおずみ

江戸前期の大名。掛塚藩初代藩主。駿河生。通称は甚十郎。号は鶴陽舎一明、名月庵鑑。加々爪忠澄の子。三代将軍徳川家光に仕えて小姓を務めた。寛永一八年父の遺領を継ぐ。自身の知行を合わせ、寛文八年には何者か、加々爪甲斐か泥棒か」と恐れられたという。茶の湯に通じ、小堀遠州に学んだ。延宝九年養子直清の処罰に連座して高知藩預かりとなった。貞享二年（一六八五）歿、七六歳。　131

加賀千代尼　かがのちよに

江戸中期の女流俳人。加賀生。号は草風。表具屋に生まれ、幼い頃から俳諧に親しむ。蕉門十哲の一人各務支考に師事。また画を五十嵐浚明らに学ぶ。五二歳で剃髪して家業を養子に譲り、法名の素園と号す。句集『千代尼句集』や与謝蕪村の女性句集『玉藻集』の序文を著す。安永四年（一七七五）歿、七二歳。　24，25

片山楊谷　かたやまようこく

江戸中期の長崎派の絵師。長崎生。名は貞雄、通称は宗馬、別号に画禅窟など。幼い頃から絵に優れ、円山応挙はその画才を見て驚嘆し、弟子入りを請う楊谷を友人として迎えたという。虎絵においては毛を細い線で丹念に表し、「楊谷の毛描き」と呼ばれるほどの腕前であった。享和元年（一八〇一）歿、四二歳。　132，150，151，171

勝海舟　かつかいしゅう

幕末～明治の幕臣・政治家。江戸生。旗本勝左衛門太郎の長男。名は初め義邦、のち麟太郎、維新後は安芳、通称に安房守、海舟は号。島田見山に剣道を学び、さらに永井青崖について蘭学を修業、のち私塾を開く。軍艦奉行。大政奉還に尽力。維新後、新政府の海軍大輔・参議兼海軍卿・枢密顧問官となる。幕末三舟の一人。明治三二年（一八九九）歿、七七歳。　180

香月婦美子　かづきふみこ

香月泰男の妻。香月泰男美術館の名誉館長を務めた。令和三年（二〇二一）歿、一〇三歳。　180

香月泰男　かづきやすお

洋画家。山口県生。東京美術学校で藤島武二に学ぶ。シベリア抑留の体験をモチーフとした「シベリア・シリーズ」の連作で知られる。第一回日本芸術大賞受賞。勲三等瑞宝章受章。昭和四九年（一九七四）歿、六三歳。　180

加藤英舟　かとうえいしゅう

日本画家。愛知県生。名は栄之助。初め名古屋の奥村石蘭に学ぶ。明治二三年京都府立画学校に入学後、幸野楳嶺・岸竹堂・竹内栖鳳に師事する。また、富岡鉄斎に和漢故実を学んだ。文展、帝展を中心に活躍し、花鳥動物を得意とした。絵画共進会・内国勧業博覧会で褒状を受ける。帝展委員。昭和一四年（一九三九）歿、六七歳。　120

狩野探信守道　かのうたんしんもりみち

江戸後期の狩野派の絵師。狩野探牧守邦の長男。江戸幕府御用絵師の鍛冶橋狩野家の七代目。幼名は千千代。字は清夫。名は守道。号に興斎。百官名は宮内卿、のち式部卿。大和絵を得意とし、朝鮮贈呈屏風などの制作に携わった。法眼に叙せられる。天保六年（一八三五）歿、五一歳。　53

狩野探幽　かのうたんゆう

江戸前期の絵師。京都生。狩野孝信の長男。狩野永徳の孫。鍛冶橋狩野派の祖。尚信・安信の兄。別号に白蓮子・生明等。法号は探幽斎。若くして江戸幕府の御用絵師となり、元和七年には江戸城鍛冶橋門外に屋敷を得て、江戸を本拠地とした。桃山時代からの狩野派様式にやまと絵の柔和さや漢画風も取り入れ、優美で瀟洒な新しい画風・画題を追求した。その個人様式は狩野派全体に徹底され、江戸狩野様式となった。延宝二年（一六七四）歿、七三歳。　45，49，50

狩野常信　かのうつねのぶ

江戸前期の狩野派の絵師。幼名は三位。通称は右近・中務卿。号は養朴・古川等。木挽町狩野家の祖、尚信の子。木挽町狩野家二代。父の歿後、叔父探幽にも画を学び、幕府の奥絵師として活躍。のち法印に叙せられた。古画学習に努め、鑑定した古画の控え等が『常信縮図』として残る。正徳三年（一七一三）歿、七八歳。　137，138

狩野安信　かのうやすのぶ

江戸前期の狩野派の絵師。京都生。幼名は四郎二郎・源四郎、号は永真・牧心斎。狩野孝信の第三子で、長兄には鍛冶橋狩野を開いた探幽、次兄には家督を継いだ尚信がいる。はじめ京都の狩野本家をついだが、やがて江戸に移って幕府の奥絵師となり、中橋狩野家の祖となる。古画の鑑定を数多く行った。英一蝶は弟子に当たる。貞享二年（一六八五）歿、七三歳。　51

狩野養川院　かのうようせんいん

江戸後期の狩野派の絵師。木挽町狩野家七代目。狩野栄川院典信の長男。狩野栄信は子。幼名は栄次郎、名は惟信、別号に玄止斎。画を父に学び、父の跡を継いで幕府の奥絵師となり、法印に叙せられる。江戸城障壁画や京都御所の絵画制作に携わった。文化五年（一八〇八）歿、五五歳。　55

亀田鵬斎　かめだぼうさい

江戸後期の儒学者、文人。江戸生。名ははじめ翼、のちに長興。字は図南、公龍、稺龍、通称は文左衛門。別号に善身堂。書は三井親和、儒学は井上金峨に師事。二三歳で家塾を開いて子弟の教育にあたった。子弟は千人いたといわれるが、松平定信の寛政異学の禁の際に反対論を唱え、閉塾を余儀なくされる。書では草・楷書にすぐれ、とくに草書は鵬斎の蚯蚓流と言われた。良寛から書風の影響を受けたとも言われる。晩年は下谷に移住し、酒井抱一や谷文晁、大田南畝らと親しくした。文政九年（一八二六）歿、七五歳。　35

川合玉堂　かわいぎょくどう

日本画家。愛知県生。本名芳三郎。別号に偶庵。一四歳で京都に出て望月玉泉に学び、のちに円山派の幸野楳嶺に師事。二三歳で東京画壇に転じ、橋本雅邦に学び狩野派を極める。円山・四条派と狩野派を見事に融和させ、独自の画風を打ち立てた。横山大観・竹内栖鳳と共に日本画壇の三巨匠と呼ばれる。東京美術学校教授、帝国芸術院会員などを歴任し、昭和一五年文化勲章受章。昭和三二年（一九五七）歿、八三歳。　77

河鍋暁斎　かわなべきょうさい

幕末～明治の画家。下総生。古河藩士の子。名は洞郁、字は陳之、号は磨・狂斎・是空道人・惺々斎等。歌川国芳に浮世絵を、のち狩野洞白に狩野派を学び、その他あらゆる画風を取り入れて、独自の画風を確立した。仏画から風刺画まで多様なジャンルを縦横無尽に描き尽くした。明治二二年（一八八九）歿、五九歳。　87～91，125

川端茂章　かわばたもしょう

日本画家。東京生。川端玉章の子。名は敬男、字は璞父。兄に同じく日本画家の川端玉雪。父に師事して画法を学んだ。父の創立した川端画学校の教授・副主幹となり、後進の指導にあたった。　8

岸駒　がんく

江戸後期の絵師。金沢生。商家に生まれる。岸派の祖。字は賁然、号は可観堂等。狩野派・沈南蘋派・円山派などあらゆる画風を学び、折衷した。有栖川宮家・京都御所・金沢城の障壁画などを手がけ、各地の大名からの依頼も多かった。「岸駒の虎」と称されるほど、虎の画を得意とした。天保九年（一八三八）歿、八三歳（一説に九〇歳）。　26，168

菊池契月　きくちけいげつ　105，127

明治～昭和の日本画家。長野県生。はじめ児玉果亭、京都に出て内海吉堂についたが、のち菊池芳文の塾に転じ、婿養子となる。文展を中心に活躍、京都画壇に重きを為した。菊池塾を継ぎ、後進の指導にあたる。帝国美術院会員・帝室技芸員・日本芸術院会員。京都絵画専門学校名誉教授。京都市名誉市民。昭和三〇年（一九五五）歿、七七歳。

菊池芳文　きくちほうぶん　121

明治～大正の日本画家。大阪生。本姓は三原、名は常次郎。大坂で表具師三原三郎兵衛の次男として生まれ、のち菊池家の養子となった。四条派の幸野楳嶺に学び、同門の竹内栖鳳、都路華香、谷口香嶠とともに楳嶺門下の四天王に数えられる。特に花鳥画、桜の絵を得意とし、「桜の芳文」と称されて京都画壇で活躍した。京都絵画専門学校教授、文展審査員。日本画家の菊池契月は女婿。大正七年（一九一八）歿、五七歳。

岸連山　きしれんざん　27

江戸後期の岸派の絵師。京都生。旧姓は青木。幼名は徳次郎。名は徳、字は士道、別号に士進、萬象楼など。岸駒に師事し、その婿養子となって岸派第三代を継ぐ。有栖川宮家に仕えた。中島来章・横山清暉・塩川文麟らとともに幕末画壇の「平安四名家」と称された。門下の岸竹堂を婿養子とし跡を継がせた。安政六年（一八五九）歿、五六歳。

木谷千種　きたにちぐさ　117

大正～昭和の日本画家。大阪堂島生。本姓は吉岡、本名英子。夫は近松門左衛門研究家の木谷蓬吟。一二歳で渡米。二年間シアトルで洋画を学ぶ。帰国後、池田蕉園、野田九浦、北野恒富及び菊池契月に学んだ。美人画を得意とし、島成園、松本華羊、岡本更園とともに「女四人の会」を結成。また私塾「八千草会」を主催し、後進の女性画家の指導に当たった。昭和二二年（一九四七）歿、五三歳。

北野恒富　きたのつねとみ　116

日本画家。石川県生。名は富太郎、号は夜雨庵。金沢市十間町の加賀藩士族・北野嘉左衛門の三男として生まれる。幼い頃から画を好み、画家を志して大阪に移って月岡芳年門下の稲野年恒に師事した。のち新聞小説の挿絵画家として活躍し、しだいに「恒富風美人画」が人気を博した。また文展・院展に出品を重ねて美術院同人となり、野田九浦らと大正美術会を、のち大阪美術会を創設するなどして大阪画壇の重鎮として活躍した。主宰した画塾白燿社では後進の育成にもあたり、その門からは中村貞以、生田花朝女らが出た。ほかにも島成園、木谷千種、松本華羊ら大正～昭和初期に大阪で活躍した女性画家たちを積極的に指導、後援したことでも知られる。昭和二二年（一九四七）歿、六七歳。

木下逸雲　きのしたいつうん　69，75，76

江戸後期の南画家。長崎生。名は相宰、字は公宰、逸雲は号。別号に物々子・養竹山房・如螺山人など。医師を生業とし、一方で画を学んだ。はじめ石崎融思の門に入り、のち清人江稼圃に南宗画を学ぶ。ほか四条派や復古大和絵などの画法の研究にも力を注ぎ、鉄翁祖門・三浦梧門とならび長崎三大家と称される。書や篆刻、琵琶の演奏・制作や煎茶など、多芸多才であったという。江戸から船でかえる途中玄界灘で遭難し、行方不明になった。慶応二年（一八六六）歿、六八歳。

紀楳亭　きのばいてい　33

江戸中期の画家。京都生。名は時敏、字は子恵、別号に九老山人・楳華等。与謝蕪村の門に学ぶ。のち近江大津に住し、湖南九老と称する。蕪村の風をよく継ぎ、近江蕪村と呼ばれた。文化七年（一八一〇）歿、七七歳。

木村武山　きむらぶざん　78，84～86

日本画家。茨城県生。名は信太郎。川端玉章に師事する。東美校で岡倉天心の薫陶を受け、新日本画運動を進める。日本美術院の結成に加わり、優れた技巧、色彩感覚を活かした壮麗な花鳥画・仏画を出品し、その中心画家として活躍した。代表作に「阿房劫火」「孔雀明王」等がある。昭和一七年（一九四二）歿、六七歳。

久坂玄瑞　くさかげんずい　145

幕末の長州藩士。名は通武・義助。字は実甫。号は江月斎。変名は松野三平。藩医の家に生まれ、藩校明倫館に学び、吉田松陰門下となる。松下村塾で高杉晋作と共に双璧と称された。江戸・京都を行き来し、同志と尊王攘夷論を唱え、英国公使館焼打ち・下関外国船砲撃等、攘夷活動の先鋒として活躍。禁門の変で敗れ、自決。元治元年（一八六四）歿、二五歳。

熊谷秀子　くまがいひでこ　159

熊谷守一の妻。和歌山生。旧姓は大江。昭和五九年（一九八四）歿、八七歳。

熊谷守一　くまがいもりかず　159，179

明治～昭和の洋画家。岐阜県生。東京美術学校洋画科選科を卒業後、約二年間農商務省の調査隊員として樺太各地を写生してまわった。第三回文展で自画像『蝋燭』の入賞により注目される。のち二科会に参加、第二次世界大戦後は二紀会創立に参加するも同会を退会して以降は無所属。油彩のほか水墨画、書も能くし、その単純化された色と形で独自の様式を確立した。晩年は文化勲章や叙勲を辞退し、「画壇の仙人」と称された。昭和五二年（一九七七）歿、九七歳。

月僊　げっせん　74

江戸中期の画僧。尾張国名古屋生。俗姓は丹家氏。名は玄瑞・元瑞。字は玉成。味噌商の家に生まれ、七歳で得度、浄土宗の僧となる。一〇代で江戸芝増上寺に入って修行を続ける一方、桜井雪館に絵を学ぶ。のち上洛して知恩院に住し、円山応挙や与謝蕪村の影響を受けた山水・人物画を多く描いた。その後画料を蓄えた財を元手に伊勢山田の寂照寺を再興し、また貧民救済に当たった。門下に立原杳所ら。文化六年（一八〇九）寂、六九歳。

高遊外　こうゆうがい

江戸中期の黄檗宗僧、煎茶人。肥前生。煎茶道の祖。本名は柴山元昭。幼名は菊泉。道号は月海。還俗後に高遊外と称し、売茶翁として世に知られた。肥前鍋島氏の家臣の家に生まれ、一一歳で出家。のち僧籍を離れて五七歳で京都に上り、煎茶を商って生活した。池大雅・浦上玉堂ら文人とも親交があった。宝暦一三年（一七六三）寂、八九歳。

児玉果亭　こだまかてい　129

江戸人画家。信州生。幼名を丑松。名は道広、字を士毅。別号に果道人・竹遷山房・果老生・果翁など。信州渋温泉で生まれ育ち、幼少より画や書を好んだ。はじめ佐久間雪窓に南蘋派を学び、のち田能村直入に文人画を学ぶ。内国絵画共進会など中央の展覧会で受賞を重ね活躍した。明治一三年郷里に竹僊山房を開き、菊池契月・青柳琴僊など多くの門人を輩出した。大正二年（一九一三）歿、七四歳。

木島桜谷　このしまおうこく　108，109

明治～昭和の四条派の日本画家。京都生。名は文治郎、字は文質、別号に聾廬・迂人・龍池草堂主人。一六歳で当時京都画壇の大家であった今尾景年に師事する。円山四条派の伝統を組んで写生を基本とし、山水・花鳥・人物、特に動物の描写に優れた。最後の四条派とも称される。儒医・山本渓愚について漢籍を学んでいたことから、故事や史実にも通じた。昭和一二三（一九三八）年歿、六二歳。現在、旧邸宅が櫻谷文庫として保存されている。

小早川秋声　こばやかわしゅうせい　110

明治～昭和の日本画家。兵庫県生。名は盈麿。母方の九鬼子爵家で幼少期を過ごす。京都市立絵画専門学校中退後、谷口香嶠のちに山元春挙に師事し、早苗会に参加。文展・帝展等で活躍した。頻繁に外遊し、東洋・西洋美術の研究につとめる。戦時中は従軍画家として戦争記録画を描いたが、戦後は宗教画を手掛けた。昭和四九年（一九七四）歿、八八歳。

小林清親　こばやしきよちか　128

版画家、浮世絵師。江戸生。幼名は勝之助。元幕臣。洋画をワーグマンに、日本画を河鍋暁斎・柴田是真らに学んだ。「光線画」と称する光と影の表現を取り入れた木版風景画が人気を博した。両国大火後は錦絵の衰退により肉筆画を多く描いた。明治時代の月岡芳年、豊原国周と共に明治浮世絵界の三傑の一人に数えられ、「最後の浮世絵師」「明治の広重」とも呼ばれた。大正四年（一九一五）歿、六九歳。

小林卓斎　こばやしたくさい　73

漢学者・書家。京都生。名は發、字は公秀、通称は卓蔵・熊次郎。卓斎・卓翁・大観・壽菴などと号す。華族山科家の家臣・旧滝口宮人小林佐兵衛の次男。一八歳で書法を貫名菘翁に学ぶ。漢詩・篆刻も能くし、鑑定に精通した。大正五年（一九一六）歿、八六歳。

小堀鞆音　こぼりともと　94

明治～昭和前期の日本画家。下野国安蘇郡生。旧姓は須藤。名は桂三郎、初号琢舟のち雨舟、別号に弦迺舎。若くして父や兄から画を学び、のち上京して川崎千虎に師事した。日本美術院の創立に参加し、また歴史風俗画会を組織。有職故実に通じて歴史画、人物画を能くし、大和絵復興に尽力した。門下に安田靫彦、小山栄達、川崎小虎、尾竹国観など。東京美術学校助教授、文展審査員、帝室技芸員などを務めた。昭和六年（一九三一）歿、六八歳。

小山栄達　こやまえいたつ　172

明治～昭和前期の日本画家。東京生。名は政治。はじめ本多錦吉郎に洋画を学び、のち鈴木栄暁・小堀鞆音に師事して土佐派・狩野派を学んだ。歴史風俗画会で有識故実を研究し、歴史画・武者絵の第一人者となる。文展、帝展で入選を重ね、また安田靫彦・今村紫紅らとともに紅児会でも活動した。昭和二〇年（一九四五）歿、六五歳。

西郷南洲　さいごうなんしゅう　144，146，147

幕末～明治の政治家。薩摩生。名は隆永・隆盛、通称は小吉・吉兵衛・吉之助。一時、西郷三助・菊池源吾・大島三右衛門、大島吉之助などの変名も名乗った。討幕派の指導者として薩長同盟・王政復古・戊辰戦争を指揮する。維新後は政府の参議となり廃藩置県に協力するが、征韓論に敗れて帰郷、不平士族層に推され、西南戦争を起こす。明治一〇年（一八七七）歿、五〇歳。

酒井鶯蒲　さかいおうほ

江戸後期の江戸琳派絵師。名は詮真、号は伴清、獅現、雨華庵、獅子丸など。通称八十丸。築地本願寺の末寺である市ヶ谷浄栄寺住職。香阪壽徴（雪仙）の二男。文政二年酒井抱一の養子となり、雨華庵唯信寺二世を継いだ。早世のため遺作は少ないとされる。天保一二年（一八四一）歿、三四歳。　57

酒井忠以　さかいただざね

江戸後期の播磨姫路藩二代藩主。通称は徳太郎。号は宗雅、銀鵝、一得斎、払袖。酒井忠仰の長男。酒井抱一の兄。祖父である忠恭の養嗣子となり家督を継いだ。武芸の他に絵事や茶道、連歌・俳諧を能くした。寛政二年（一七九〇）歿、三六歳。　176

酒井抱一　さかいほういつ

江戸後期の絵師、俳人。江戸生。姫路藩主酒井忠仰の次男。名は忠因、字は暉真、別号に軽挙道人・鶯村・雨華庵等。法名は等覚院文詮暉真。茶人、俳人としても知られる兄・忠以の影響により、若い頃から俳諧や素養を身につけた。三七歳で出家。その頃から宗達・光琳の築いた琳派様式に傾倒し、そこに円山・四条派や土佐派などの技法も積極的に取り入れた独自の作風を確立し始め、「江戸琳派」の創始者となる。門下に鈴木其一、池田孤邨など。文政一一年（一八二八）歿、六八歳。　35，56

阪上淇澳　さかがみきおう

江戸後期の町人、文人画家。紀州生。名は正行。屋号は岡崎屋。別名は岡鼈。野呂介石に学び、特に墨竹画を得意とした。妻は同じく介石門下の阪上素玉。生歿年不詳。　37

榊原紫峰　さかきばらしほう

日本画家。京都生。日本画家・榊原蘆江の次男。名は安造。京都市立美術工芸学校・京都市立絵画専門学校卒。竹内栖鳳ら京都画壇の重鎮から薫陶を受け、文展を中心に出品を重ねたのち、土田麦僊らとともに国画創作協会の結成に参加。同会解散後は、特定の画壇に属さず制作を続け、生涯にわたり花鳥画を描いた。京都絵専・京都市立美大教授。日本芸術院恩賜賞受賞。昭和四六年（一九七一）歿、八三歳。　123

佐藤一斎　さとういっさい

幕末の儒者・漢学者。江戸生。岩村藩家老・佐藤信由の次男。名は信行・坦、字は大道、別号に愛日楼・老吾軒。大坂で中井竹山に学ぶ。林述斎について昌平坂学問所に入門、のちに塾長となり、山田方谷・佐久間象山・渡辺崋山ら多くの門弟を育てた。著書に『言志四録』等。安政六年（一八五九）歿、八八歳。　154

柴原魏象　しばはらぎしょう

画家。岡山県生。名は魏造。のち希祥と号す。竹内栖鳳に師事する。母校である京都市立美術工芸学校の教諭を勤め、文展・帝展・毎日展等で活躍した。また、俳句を中川四明・河東碧梧桐に学び、俳画を能くした。昭和二九年（一九五四）歿、七〇歳。　164

渋沢栄一　しぶさわえいいち

実業家。埼玉県生。号は青淵。一橋慶喜に仕え幕臣となる。水戸藩主徳川昭武に随行して渡欧、パリ万博などを視察した。のち大蔵省に入省して新貨条例、国立銀行条例等金融制度の整備を行った。第一国立銀行、王子製紙、大阪紡績、東京瓦斯等の設立に関わり、日本の資本主義経済の礎を築いた。昭和六年（一九三一）歿、九二歳。　158，161

島義勇　しまよしたけ

幕末～明治の武士、官僚。肥前佐賀藩士。字は国華。通称は団右衛門。号は楽斎、校陰。枝吉神陽、副島種臣の従兄弟。はじめ枝吉神陽に学び、のち江戸に出て佐藤一斎に陽明学を学んだ。安政三年藩命により蝦夷地、樺太を視察。戊辰戦争には大総督府軍監として従軍。維新後は開拓使判官、秋田県権令などをつとめたが、政府と対立し辞職。江藤新平と共に佐賀の乱を起こし処刑された。明治七年（一八七四）歿、五三歳。　149

下村観山　しもむらかんざん

明治～昭和の日本画家。和歌山生。名は晴三郎。東京美術学校（現東京芸大）卒。狩野芳崖・橋本雅邦に学ぶ。卒業後同校助教授となった後、日本美術院創立に参加し、横山大観・菱田春草と共に活躍、またその再興にも尽力する。大正六年帝室技芸員。やまと絵 琳派 宋元画の手法を究めた。昭和五年（一九三〇）歿、五八歳。　79，81

諸葛監　しょかつかん

江戸中期の画家。江戸生。通称は清水又四郎。字は子文。別号に静斎、古画堂等。家産を破るほど古画を集めて南蘋風を独習し、花鳥画を得意とした。寛政二年（一七九〇）歿、七四歳。　46

宋紫山　そうしざん

江戸中後期の南蘋派の絵師。江戸生。姓は楠本。名は白圭。字は君錫。別号に苔渓。絵師宋紫石の子。父に学び、花鳥山水を能くした。文化二年（一八〇五）歿、七三歳。　42，71

宋紫石　そうしせき

江戸中～後期の画家。江戸生。宋紫山の父。姓は楠本。字は君赫。通称は幸八郎。号は雪渓・雪湖・宋岳。長崎で熊代熊斐・清人宋紫岩に学び、江戸に帰り宋紫石と名乗った。江戸に沈南蘋派の写生的な花鳥画を広めた。平賀源内と交友があり、『物類品隲』の挿絵を描いた。天明六年（一七八六）歿、七五歳。　47

曾我蕭白　そがしょうはく

江戸中期の絵師。京都生。名は暉雄、暉一・暉鷹とも称する。字は師龍、通称を左近二郎、別号に蛇足軒・鬼神斎・如鬼等。本姓三浦。京都の商家に生まれたという。はじめ高田敬輔の画風を学ぶが、室町時代の水墨画を慕い、のち曾我蛇足に私淑して蛇足軒・蛇足十世を称する。奇矯さを誇張した個性の強い画風を確立し、また奇行の逸話も知られる。池大雅とも交友があったという。天明元年（一七八一）歿、五一歳。　19～21

大雅堂定亮　たいがどうじょうりょう

画僧。京都生。大雅堂清亮の子。金玉山房と号した。俳句や和歌を能くした。著に『詩学金粉』。明治四三年（一九一〇）歿、七二歳。　22

高橋応真　たかはしおうしん

日本画家。江戸生。通称は善之介。別号は翠岳。田安藩士高橋栄賢の長男。弟は円山派の画家高橋玉淵。初め画を松本楓湖に、漢籍を服部波山に学ぶ。のち柴田是真に師事し、同門の池田泰真・綾岡有真らと是真十哲、または四天王の一人に数えられる。内国絵画共進会・パリ万国博覧会などで活躍した。日本美術協会審査員。明治三四年（一九〇一）歿、四七歳。　96

高橋泥舟　たかはしでいしゅう

幕末～明治の幕臣・槍術家。江戸生。槍術家山岡静山の弟。本姓は山岡、名は政晃、字は寛猛、通称謙三郎・精一。兄静山について修行し、幕府講武所槍術師範、のちに遊撃隊頭取となり徳川慶喜の護衛にあたった。維新後は東京に隠棲。勝海舟、義弟の山岡鉄舟と並び、幕末三舟と称される。明治三六年（一九〇三）歿、六九歳。　152，153

高光一生　たかみついっせい

陶芸家。石川県生。高光一也の長男。帖佐美行に師事する。日展で活躍し、審査員、のち評議員となる。金沢学院大学名誉教授。金沢文化賞受賞。　126

高光一也　たかみつかずや

洋画家。石川県生。金沢市の真宗大谷派専称寺の住持。高光大船の長男。上京して光風会で中村研一に師事する。帝展・新文展・日展など で活躍し、華やかな色彩の女性像を得意とした。文筆も能くした。日展文部大臣賞・芸術院賞受賞。芸術院会員。文化功労者。昭和六一年（一九八六）歿、七九歳。　126

宝井其角　たからいきかく

江戸前～中期の俳人。江戸生。医師・竹下東順の子。姓は榎本、のち宝井、幼名は八十八、のち源助、号は螺舎・螺子等。書を佐々木玄龍、画を英一蝶、儒学を服部寛斎に、俳諧を松尾芭蕉に学ぶ。蕉門十哲の一人に数えられる。師の没後に開いた江戸座は、俳諧の一潮流となった。その宝永四年（一七〇七）歿、四七歳。　135

武田一路　たけだいちろ

大正期に活躍した日本画家。東京に住した。第四回帝展に出品している。大正拾弐年度改正東西画家格付表（三等席）や大正十五年版東洋画家名鑑にその名がみえる。　173

武市半平太　たけちはんぺいた

幕末の尊攘派志士。土佐藩士。名は小楯。通称は半平太。号は瑞山、吹山など。土佐藩郷士武市半右衛門正恒の長子。剣術に優れ、土佐藩剣術指南を務めた。江戸で尊攘派とまじわり、土佐勤王党を結成する。公武合体派の参政吉田東洋を暗殺し、一時藩論を尊攘に導くも、前藩主山内容堂の勤王党弾圧により投獄され切腹を命じられた。慶応元年（一八六五）歿、三七歳。　148

龍野満黄　たつのまんおう

明治期の日本画家。今尾景年の印譜集『養素斎印譜』を編集した。生歿年不詳。　103

田中柏陰　たなかはくいん

日本画家。静岡県生。本姓は中川、通称は啓三郎。別名を馨、字を淑明、号は柏陰・静麓・柏舎主人・柏樹子・弧立・空相居士。明治一六年、一七歳で京都に出て田能村直入に南画を学び、田能村竹田系の南画の画風を受け継ぎ、濃彩の山水画を得意とした。のちに妻の実家である防府市右田の田中家へ養子として入って田中柏陰を名乗る。以降、画塾・画禅堂を開き多くの後進を育成し、関西南画壇の重鎮として活躍。竹田系統鑑定家の第一人者でもある。昭和九年（一九三四）歿、六九歳。　102

谷舜娟　たにしゅんえい

江戸後期の女流画家。名は志夫子。字を小香。別号に秋香。谷文晁の妹。中田粲堂の妻。山水画などを得意としたとされる。また琴を能くした。天保三年（一八三二）歿、六一歳。　175

谷文晁　たにぶんちょう　35，39

江戸後期の文人画家。江戸下谷根岸生。名は正安。はじめ号は文朝・師陵、後に文晁とし字も兼ねた。通称は文五郎または直右衛門。別号には写山楼・画学斎・無二・二恕。幼い頃から文才に優れ、和歌や漢詩にも通じた。大和絵諸派の画風を学び、中国絵画の影響を受けながら諸画法を折衷した新画風を確立。江戸文人画壇の重鎮となる。画塾写山楼からは渡辺崋山・立原杏所など多くの門人が出た。天保一一年（一八四〇）歿、七九歳。

土田麦僊　つちだばくせん　106

日本画家。新潟佐渡生。本名は金二。鈴木松年・竹内栖鳳に師事。京都市立絵画専門学校卒。同窓の村上華岳・小野竹喬・榊原紫峰らと国画創作協会を結成。同会解散後は官展で活躍した。ルノアール・ゴーギャン等の西洋絵画にも大いに刺激を受け、作風に取り入れた。帝国美術院会員。昭和一一年（一九三六）歿、五〇歳。

寺崎広業　てらさきこうぎょう　77

明治～大正の日本画家。出羽秋田生。字は徳郷、別号に宗山・騰龍軒・天籟山人など。秋田藩の家老の家に生まれ、はじめ郷里で小室秀俊に狩野派を、のち上京して平福穂庵に四条派を学ぶ。南画家菅原白龍にも学び、王蒙に私淑するなどして明治期の南画に新風を吹きこんだ。岡倉天心らに従って日本美術院の創立に参加。東京美術学校教授、日露戦争時には従軍画家も務めている。大正八年（一九一九）歿、五四歳。

徳川慶喜　とくがわよしのぶ　142

江戸幕府第十五代将軍。江戸生。諱は昭致、慶喜。字は子邦。雅号は興山。晩年は一堂と号す。水戸藩第九代藩主徳川斉昭の七男。一橋家の継嗣となり、一橋刑部卿と称す。慶応三年（一八六七）大政を奉還。恭順の意を示すために謹慎して以降は西洋の文物に関心を寄せたり、写真撮影に熱を注いだ。大正二年（一九一三）歿、七七歳。

徳川吉宗　とくがわよしむね　132

徳川幕府八代将軍。紀州藩主徳川光貞の三男。幼名は源六・新之助・頼方、院号は有徳院。宝永二年（一七〇五）第五代紀州藩主となり、藩財政の立て直しに努める。享保元年（一七一六）将軍となり享保の改革を行ったことから、幕府中興の英主と称される。武芸・学問、特に実学を奨励した。宝暦元年（一七五一）歿、六七歳。

土佐光茂　とさみつもち　165

室町後期の土佐派の絵師。土佐光信の子。大永三年（一五二三）には父の跡を継いで絵所預に補任されており、以後半世紀近く活躍した。左近将監・刑部大輔・正五位下を経て天文年間に従四位下に至る。代表作に「当麻寺縁起絵巻」「桑実寺縁起絵巻」「足利義晴像」等。生歿年不詳。

十時梅崖　とときばいがい　72

江戸後期の儒者・書画家。大坂生。名は業・賜。字は季長・子羽。通称は半蔵。別号に顧亭・清夢軒等。儒学を伊藤東所に学び、伊勢長島藩儒となる。また、書を大谷永菴・趙陶斎、画を皆川淇園・池大雅に学び、詩文・篆刻にも長じた。文化元年（一八〇四）歿、五六歳。

長沢芦雪　ながさわろせつ　3～5，29

江戸中期の絵師。山城国淀生。名は政勝・魚、字は氷計・引裾、通称は主計、別号に干洲漁者・干緝。円山応挙の門下に入るが、幾度となく破門されたとの説も残る。しかし応挙はその才も認めており、天明六年和歌山県無量寺の落成にあたり、親しい住職に記念の作を届けるため芦雪を大抜擢したという。芦雪はそこで自身の才能をいかんなく発揮、串本に多くの作品を残した。画風は自由奔放、奇抜そのもので、同時代の曽我蕭白、伊藤若冲とともに「奇想派」などと言われる。寛政一一年（一七九九）歿、四五歳。

中田粲堂　なかださんどう　175

江戸後期の儒者、篆刻家。江戸生。修姓は滕。名は正博。字は学古。通称は平助、平右衛門。別号に万竹楼、二水、酔竹など。谷舜嫉の夫。谷文晁の父である谷麓谷に学んだのち、林述斎に儒学を学んだ。幕府の与力となったが、柴野栗山、大窪詩仏、佐藤一斎、菊池五山などの文人と交流し文雅を究めた。天保三年（一八三二）歿、六二歳。

中林竹渓　なかばやしちくけい　34

江戸末期の南画家。中林竹洞の長男。京都生。名は成業。通称を金吾、別号に臥河居士。初め父竹洞に絵を学び、成年の後はもっぱら元明名家の遺蹟を深く研究した。その画は精緻巧妙、筆致甚だ鋭利であり、殊に柳陰洗馬または牛馬遊牧図董を得意とした。古英傑を慕うがゆえの奇行でも知られ、家屋の構造や座敷のしつらい、外出時の服装まで古武士のごとく装ったという。慶応三年（一八六七）歿、五二歳。

中林竹洞　なかばやしちくとう　32

江戸後期の文人画家。尾張生。医師中林玄棟の子。主に京都で活躍した。名は成昌、字を伯明、通称大助。別号に融斎・冲澹・大原庵・東山隠士など。竹洞は画号。はじめ山田宮常・神谷天遊に南画を学び、のち尾張藩壇のパトロンとして知られる豪商神谷天遊から才を認められ、同家所蔵の古画の模写によって画技を磨く。二七歳で同門の山本梅逸とともに上洛し、頼山陽ら一流の文化人と交流。山水花卉を能くし、特に梅竹に優れた。『画道金剛杵』『竹洞画論』などの画論書など、多くの著書を残す。嘉永六年（一八五三）歿、七八歳。

中村春亭　なかむらしゅんてい　174

幕末の絵師。京都生。名は祥。字は子善。紀広成に学び、人物花鳥を能くした。嘉永年間頃に活躍。生歿年不詳。

那波魯堂　なばろどう　24

江戸後期の儒者。姫路生。通称は主膳。名は師曾。字は孝卿。別号に鉄硯道人。岡白駒に古学を学んだのち朱子学に転じる。阿波徳島藩主蜂須賀治昭に招かれ藩儒となり、「四国の正学」と称された。寛政元年（一七八九）歿、六三歳。

滑川達　なめかわたつし　48

書家。千葉生。内野皎亭の兄。初名は多都二。字は鞠人。号は澹如・禾魚艸堂主人。東京で吉田竹里に入門。三〇余歳で上海に渡り書を学び、楊見山・呉昌碩らと交わった。昭和一一年（一九三六）歿、六八歳。

西山翠嶂　にしやますいしょう　122

日本画家。京都生。名は卯三郎。京都市立美術工芸学校卒。竹内栖鳳に師事し、後に女婿となる。文展・帝展に出品を重ね活躍。審査員にもなった。京都市立絵画専門学校教授、同校校長を務め、また私塾青甲社を主宰。堂本印象・中村大三郎・上村松篁らの画家を輩出した。帝国芸術院会員・帝室技芸員。文化勲章受章。昭和三三年（一九五八）歿、七八歳。

貫名海屋　ぬきなかいおく　155

江戸後期の書画家、儒者。徳島生。本名は苞。字は君茂、子善。別号に菘翁、須静山人等。儒学を中井竹山、画を鉄翁祖門、書を西宣行に師事、空海を慕う。諸国を遊歴、書風を確立した。幕末の三筆の一人に挙げられる。須静塾を開き儒学を教える。文久三年（一八六三）歿、八六歳。

野呂介石　のろかいせき　37

江戸後期の南画家。紀州生。名ははじめ休逸、のち隆。字は隆年・松齢、別号に矮棣・混斎・十友窩・四碧斎など。祇園南海、桑山玉洲と並ぶ紀州三大南画家の一人。京都へ出てはじめ鶴亭に、のち池大雅に師事。同郷の桑山玉洲や大坂の木村蒹葭堂とも交流をもった。四七歳で紀州藩くの召されて絵師となり、精力的に活動した。那智瀑布図を得意とし、多くの門人を輩出。長町竹石・僧愛石と共に三石と称される。文政一一年（一八二八）歿、八二歳。

橋本雅邦　はしもとがほう　77

幕末～明治の日本画家。江戸生。狩野晴川院養信の高弟で川越藩御用絵師、橋本養邦の子。幼名は千太郎、のち長卿。別号に克己斎・酔月画会等。狩野芳崖と共に狩野勝川院雅信門。維新後、フェノロサ・岡倉天心指揮のもと、狩野派の画法に洋画の技法を取り入れる等、従来の日本画の革新を試みた。また、東京美術学校発足に尽力、同校教授となる。のちに辞して日本美術院を創立、菱田春草・横山大観・下村観山・西郷孤月・川合玉堂ら近代日本美術を代表する作家を育成した。帝室技芸員。明治四一年（一九〇八）歿、七二歳。

橋本関雪　はしもとかんせつ　113～115，169

日本画家。兵庫神戸生。明石藩儒橋本海関の長子。竹内栖鳳に師事。四条派に南画を加味した新南画を大成する。詩書歌にも秀でる。朝日賞受賞。帝展審査員・帝室技芸員・帝国美術院会員。フランス政府よりシュバリエ・ド・レジョン・ド・ヌール勲章を授与される。昭和二〇年（一九四五）歿、六一歳。

橋本禅巌　はしもとぜんがん　160

曹洞宗の僧。大分県生。大正八年最乗寺住職の新井石禅老師について出家得度。翌年、師の総持寺貫首就任に伴い、総持寺に上山する。大正一四年には太祖六百年大遠忌の首座を務める。昭和一〇年、山本五十六の親友である駒形宇太七が新潟県長岡市御山町に創建した堅正寺の初代住職となった。著書に『道元禅師宝慶記講話』等。平成六年（一九九四）寂、九六歳。

畑仙齢　はたせんれい　94

日本画家。京都生。名は経長。字は子益。別号に彩雲、半象外史など。鈴木百年に学び、百年門下の四天王と称される。師の歿後は東京に住し、彩雲画塾を開く。日本画会幹事、富山県工芸学校教頭などをつとめた。昭和四年（一九二九）歿、六五歳。

英一蝶　はなぶさいっちょう　58～60

江戸中期の絵師。京都生。名は信香。剃髪後に多賀朝湖と名乗る。字は駿、通称を助之進。号に朝湖・牛麿・翠蓑翁等。名を英一蝶、画号を北窓翁に改めたのは晩年、流罪を赦されて江戸に帰ってから。寛文六年頃に一家で江戸へ移り、周囲に絵描きとして の才能を認められて狩野安信に学ぶがのち破門。その一方、暁雲の号で俳諧師としても名高く、宝井其角、松尾芭蕉らと交友を持った。その後は入牢、三宅島配流と二度の憂き目に遭いながらも江戸に帰還。人気絵師として数々の大作を手がけた。享保九年（一七二四）歿、七一歳。

原在中　はらざいちゅう

江戸中後期の絵師。京都生。名は致遠、字は子重、別号に臥遊。石田幽汀、のち円山応挙に学んだといわれる。寺々を訪ねて元、明の古画を独学。さらには写生を基調に、土佐派や円山四条派、岸派などを融合した精密な装飾的画風を生み出し、原派と呼ばれる一派を形成した。有職故実の研究にも優れ、有職人物画を得意とした。天保八年（一八三七）歿、八歳。　14

菱田春草　ひしだしゅんそう

日本画家。長野県生。名は三男治。東美校に入り、橋本雅邦に学ぶ。卒業後同校で教鞭をとる傍ら、帝室博物館のために古画を模写する。のち大観と印度から英米仏に遊び、パリで個展を開き好評を博する。大観・観山・武山と共に雅邦門下の四天王と言われ、「朦朧体」の無線描法によって日本画の近代化を促した。明治四四年（一九一一）歿、三八歳。　78

人見少華　ひとみしょうか

明治～昭和にかけての日本画家。京都生。本名は勇市。はじめ田中一華に師事し日本画を学び、また俳人上田聴秋のもとで書僕となった。京都市立絵画専門学校卒。大正一〇年の日本南画院創立以降、同展を中心に活躍した。のち大東南宗院・平安書道会等にも参加。花鳥画を得意とし、また池大雅の研究でも知られる。昭和四三年（一九六八）歿、八一歳。　48

日根対山　ひねたいざん

江戸後期の南画家。和泉国日根郡中庄村湊生。名は盛長。字は成信、小年。別号に茅海、錦林子、酔墨庵など。幼少より画を好み、はじめ岸和田で土佐派の桃田栄雲に学び、また幼馴染であった泉佐野の豪商里井浮丘の縁で大坂に出て岡田半江に南画を学ぶ。のち京都に移り貫名菘翁に師事した。鉄翁祖門に私淑し、主に山水画を得意とする。明治二年（一八六九）歿、五七歳。　73

日比野白圭　ひびのはっけい

江戸後期～明治の日本画家、尾張藩士。名古屋生。名は斎。通称は金吾。別号に竹翁、風声居。画を竹田景甫、鈴村景山、森高雅、中林竹洞らに学び、人物画をもっとも能くした。第一回内国絵画共進会、第二回内国絵画共進会などで褒状を受賞し、尾張画壇の中心として主に郷里周辺で活躍した。門下に森村宜稲ら。大正三年（一九一四）歿、九〇歳。　124

平田郷陽　ひらたごうよう

日本人形作家。東京浅草生。本名は恒雄。初代平田郷陽の長男で、父から写実風の人形製作を習得。人形芸術向上運動に尽くし、帝展、文展、日展等で活躍した。浮世人形ともよばれる衣装人形製作で知られ、昭和三〇年に重要無形文化財保持者に認定された。昭和五六年（一九八一）歿、七七歳。　162

広瀬濠田　ひろせごうでん

官吏・法学者・儒学者。豊後生。名は貞文。広瀬青邨の子。家塾の咸宜園で漢学を修めたのち慶應義塾本科で法律学を研究する。千葉県属、司法属、大審院書記を歴任した。青邨の歿後に帰郷し公立教英中学校校長となる。また、咸宜園の塾主として再興を図った。他に衆議院議員、田田町長等を務めた。大正三年（一九一四）歿、六二歳。　75

広瀬台山　ひろせたいざん

江戸中期の南画家。美作津山藩士。津山藩大番組を務めた広瀬義平の子。名は清風。字は穆甫。通称は周蔵・雲太夫。別号に書画斎・白雲窩。大坂生。大坂在住期に池大雅の高弟・福原五岳に就いて画技を学んだ。のち江戸に移り、谷文晁、浦上玉堂、浦上春琴、増山雪斎等、多くの文人達と親交を持った。晩年は津山に隠居。山水画や詩書を能くし、また人物、花鳥図にも傑作を残している。文化一〇年（一八一三）歿、六三歳。　100

藤井澄湖　ふじいちょうこ

鴨下澄湖。日本画家。東京生。名は中雄。東京美術学校で学んだのち松本楓湖に師事する。巽画会、文展、帝展に出品。戦後は出版美術家連盟会員として挿絵や装丁を手掛けた。巽画会評議員。昭和四二年（一九六七）歿、七七歳。　177

藤本鉄石　ふじもとてっせき

幕末の尊攘派志士。備前生。名は真金、字は鋳公、別号を鉄寒士・都門売茶翁等。幼い頃より詩書画に親しみ、兵学を学び、武術にも優れた。二五歳で岡山藩を脱藩して諸国を遊歴、尊攘派の浪人と交わり、天誅組総裁の一人となった。文久三年（一八六三）戦死、四八歳。　111

不染鉄　ふせんてつ

大正～昭和の日本画家。東京生。本名は哲治、のち哲爾。別号に鉄一。東京小石川の光円寺住職・不染信翁の子。京都市立絵画専門学校（現京都市立芸大）卒。在学中の大正八年帝展で「夏と秋」が初入選。以後も帝展に伊豆を題材とした作品などを出品。大正一二年日本美術展では「海村」で銀牌を受賞した。戦後は画壇を離れ、正強高等学校長などを務めつつ、奈良や海を題材とした作品を描いた。昭和五一年（一九七六）歿、八四歳。　131

保科正之　ほしなまさゆき

江戸前期の大名。幼名は幸松丸。江戸幕府二代将軍徳川秀忠の四男。三代将軍徳川家光の異母弟。信濃高遠藩主保科正光の継嗣となり、のち会津藩主となる。家光の歿後はその遺命により四代将軍徳川家綱の補佐として幕政に参与。信奉していた朱子学と神道に基づく政治を行った。寛文一二年（一六七三）歿、六三歳。　140

細井平洲　ほそいへいしゅう

江戸中期の儒学者。尾張知多生。本姓は紀氏。名は徳民、字は世馨。通称は甚三郎。別号に如来山人。折衷学派の中西淡淵に学び、江戸で私塾嚶鳴館を開く。米沢藩主上杉鷹山に招かれ、藩政改革、藩校興譲館の創設に尽力。のち尾張藩に招かれて藩校明倫堂総裁となり、藩内教化に努めた。弟子に高山彦九郎ら。享和元年（一八〇一）歿、七四歳。　130

細川高国　ほそかわたかくに

室町時代の武将。法号は道永、のち常桓。細川政元の養子。政元が養子澄之らに暗殺されると、細川澄元と共に澄之討伐に功を挙げた。永正五年細川澄元を追放し、前将軍足利義稙を将軍に復帰させて管領となり幕府の実権を握った。大永元年には義澄の子義晴を新将軍としたが、澄元の子晴元らに攻められ、摂津尼崎で自刃した。享禄四年（一五三一）歿、四八歳。　134

堀利熙　ほりとしひろ

幕末の幕臣。大目付堀利堅の子。初名は利忠。通称は織部。号は有梅、梅花山人。母は林述斎の娘。母方のおじに鳥居耀蔵、林復斎、従兄弟に岩瀬忠震がいる。老中阿部正弘に登用され、嘉永六年に目付、ペリー来航の直前に海防掛となる。嘉永七年日露和親条約調印前に国境設定の調査として樺太・蝦夷地の巡回を行い、箱館奉行に就任。のち外国奉行、神奈川奉行を兼務し、各通商条約締結や横浜港開港に尽くした。万延元年プロイセン使節オイレンブルク一行と応接し交渉を主導するも、プロイセン側との秘密交渉が露見して幕府の追及を受け、条約締結直前に自刃を遂げた。万延元年（一八六〇）歿、四三歳。　38

増山雪斎　ましやませっさい

江戸中期～後期の大名。第五代伊勢長島藩主。江戸生。名は正賢。字は君選。号は雪斎、玉園、蕉亭、巣丘山人など。従五位下河内守。第四代藩主増山正賛の長男。書画に長けた文人大名として「雪斎」の号で知られる。趙陶斎から唐様の書を、木村蒹葭堂から画を学ぶ。また清の沈南蘋を残しに私淑し、山水人物から花卉草虫に至るまで数多くのすぐれた作品を残した。一方で学も好み、大坂から十時梅厓を藩儒に招いて藩校文礼館を創設。ほか春木南湖ら多くの文化人を登用し、文治の発展に尽力した。文政二年（一八一九）歿、六六歳。　143

松平容保　まつだいらかたもり

幕末の大名。陸奥会津藩第九代藩主。号は祐堂、芳山、翠柳。通称は銈之允。京都守護職・肥後守・美濃高須藩松平義建の子で会津藩主松平容敬の養子となった。京都守護職に任命されて京都の治安維持と公武合体に尽力した。禁門の変では尊攘急進派の長州藩を一掃したがのちの鳥羽伏見の戦いに敗れ、さらに会津戦争で討幕軍に抗戦するも降伏。謹慎を解かれてのちは正三位に叙され、日光東照宮宮司を務めた。明治二六年（一八九三）歿、五九歳。　118

松林桂月　まつばやしけいげつ

明治～昭和の日本画家。山口県生。本名は伊藤篤、字は子敬、別号に香外・玉江漁人。野口幽谷に師事。日本南宗画会・日本南画院・白寿会等の結成にも携わり、小室翠雲と共に近代南画の発展に貢献した。帝国美術院会員・帝国芸術院会員・帝室技芸員。文化勲章受章。昭和三八年（一九六三）歿、八六歳。　119

窠本芳樹　まつもとほうじゅ

窠本一洋の父。京都生。名は吉次郎。号は芳樹。菊池芳文に絵を学んだ。大正一五年（一九二六）歿、享年未詳。　1, 2, 6, 28

円山応挙　まるやまおうきょ

江戸中期の絵師。円山派の祖。丹波国桑田郡穴太村に農家の次男として生まれる。一〇代の頃に京都に奉公に出た先で眼鏡絵に出会い、主人の勧めもあって石田幽汀に狩野派の画法を学び始め、画家としての頭角を現す。写生に最も重きを置いたことでも知られる。夏雲、雪汀、一嘯、仙嶺、僊斎、星聚館、鴨水漁史、攘雲、洛陽仙人と号する。応門十哲を始めとした数々の門人たちの指導にもあたった。寛政七年（一七九五）歿、六三歳。　6

円山応震　まるやまおうしん

江戸後期の絵師。京都生。字は仲恭。別号に百里、星聚館、方壺など。円山応挙の次男木下応受の子として生まれ、のち伯父の円山応瑞の養子となる。円山派の三代目。人物・山水・花鳥を能くし、祇園祭郭巨山見送「唐山水仙人図綴織」月鉾水引「双鸞霊獣図刺繍」下絵を書いたと言われる。子がなく、円山応立を養子として円山派四代目とした。門下に国井応文ら。天保一一年（一八四〇）歿、五二歳（一説に天保九年歿、四九歳）。　12

円山応岱　まるやまおうたい

江戸中期～後期頃の円山派の絵師。福岡市博物館所蔵の「幽霊図」が知られる。生歿年不詳。

円山応立　まるやまおうりゅう　15

幕末～明治の円山派の画家。京都生。友禅工寺井久次郎の子。養拙流書法の祖寺井養拙の玄孫。幼名は勝治郎、のち多都雄と称し主水と改める。字は子道、別号に方壷・米斎等。はじめ禁裏御所官人島田近江守徳直の猶子となって、円山応震の養子となり同家四世を嗣いだ。安政年間の内裏障壁画制作に参加。人物花鳥を能くした。明治八年（一八七五）歿、五九歳。

皆川淇園　みながわきえん　66

江戸中期の儒学者。京都生。淇園は号で、名は愿（げん）、字は伯恭、通称は文蔵。別号に節斎・有斐斎等。易学について研究を深め、「名」と「物」との関係を解釈する開物論を唱えた。「老子」「荘子」「列子」「論語」など多くの経書に対する注釈書を著す。文化三年には学問所弘道館を開き、多くの門人を輩出。詩文や書画にも優れた風流人で、山水画は円山応挙に劣らずと評されたほどであった。応挙・呉春・岸駒・長沢蘆雪らと交わる。文化四年（一八〇七）歿、七四歳。

村上華岳　むらかみかがく　181

日本画家。大阪生。名は震一。京都市立絵画専門学校の同窓である土田麦僊、榊原紫峰、小野竹喬、野長瀬晩花と国画創作協会を設立。殊に仏画の研究に力を注いだ。持病の喘息悪化のため芦屋、次いで神戸へと移り住んでからは京都の画壇とは距離を置いて制作に取り組んだ。昭和一四年（一九三九）歿、五一歳。

村上佳子　むらかみよしこ　181

村上華岳の妻。村上華岳初代所定鑑定人。

森川許六　もりかわきょりく　135

江戸前～中期の俳人。彦根藩士。名は百中。字は羽官。通称は五助。別号に五老井・風狂堂・菊阿弥等。蕉門十哲の一人。画は狩野安信に学び、画法を俳諧の師である芭蕉に教えたという。芭蕉歿後はその継承者と自負し、『俳諧問答』『風俗文選』等を著した。正徳五年（一七一五）歿、六〇歳。

森琴石　もりきんせき　69

幕末～大正の南画家。兵庫生。名は熊。字は吉夢。号は金石、のち琴石。別号は鉄橋道人、栞石、雲根館等。鼎金城に学び、金城歿後は忍頂寺梅谷に師事する。また漢学を妻鹿友樵に学ぶ。漫遊を好み、詩・書も能くした。また、響泉堂の名で銅版画家としても活動した。文展審査員、大正一〇年（一九二一）歿、七九歳。

森狙仙　もりそせん　7～9

江戸後期の絵師。出生地は不詳ながらも、大坂で活躍した。名は守象、字は叔牙。初号は祖仙、のち文化四年狙仙と改める。大坂で狩野派の山本如春斎に学び、如春斎の死後は円山応挙に影響を受けて写実性を重視するようになり、猿を描かせては並ぶものなしと賞されるまでに至った。実兄森周峰を始めとする森派の祖。周峰の子であり円山応挙の高弟でもあった森徹山を養子に迎えた。文政四年（一八二一）歿、七四歳。

矢澤弦月　やざわげんげつ　97

日本画家。長野県上諏訪生。本名は貞則。上京して久保田米僊、のち寺崎広業に師事。東京美術学校卒。その後は松屋百貨店意匠部に務めながら作画を続け、主に官展で活躍した。川崎小虎、蔦谷龍岬らと霜天会を創立。昭和一三年（一九三八）には日本画院設立に参加している。帝展・日展審査員・参事を歴任。東京美術学校、日本美術学校でも教鞭をとった。昭和二七年（一九五二）歿、六六歳。

山口華楊　やまぐちかよう　107

大正～昭和の日本画家。京都生。名は米次郎。友禅職人山口安之助の二男。西村五雲の門に入って絵を学び、京都市立絵画専門学校に入学。第一〇回文展に初入選。同校卒業と同時に竹内栖鳳の私塾竹杖会の研究会にも参加して研鑽を積む。花鳥画、とりわけ動物画に優れた。師西村五雲の没後はその一門で画塾晨鳥社を結成し、これを主宰した。一方で母校およびその後身の京都市立美術専門学校で長く教鞭をとり、後進の育成にも力を注いだ。日本芸術院会員。文化功労者。文化勲章受章。昭和五九年（一九八四）歿、八四歳。

山口素絢　やまぐちそけん　10，141

江戸中期～後期の円山派絵師。京都生。姓は橘、字は伯陵、のち伯後、通称を武次郎、号は山斎。円山応挙門下、応門十哲の一人。優美な和美人を得意とし、唐美人画を良くした兄弟子駒井源琦と並び称された。円山派画風の普及に努め、往時の上方における時様風俗画を多く描いた。花鳥画にも優れる。息子に同じく絵師の山口素岳がいる。文政元年（一八一八）歿、六〇歳。

山本五十六　やまもといそろく　160

明治～昭和の軍人・海軍大将。新潟県生。海軍兵学校・海軍大学校卒。のちアメリカに駐在、ハーバード大学に留学。海軍大学校教官、海軍航空本部技術部長、海軍次官等歴任。ロンドン軍縮会議予備交渉に海軍代表として出席、また、三国同盟に反対の姿勢を見せるも、連合艦隊司令長官に親補され、ハワイ真珠湾作戦を立案・指揮。前線の海軍基地を視察中に米軍機に撃墜されて戦死。国葬に付された。昭和一八年（一九四三）歿、六〇歳。

山本琴谷　やまもときんこく　36

幕末の画家。石見生。津和野藩士吉田芳右衛門の子。のち山本幾連の名跡を継いで山本姓を名乗る。名は謙、初め幽谷幾英、字は子譲、杉亭と号し、後改めて琴谷、癡々斎と号した。幼少の頃より絵事を好み、津和野藩家老で渡辺筆山とも親交のあった多胡逸斎に絵を学び、江戸に出てからは桜間青崖に師事。転じて筆山の門に入り山水人物を学ぶ。筆山歿後は高久靄崖、椿椿山にも学んだ。嘉永六年津和野藩の絵師となる。明治維新後は東京両国に移住。明治六年（一八七三）信州上田からの帰途に病歿、六三歳。

山本光一　やまもとこういつ　170

江戸琳派の絵師。江戸生。名は信敬、徳基。号は花明園、晴々、靖々、皓々、露聲など。酒井抱一の弟子山本素堂の長男。雨華庵三世酒井鵞一の門人で、雨華庵四世を継いだ酒井道一は実弟。儒学者山本北山は曽祖父に当たる。明治初頭に日本の美術品や物産品を世界へ輸出した起立工商会描くなど、中心的存在として活躍した。第一回内国勧業博覧会において鈴木其一の次男誠一や、其一門人の稲垣其達らと共に製作下絵を漆器図案で花紋賞を受賞。のち金沢へ移り、北陸の各地で図案絵画教師として指導、また日本画や加賀友禅の若手作家の育成にあたった。門下に石崎光瑤ら。明治三八年（一九〇五）頃金沢を去ったという。

山元春挙　やまもとしゅんきょ　104

日本画家。滋賀膳所生。名は金右衛門。別号に一徹居士。初め野村文挙に学び、のち森寛斎の門人となる。円山派の伝統に通暁し、風景画・山岳画に秀で、竹内栖鳳と共に京都画壇の重鎮として活躍した。別邸として琵琶湖畔に建てた蘆花浅水荘は、現在重要文化財に指定されている。早苗会画塾主宰。京都絵専教授。帝国美術院会員・帝室技芸員。昭和八年（一九三三）歿、六三歳。

山本梅逸　やまもとばいいつ　30，31

江戸後期の文人画家。名古屋生。彫刻師山本有右衛門の長男。名は親亮。字は明卿。別号に梅佚・春園・玉禅・梅華・天道外史等。幼少の頃から画を好み、その才を認められて、尾張藩の パトロンであった豪商神谷天遊のもとで中林竹洞に出会い、ともに京都に出て多くの名画を模写するなどして研鑽を積んだ。頼山陽・貫名海屋らと親交があり、詩歌・煎茶・鑑識も能くした。晩年尾張藩の御用絵師となる。安政三年（一八五六）歿、七四歳。

横山清暉　よこやませいき　65

江戸後期の四条派の画家。京都生。初名は暉三、字は成文・奇文、通称は主馬・詳介、号は霞城。初め呉春、ついで松村景文に学び、中島来章、岸連山、塩川文麟らと共に、幕末画壇の「平安四名家」と評された。花鳥・山水・人物を得意とした。元治元年（一八六四）歿、七三歳。

与謝蕪村　よさぶそん　23，136

江戸中期の俳人、絵師。摂津生。姓は谷口、のち与謝、俳号を宰鳥・宰夜半亭等、画号を四明・朝滄・長庚・春星、晩年謝寅と号する。宋画学に俳諧を学び、絵は各派・中国画・舶載画譜により画法を修得し、独自の画風を固め、池大雅と共に活躍した。俳画の大成者として知られる。松尾芭蕉、小林一茶とともに江戸俳諧の巨匠の一人と称された。天明三年（一七八三）歿、六七歳。

渡辺崋山　わたなべかざん　48

江戸後期の武士、画家、蘭学者。名は定静、通称は登、字は伯登・子安、のち崋山。号に寓画堂・全楽堂など。三河国田原藩士。家老として藩校成章館復興などの藩政改革に努めた。佐藤一斎に儒学を学び、蘭学にも親しんで高野長英・小関三英らと尚歯会を結成した。また年少の頃より生計を支えるために画業を志し、金子金陵、谷文晁に学んで特に肖像画にその才を発揮し、西洋画の技法を取り入れて写実的画風を確立した。のち『慎機論』を著して幕政を批判したことにより蛮社の獄で捕らえられ自刃。天保一二年（一八四一）歿、四九歳。

渡辺玄対　わたなべげんたい　43

江戸後期の画家。本姓は内田。名は暎、字は廷輝、別号に松堂・林麓草堂。渡辺湊水の養子となる。江戸生。養父および中山高陽に絵を学び、谷文晁とも師友として交流した。明末清初の画家藍瑛に私淑し、主に山水画・花鳥画を能くして江戸画壇で活躍した。文政五年（一八二二）歿、七四歳。

渡辺省亭　わたなべせいてい　101

幕末～大正の日本画家。江戸神田生。本姓は吉川。名は義復。通称は良助。一六歳で菊池容斎に入門し、洋風表現を取り入れた独自の花鳥画を能くした。同門には松本楓湖や梶田半古、鈴木華邨らがいる。のち起立工商会社で輸出工芸の下絵図案を描き、明治一一年のパリ万博に出品で銅牌を、同一六年のアムステルダム万博では銀牌を受賞し、国内はもちろん欧米でも高い評価を得た。ほか木版画、雑誌挿絵も手掛けた。大正七年（一九一八）歿、六八歳。

渡辺南岳　わたなべなんがく　11，13，15

江戸後期の円山派の絵師。京都生。名は巌、字は維石、通称は猪三郎、小左衛門。応門十哲の一人。画をはじめ源琦に、ついで円山応挙に学ぶ。また尾形光琳に私淑し、美人や鱗魚の画を得意とした。後年江戸に出て円山派の画風を伝え、谷文晁・亀田鵬斎・酒井抱一らと交流した。弟子に大西椿年、中島来章らがいる。文化一〇年（一八一三）歿、四七歳。